

---

# 真《チェンジ！！》リリカルなのは

早乙女研究所

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真≪チェンジ！≫リリカルなのは

### 【Nコード】

N0280M

### 【作者名】

早乙女研究所

### 【あらすじ】

どこにでもいた高校生、橋本清志。しかし、ある日突然、彼は流竜馬に転生させられてしまう。

襲いかかる敵。少女たちとの出会い。今日も彼は『悪』として、ただひとり戦い続ける…（処女作です。至らない点があると思いますが、よろしくお願いします）

## プロローグ（前書き）

文章力ないな。書いてて思いました。

## プロローグ

俺は橋本清志。オタクほどではないが、アニメを愛する高校二年生だ。そんな俺が、今日、死んだ。交通事故だった。トラックに轢かれそうになった女の子を助けようとして、俺は意識より先に飛び出していた。親父。お袋。ごめん。そして身代りに突き飛ばした女の子。助かってくれよと願い、俺は意識を手放した。

生きてた頃、死んだら天国か地獄に行くのかと思ってたが、なんてことない。真っ暗。本当の闇そのものだった。自分の手を見ようとしたが、俺の肉体はなく、本当に何も見えないし、何も聞こえない状況が続いていた。さすがにこの状況が一時間近く続くと（時間なんてわからないが）、気が狂いそうになった。それからどれほど時間がたったのだろうか。そのときだった。

『おい。そこに誰がいるのか？』

人がいる！！低い男の声だ。精神的にかなりやられていたこともあり、俺は声に向かって走り出した。

「おーい！ここだーっ！！」

…いや、黙ってりゃよかったと死ぬほど後悔した。

『ほお…ゲッター線に選ばれた男って…お前か。』

そうだ、忘れない。忘れるわけがない。俺の目の前にいるこの男を。昨日アニメで観たこの男を。狂暴という言葉が体現したようなこの男を。そう、竜の名を冠す戦士。その名は…

「流…竜馬…?!！」

## プロローグ 竜の鼓動

『へえ。俺を知っているとはな。』

なんか感心しているそぶりの竜馬（チェンゲ版？服装的に）に俺は聞いた。

「なあ、教えてくれ。ここはどこだ？俺は本当に死んだのか？」

表情を全く変えず、目の前の竜馬は言った。

『後の質問から答える。お前は今、生きてもいないし、死んでもいない。』

「どういうことだ？」

『つまりこういうことだ。お前の肉体は、今死んでいる。心臓が動いていなければ、脳も活動していない。ここまではいいか？』

「わかった。次は？」

『だが、今お前は橋本清志としての記憶を、まだ持っている。つまり精神体はまだ生きているってことさ。ちなみに今のお前の状態で、現世に来ちまった奴のことを幽霊と呼ぶ。』

(そ、そうなのか…)

軽く死の概念を語り始めたこの男に、内心清志は冷や汗をかいた。

「ということは、ここは現世と死後の世界との狭間なわけだな。」

『それが前の質問の答えだ。さて、お前の話は聞いてやった。今度は俺の番だ。いいか?』

俺は無言でうなづく。すると竜馬は邪悪な笑みを浮かべて言った。

『手前には、もう一度現世に帰ってもらおう。…流竜馬としてな。』

え…?今、何て言った?

「お、おい…もう一度言ってくれ。よく聞こえなかった。」

『うるせえな…いいか、一度しか言わないぞ。お前の肉体は死んだ。トラックに轢かれたんだ。どんな風になったか…大体想像がつかうか?』

「…ああ。食っているときには聞きたくねえ話だな。それで?」

『そんな状態で生き返ってみる。インベーターみたいで気持ち悪いじゃないか。』

「おいおい!理由ってそれがよ!」

『冗談だ。まあこれも理由の一つだが…ある世界のゲッター線が、お前を必要としているんだ。』

「ここで、俺は違和感を覚えた。さつきから気になっていたが、俺はこんなしゃべり方をしていなかったはずだ。思えば声も変わっている。そう、俺の体が…」

「流竜馬に…なっている…って、どういうことだよ！おい！俺にわかるように説明しろ！！」

『あーあーわかったわかった。…並行世界って言葉、聞いたことがあるだろ？』

「ああ。アニメなんかでよくあるよな。で？」

『ありとあらゆる可能性…それこそ無限に近い数の並行世界が存在するなかで、唯一、全世界に共通するものがあるんだ。…何だと思っ…』

「ん…宇宙の存在？」

『残念ながらはずれだ。答えは…ゲッター線だ。』

「ゲ、ゲッター線?!」

『そうだ。一つの世界のゲッター線が、お前を必要としているんだ。ちなみに拒否権はない。』

「そーかよ…じゃあ、ひとつ最後に聞いてくれないか…?」

『おい、いいのか？ゲッター線なら可能だが、お前…』  
「…俺はつくづく親不孝者だ。そうさせてくれ。」

俺は奴に頼んで、前世の世界のすべての人々から、俺の記憶を消してもらったことにした。親や親友をこれ以上悲しませたくなかったからだ。自分が死ぬのならともかく、生きているのなら話は違う。この日から「橋本清志」は、完全に死ぬ。俺の記憶の中だけに存在する男になるのだ。

「んで、その世界ってどんなところだ？ゲットマシンに乗って戦うことになるのか？」

『いや。もつときついで。』

そういうと、あいつが二つのメリケンサックを俺に突きつけてきた。拒否れそうもないからもらっておく。すると奴は、衝撃的なセリフを言い放った。

『お前のデバイスだ。そいつには、仲間を守るために散って行った、ひとりの男の魂がこめられている。大切にしろよ。』

デバ…えっ?!

「お、おい！デバイスってまさかリウゼえ！とつとと逝きやがれ！…！」  
『うぎゃあああああああああああああ？！…！』

思いつきり蹴られ、俺は下へ下へと落ちていく。消えゆく意識の中、俺が見たもの。それは…



「ストナアアアアサアアアアンシャアアアアインツ  
！！！！」

一つの光が宇宙を裂き、星ひとつを消滅させる。その飛んできた先にいたものは

「真ゲッターロボ…だと?!!」

真ゲッター1がオープンゲットの掛け声とともに分離すると、白い、ドリルを搭載した機体になる。

「チエンジゲッター2!!」

いずこかへと飛んでいく真ゲッター2。俺が唾然としている間にも、奴は近づいていた。

「チエンジドラゴン!!」

オリジナルと量産機のゲッタードラゴンが、はびこる敵を切りはら  
らい、

「シャアアアアアイン・スパアアアアアク!!!!」

ゲッター真ドラゴンのシャインスパークが宇宙を斬り、

「サンダ〜ボンバ〜!!!!」

ゲッターアークの雷が、敵を薙ぎ払う。

「す…すげえ…凄すぎる…!!」

目の前の光景に、思わず声が出てしまう。しかしその直後、俺の視界を黒い影が覆った。

「な、何!!」

振り向く先にあったのは…黒く巨大な手。指の隙間から奥をうかがうと、頭部がひしゃげ、潰れたゲッターロボだと分かった。ゲッター1に近いフォルム。黒く光る機体。そうしている間にも手は閉じていき、俺に残された空間は狭くなっていく。

「や、やめろっ! た、助けてく…!」

巨人の拳から血が噴きあげ、それと同時に巨人自身も消えていく。

「ゲッター…エンペラー…あれが…!!!!」

それが俺、橋本清志の言った最期の言葉だった。

こうして俺は、この世に二度生を受けた。そう、

黒き竜の戦士として…

原作：石川賢と永井豪  
都築真紀

制作：緒方龍作

チエンジ！！  
真リリカルなのは

戦え。明日のために…

## プロローグ（後書き）

最近、あまりいいことはありません。今朝、登校中に鳩の足が道路におっこつていました。ああゆうの朝見るとテンション下がりません？どつでもいいけど今日はクソ暑かった。そして今も暑い。ああ、これ書いたら寝るか。

チェンジ1 竜馬がいく(前書き)

フツ…第1話だ!!

## チエンジ1 竜馬がいく

「ん…ここは…?」

俺が再び目を覚ますと、そこはベッドの上だった。ゆっくりと起き上がり、俺は竜馬からもらったメリケンサックを手を取った。

『よお。目え覚めたみたいだな。』

おお。しゃべるぞ、こいつ。デバイスだしな…って、なんでからつきし日本語なんだ?

「まあな。…えつと、お前、何てえの?」

するとメリケンは胸(?)を張って言った。

『わしは巴武蔵。話は奴から聞いたぜ。よろしくな、相棒!』

え?武蔵?な、ななな

「なんだとおおおおおお?!!」

次の瞬間、俺はもっと凍りつく羽目になった。そう

ガチャ

このドアから出てきた

「あ!気づいたんか?心配してたんよ?」

このちびだぬきのせいで…

チエンジ1 竜馬がいく

デバイスと聞いて、ある程度理解はしていた。俺の転生先はリリカルなのは世界だと。俺は個人的にSTRIKERSあたりの時系列になると踏んでいたのだが、いやいや。現実には常に斜め上を行くものだ。目のまえにいる彼女、確実に八神はやてだろう。だが、大きな問題が三つある。一つは彼女が車椅子だということ。二つは彼女以外の人物がこの部屋にいないこと。そして最後のとどめは…

4月7日 今日の日付(てへっ)

…はやての誕生日は6月4日。後で年齢聞こう。

「あー、悪いな。突然だけど…ここはどこだ？」

「…話しくいんやけど、兄ちゃん、空から降ってきたんやで。」

空?!…全く記憶にない…

「わたしが冷蔵庫の整理してたらな、ベランダででっかい物音がしたんや。見に行ったら、兄ちゃんがひっくり返ってたわけや。怪我してなかったみたいやったけど、その様子じゃ…大丈夫そうやな。」

竜馬は自分の経緯を聞いておどろいたが、それ以上にそんな怪し

さバツグンの男を、家にあがらせたこの少女におどろいたのだった。

「悪い。何から何まで世話になった。ありがとう。」

はやてに礼を言つて、俺はここから去ろうとした。さすがにこれ以上迷惑をかけたくないし、ぶつちやけ闇の書関係に巻き込まれるのはごめんだ。そしたら俺は呼びとめられた。

「なあ、兄ちゃん。聞いちゃ悪いと思うんやけど…」

「どうした、もったいぶらずに言えよ。」

「ひよっとして…家…」

すべて聞かなくつても理解した。俺には家がない。これは大きな問題だが、この日本で餓死することはないだろう。やっぱりいいよと断つて、こんどこそこの家を後にしようと思つたそのときだった。

ぎゅっ

引つ張られる感触。俺の袖を、はやてがぎゅっと掴んでいた。

「…兄ちゃんつて、普通の人じゃないんやろ？」

「えっ？な、何言ってるんだ？」

はやては袖をつかみながら、うつむいて言つた。

「そりゃそうや。このマンション、下から登ることはできん。空から降ってきた人間が、普通なわけないやろ。」



「このとき、俺ははじめて気付いた。袖を握る手が、わずかに震えていること…」

「お前…」

「…わたし、小さい時からひとりぼっちで、さみしくて、足も悪くて、それで…」

泣いている。俺は体をかがめて、そつと肩に手をやった。

「えへへ…おおきにな。そんなとき、まるで小説の主人公みたいに兄ちゃんがやってきて、その…」

俺は、自然とはやての頭をなでていた。

「…さみしかったんだな。」

「…兄ちゃん。これは無茶なお願いやけど…ええか？」

「ああ。…言ってみろ。」

「兄ちゃん…うちに来てくれへんか？」

のちに闇の書が起動し、八神はやてには4人の家族が出来ることを、俺は知っている。ここで彼女といっしょになったら、100%闇の書事件に関わることになるのを俺は知っている。けど、けど…

「おう。よろしくな。」

俺は、首を横には振れなかった。

「よしっ！じゃあ、自己紹介やな。」

ちよつと目が赤いが、笑顔で奴は言った。

「わたしは八神はやて。よろしゅうな。兄ちゃんは？」

ここまでされたんだ。俺は堂々と、新たな名で名乗った。

「俺は流竜馬。よろしくな、はやて！！」

そんなことで八神家の一員となった俺、流竜馬。近いうちに武蔵も紹介しようと思っっている。その日の夕方、俺は何気なくテレビのニュースを見ていた。しかし、そのニュースを見て、俺は固まった。それは

『昨日の深夜、海鳴市の 動物病院周囲のコンクリート壁等が何者かによって破壊されているのが見つかりました。事件を目撃した、もしくはそれについての情報を知っているという方は…』

某N氏が、魔法少女はじめちゃった翌日だったみたいですね。NさんとFさんのO・H A・N A・S H I に巻き込まれんようにすることが、俺、流竜馬の一番の目的になったということは、言うまでもない。

## チエンジ 1 竜馬がいく(後書き)

学校のエアコンが壊れました。暑くてやってられません。今日体育の授業が二時間ありました。死んだ…

## チェンジ2 竜馬とはやての日常(前書き)

ふはははは！！私は帰ってきたぞ！さあ、読者諸君も共に世界最後の日を迎えようではないか！！

## チエンジ2 竜馬とはやての日常

「おう、はやて。おはようさん。」

「おはよう、リヨウ兄。へへ…ごめんな。」

「何、お安いご用です…よっと!」

俺、流竜馬が八神家に来てから、すでに1週間経った。なんだかんだいって、うまくやっている。朝、はやてをベッドから降ろすのは俺の仕事だ。それと前世の記憶を頼りにし、掃除洗濯といった一通りの家事はこなせるようになった。車椅子の少女に居候させてもらってる男が、家事までやってもらうわけにはいかない。

『お前のその顔で家事とかいわれてもなあ…リヨウ。』

「ムサシ。次言ったら殺す。つかぶっ壊す。」

## チエンジ2 竜馬とはやての日常

俺と武蔵は、互いに「リヨウ」、「ムサシ」と呼び合うことにした。はじめは俺も「武蔵さん」とか言ってたが、武蔵が

『なんか調子狂うんだよなあ…ムサシでええぞ。そのかわりわしも「リヨウ」って呼ぶから、お前のこと。』

とか言ってたので、決定したわけだ。お互い会話しているうちに、

身の上話になった。どーやら武蔵は、エンペラーの中である程度デバイス云々の話をされていたらしく、俺のことを受け入れてくれた。ここで驚いたことは、この武蔵は、チェンゲ版ではなく、原作漫画版の武蔵だったということだ。いろいろ聞いたが、最後ゲッター1で自爆してから何も覚えていないという。一応ゲッターロボG、真ゲッターロボ、ネオゲッターロボ、ゲッター真ドラゴンの名を出してみたが、あいつはてんで分からないようだった。

「ムサシさん、お留守番頼んだで。」

『いいえ、大したことありません。この巴武蔵、はやてちゃんのためならばっ！』

「…お前、ミチルさんがどうのこうのって言ってなかったっけ？」

見ての通り、はやてが普通にデバイスの武蔵と話している。武蔵のことは、しばらくはやてに黙っておくつもりだったが、この馬鹿がでかい声(?)で『ゲッターロボ!』を歌いやがったから、怒鳴って黙らせたが…このやりとり全部はやてに見られて(中略)…となったわけだ。はやてが俺を「リヨウ」と呼ぶのはそのためだ。

「んじゃ、いつてくる。」

「いつてくるで〜!」

『おう!車には気をつけるんじゃぞ!』

買い物。英語で言うとShopping。ドイツ語で言うと…知らない。ともかく、俺が流竜馬となって初めての買い物になったわけだ。んで、何買ったかというと…

「もやしと大根とキャベツ…」

「だって安かったやないか。」

他の世界の竜馬より社会的な一般常識が比較的ある俺ではあるが、さすがにこれはないと思う。確かに15円のもやしと100円のキャベツと大根見せつけられたら、俺だっておお安いとなるだろう。でもだ、読者諸君。流竜馬が車椅子の少女押しながら、片手にスーパーのレジ袋持っているところ想像してみてください。…周囲の視線が痛い…

「なにぼーっとしてるん？ムサシさん待たせとるから、はよ帰らんとあかんで。」

「あ、悪い。んじゃ行こうか。」

こうしてると…全然似てねえが兄弟みてえだ。俺は一人っ子だったから分らないが、もし妹がいたらこんな感じだったのだろうか？…いや、そんなわけないか。

「なあ、はやて。俺今思ったんだけどさ…」

「ん…？何や？」

「…キャベツと大根ともやしで何作る気だ？」

「あ…」

…「…いつ今までどうやって生きてきたんだ？」

## チェンジ2 竜馬とはやての日常（後書き）

すまない…すまないと思っているんだっ！！いくら試験開けとはいえあまりにも短いし、内容がイマイチすぎる…俺の中の悪魔の口車に乗ったのが悪かった。次回はついにゲッターが登場するぞ。諸君よ！括目して待てっ！！



チェンジ3 迫る危機！チェンジ！ゲッターロボ！！（前書き）

1000円以上のカップラーメン買う気になれないのは俺だけではないはずだ。

チェンジ3 迫る危機！チェンジ！ゲッターロボ！！

チェンジ3 迫る危機！チェンジ！ゲッターロボ！！

『ゆけ〜（ゆけ〜）カーンタームロボ』

「平和の戦え〜ん士いいい〜」

アニメを見ながら歌っているはやて。何を隠そう、カンタムロボがリリカルなのは世界にあること自体に驚きだ。

「好きだなあ…カンタムロボ。」

「そやな。好きな度合いで言うたら…ゲキガンガー3とええ勝負やな。」

「ふーん…ゲキガンガーねえ…って、ゲキガンガー?!」

「なんや？知つとるんか？」

その後は頭の痛くなる話ばかりだった。なんか…これってネタ？と思うような番組がやっていたり…だが、今ここで語ることはない。

「ねえ、リョウウ兄。カンタム終わったら、図書館行きたいんやけど…ええか？」

「ああ、いいぜ。お、そうだ。ムサシ！」

『なんだ、リヨウ。』

「お前っていつも留守番ばかりだからさ…今日は一緒に行こうぜ。」

『ありがとうな、リヨウ。あ、はめるときは、もうひとつの方もつけてくれよ。』

デバイスの武蔵。はやてにばれたときは、俺はただの人格のある道具としか説明しなかった。当然、あいつは魔法もゲッターも知らない。話す必要はなかったし、変にあいつを混乱させたくなかったからだ。でも、あいつは武蔵を俺と同様、兄のように慕っている。武蔵はうれしがってたし、俺も嫌な気持ちにはならない。なんだかんだいって、武蔵は完全に八神家の一員になっていた。

道のアスファルトを、太陽が照らしている。桜並木を通ると、その先に図書館が見える。家からも近いから、俺が来る前は一人で来ていたそうだ。ここであいつは、ライトノベルを借りていく。前世ではほとんど読んだことはなかったが、こいつが『ひぐし』読んだときは、ぶったまげたものだった。そしてあいつは、シャとひぐしとマリア様がなんたらかんたらを借りて、出てくるのである。

「いやー、この前借りられてたんや、4巻。」

「それはよかった。んで、帰っちまっついていいの？」

「うーんと…あ、あかん！そっぴやマヨネーズ切れてたやないか！…ええか？」

ほら、またはじまった。いいよいよといつて、俺はいつものスパーへ向かう。まあ、いつものことだ。こいつは、某天使のマークのカロリーハーフ以外使わない主義なので、いつもそれを買うのだ。

「ねえ、リヨウ兄。ちょいええか？」

「ん？どうした、はやて。」

はやてが車椅子を止めたので、俺も止まった。

「今気付いたんやけど…さっきから誰もおらん気がするんやけど、気のせいかな？」

そうだ。言われてあたりを見渡したが、人が一人もない。いくら平日とはいえ、昼間に人っ子ひとりいないなんて、絶対おかしい。これじゃあ、まるで…

『リヨウ！はやて！気をつける！！』

武蔵の言葉で、俺はさっと身構える。すると突然、地震が俺たちを襲った！！

「きゃっ？！！」

「はやてっ！大丈夫だ。動かねえように押さえてやるから…」

『リヨウ！下だ！急いで下がれ！！』

「わ、わかった！！」

俺は武蔵に言われるがまま、全力ではやてをバツクさせる。すると

「な、なんや、あれ?!」

轟音とともに、大地が割れて、巨大な植物の根のようなものが飛び出す。人間の作り上げた人工物をなぎ倒し、瞬く間に空にそびえる巨大樹が、何本も地中から飛び出したのだ!!

「うわっ?! た、助けてリヨウ兄!!」

巨大樹はさらに大きくなろうと、蔓と根を伸ばして地面を食らう。見る見るうちに目の前は覆い尽くされ、ついにはやての車輪に絡みついた。はやてがあぶない!!

「ど、どうすれば…!!」

『リヨウ! 転送魔法を使え!』

「ま、まで、ムサシ。ここで使ったら魔法がはやてに…」

一瞬ためらう俺を、武蔵が叱責した。

『ばかやろう! はやてちゃん死んじまったらどうするんだ!! 四の五の言ってる暇はねえ。』

「…わかった! どうやるのか教えてくれ!」

俺はからみつく鳶を引きちぎり、はやてを引き離す。俺とはやては入れ替わるようになり、俺の体は鳶に覆われた。

「ああっ！リヨウ兄！！」

「はやて！俺たちは絶対生きて帰ってくる！だから家から絶対出るんじゃないぞ！！」

さすがはやてを振り切り、武蔵に視線を向ける。

『家をイメージしろ、リヨウ！』

「おう！」

家。俺たちの帰る場所。帰らなければならない場所。俺は強く念じる。

『よし、いいぞ。《ゲッターワープ》と叫べ！後は自動で何とかしてくれる。』

「ようし！はやて、今帰すからな。ゲッターワープ！！」

「え…?!ちよっ、リヨウ兄…！！」

魔法陣が浮かび上がり、はやてが光とともに消える。

『よし、転送成功！』

武蔵の声に安心するが、今度は鳶が首を絞めてきた。

「ぐっ…！ムサシ！セットアップの方法を教えてください！」

『…違うな』

「あ?!」

千切つても千切つてもからみつく鳶。このままじゃ本当に危ない。

『ゲッターチェンジだ!!』

「何言つてやがる!んなことどうでもいいだろ!」

『いいじゃねえかよ。細けえこと気にすんな。よし、お前の戦う姿を思い浮かべろ!!』

「わかった。…いいぞ!ムサシ!!」

原作で高町なのはのやつてたやつだ。俺は心を落ち着かせる。

「太陽は宇宙ウチウチに、竜は天に。」

すると俺の両手のデバイスが輝き始める。

「熱き炎はこの拳に。不滅の魂この胸に!!」

俺は最後の力を振り絞り、鳶を引きちぎる。

『ようし!あとはお前の自由だ。黒き竜の戦士よ!ここまで言やあわかんだろ?』

「いくぞ!!」





『くるぞ、リヨウ！』

「ああ、わかってる！ゲッターアアアウイングッ！！」

黒いマント、ゲッターウイングが飛び出し、ゲッターが急上昇する。

「ぐおっ？！すげえGだぜ…体がバラバラになりそっだ！！」

『大丈夫かりヨウ！参っちまったか！！』

心配する武蔵。しかし、竜馬の口元は緩み始めた。

「誰が参るかよ…」

ぐつと体を起こすと、ゲッターの眼に光が宿った！

「こんなに…こんなにコーフンしたの…はじめてだぜ！！！！」

『そいつはよかった！でも、敵さんは相手してほしいってよ！！』

マツハ2で急上昇したゲッター。一瞬で竜馬の見る景色は変わった。眼下に広がる光景。町を食らい尽くそうとする巨大樹！竜馬の心には、怒りがわいてきた！

『リヨウ！接近戦をしかける。クロスレンジで一気に叩け！』

「ゲッタートマホークで叩き潰してやる！！」

再び巨大樹へ飛ぶゲッター。その巨大な幹に狙いを定める。

「うおりゃあああああー!!」

ズシャツ！ズシャツ！！

巨大な枝が一太刀で切り落とされる。だが、その数は無数だ。

「ちっ！きりがねえな。」

『リヨウ。ゲッタービームを使い！これなら勝てる!!』

「ようし!!」

襲いかかる蔦や枝を、ゲッタートマホークとゲッターレーザーで薙ぎ払い、上昇する。

『今だ、リヨウ!!』

「これで終わりだ！ゲッターアアアアアッ!!」

両腕を上げるゲッター。すると腹に丸いビーム砲が現れ、エネルギーをチャージする！

「ビイイイイイイムッ!!!!」

真紅の光線、ゲッタービームが巨大な幹をなぞる。するとビームの当たったところがひび割れ、中から光があふれる。ぴしぴしと音を立て、何本かの木が崩れかけたそのとき

ズワアアアアアッ！！ ドワオオ…！！

大爆発が起き、巨大樹は粉々に吹き飛ぶ。六本は生えていたであろう木は、もう3本しか残っていなかった。

『やった！リヨウ、とどめだ。もう一回ゲッタービームだ！』

だが、竜馬は武蔵の呼び掛けに応じなかった。

『おい、リヨウ。奴を倒すなら今だ。早く手を打たないと手遅れになっちまうぞ。』

「いや、ムサシ。…あとは、あいつがやってくれろさ。」

竜馬は遙かかなたのビルを指差す。その直後、桃色の光が輝き、みるみるうちに巨大樹は消滅していった。

『あつ！魔力反応…だと？！しかもでかい！！』

「そういうことだ。さ、見つかると面倒だ。帰るぞ。」

ゲッターウイングをはためかせ、我らがゲッターは空を飛ぶ。だが今の竜馬の頭の中は、帰ったらはやてになんて説明しようかということだけだった。

チェンジ3 迫る危機！チェンジ！ゲッターロボ！！（後書き）

うん：もっと伸ばしてもよかったかな？ゲッターの登場。でもゲッターほど日常の書きにくい作品はないんですよね。というわけで次回からバンバン竜馬には暴れてもらいます！

## 主人公設定資料集 (前書き)

自分で小説書いてて、ちょっと説明不足なところがあると思ったので、主人公の流竜馬とゲッターロボサイドの登場キヤラクターの設定集を作りました。え？本編書けって？まあまあそんな石投げないで…

## 主人公設定資料集

流竜馬 CV・石川英郎 登場作品：オリジナル（外見は真ゲツ  
ターロボ 世界最後の日）  
チェンジャー！

橋本清志が死後、転生した男。前世の記憶をそのまま受け継いでいるが、流竜馬として生き返ってしまったため、非常に短気で狂暴な性格になっているが、根っこは子供に優しく、頼れる兄貴分な性格である。身長は185センチの長身で、姿かたちはチェンゲ版竜馬そのもの。竜馬といっても実際の戦闘経験は浅いので、ゲッターの本来の力をまだ引き出せていない。せいぜい力任せに殴る程度の格闘能力である。

デバイス 巴武蔵 CV・辻親八 登場作品：ゲッターロボ（原作漫画版）

竜馬は二つのデバイスを合体させることでチェンジ（セットアップ）する。メリケンサック型のデバイスで、竜馬が右手にはめているのが武蔵である。武蔵は原作漫画版で、死後、エンペラー内部でデバイスになった。声のイメージはチェンゲの武蔵。普通、インテリジェンス・デバイスは、ミッド式は英語、ベルカ式はドイツ語が音声になっているが、なぜか武蔵は常に日本語で会話する。理由はかんたんで、本人が英語をしゃべれないから。本作では三枚目キャラで、竜馬の良きパートナーとしてともに成長していく。

??? CV・??? 登場作品：????

武蔵がかたわれと称す左手のデバイスには、人格がインストールされていない。クロノ同様、無人格で操作している。ちなみに仮の

プログラムの名前は、HAYATO。何か秘密がありそうだが……！！

ゲッター線 登場作品：ゲッターロボサーガ

簡単にいえば意志を持ったエネルギー。石川先生亡き今、その全貌を人類が知るのとは不可能である。…悲しいね。

ゲッターロボに出てくる無茶な物事は、すべて「ゲッター線のおかげ」で片づけることができる。そのため、実に便利な（作り手にとって）エネルギーである。この世のすべてがゲッター線のおかげだといっても過言ではない。サルがヒトに進化したのも、恐竜が絶滅したのも、鳩山政権が一年持たなかったのも、相撲界で不祥事が相続いているのも、サッカーのワールドカップが四年に一度なのも、作者の足の裏に今虫さされがあるのも、すべてゲッター線のおかげなのである。類義語として「ゴルゴム（又はクライシス）の仕様だっ！」がある。（こっちは外れると大恥をかくので、てつを以外は使わない方が無難である。）

ブラックゲッター

登場作品：真ゲッターロボ チェンジー 世界最後の日

竜馬がバリアジャケットを展開した姿。しかしあらゆる魔法形態と隔絶しているため、バリアジャケットと称してよいのかという点については不明。装甲の素材は、本家と同じゲッター合金製。大きな特徴としては、全身をゲッターの装甲で覆っているため、顔などを相手に見られないこと。武装はブラックゲッターと同じものを使用できる。本家は焦げて黒くなったが、本作でははじめから黒。なぜブラックゲッターになったかという理由については、前世で竜馬の最も気に入っていたゲッターがブラックゲッターだったから。…本音は真ゲッターにするといくらなんでも竜馬が強くなりすぎしてしまうからと、単に作者がブラックゲッターが好きだから。

格闘戦を得意としているが、他の魔導師たちと違い、シールド系魔法とバインド系魔法を使用できないため、防御を捨てた戦いを余儀なくされるのが弱点である。

## 武装

ゲッターワープ（初使用 第3話）

転送魔法。チェンジしていない状態でも使える、便利な技。ただし一度に転送できるのは一人までで、人間以外のものや、竜馬自身を転送することはできない。

ゲッターウイング（初使用 第3話）

背中から飛び出す、黒いマント。裏地は赤。これを展開すると、飛行が可能になる。（とはいっても、出さずに戦ったところを見たことがない。）最高速度は、マッハ2。しかし、そのGは竜馬の体に直接負荷するため、そこまで速度は出せない。移動だけではなく、防御に使うことも可能。また、マスタークロスのように敵に投げつけ攻撃することも可能。

ゲッタートマホーク（初使用 第3話）

右肩に収納されている、ゲッター合金製の戦斧。大抵の有機物は、一太刀で切断できる。最も多く使う武器のひとつで、ゲッターロボを代表する武器でもある。これを投擲する『トマホークブーメラン』という技もあり、かなりの頻度で使われる。

ゲッターレザー（初使用 第3話）



ほとんどのゲッター1に相当する機体の腕に装着されている刃状の武器。レザーの原義は『かみそり』。初代ゲッターは両腕に装備されていたが、ブラックゲッターは左腕だけ。ただしその切れ味は、コンクリートだろうが鋼鉄だろうが、バターののように切断してしまう。ゲッタートマホークとセットでよく使用される。

ゲッタービーム（初使用 第3話）

ゲッターロボの決め技でもあり、ブラックゲッター最大の必殺技。非殺傷設定などというなものはないので、当たれば目標を瞬く間に殲滅する。ただしある程度の威力の調整は可能なので、むやみやたらに相手を殺すことにはならないだろう。…多分。

その威力は計り知れず、通常出力でもデイバインバスター並み、最大出力ではスターライトブレイカと同じか、それ以上の威力を持っている。だがその最大の脅威は、これだけの威力でありながら、発射までの時間がわずか5秒程度と、極めて短い所にある。また、発射を待って、溜めながら戦闘をすることも可能である。ただし射程が短いのが難点である。

スパイラルゲッタービーム（初使用 第8話）

ゲッターウイングを身にまとい、ゲッタービームを乱射させる技。戦闘に乱入するときや敵に突撃するときには竜馬が使った。実は原作では出てこない技であり、チェンゲのみに登場した貴重な技である。しかし何故ゲッターウイングを体に巻いただけで、ゲッタービームがあんな飛び方をするのか？それは『ゲッター線のおかげ』としか言いようがない。

ゲッタースパイクブレード（初使用 第8話）

ブラックゲッターのブン殴る攻撃。大層な名前が付いているが、スパロボ用に付けられた名前である。拳の棘とゲッターレザー、そして異常なまでの腕力で敵を引き裂き、微塵にする。ブラックゲッターの残虐ファイトを語る上で欠かせない技である。その残虐さはEVA初号機の暴走モードを超えるとか超えないとか噂されるほど。向こうは喰っちゃったけど、こっちはゲッタービームで消毒。衛生的である。

## オリジナル設定

### 量産型フェイト

プレシア・テストロツサがプロジェクトFATE内で作り上げたフェイト・テストロツサのプロトタイプ。よって顔かたちは当然だが、身長、体重、利き腕、ランク、デバイス、バリアジャケット、そのすべてがフェイト・テストロツサと全く同じで統一されている。余計な感情を持たないようにと脳に電子頭脳が組み込まれており、敵を殲滅するか行動不能になるまで戦い続ける。ある程度まとまった数をプレシアが命令することができ、たとえそれが自爆命令だったとしても正確に行動に移す。基本的にプレシアの命令<敵の殲滅<拠点の防衛といった順序で行動するため、味方に攻撃する命令だったとしても何のためらいもなく実行する。また、言葉を一切発さず、無言、無表情で襲撃してくる。たとえ腕が千切れても、顔色一つ変えようとしない。

### 量産型バルディッシュ

オリジナルと異なり、インテリジェンス・デバイスではない。そもそもその必要性が全くない。外見はオリジナルと全く同じ。大技

であるフォトンランサー・ファランクスシフトといった魔法を使用することができる。当然威力も同等である。

### 量産型アルフ

プレシア・テスタロッサは使い魔の量産も行っていた。フェイト同様、すべての脳に電子頭脳が埋め込まれているので、プレシアがまとまった数に命令することができる。ただし、たとえばフェイトからアルフに命令を切り替えると、アルフに命令している間はフェイトに命令することはできない。しかし電子頭脳で大方行動しているので、差支えがない。フェイトに比べて火力と機動力が劣る分、接近戦と防御力に長ける。フェイトよりも拠点防衛用に適しているため、プレシアもそのつもりで配置しているようだ。描写の影響でフェイトの方が多い印象を受けるが、実際にはフェイトと同じくらいの数が存在する。

### NEW!!ビッグバン・パンチ

ユーノ・スクライアの唯一にして最強の打撃攻撃。技が完成していれば、核爆発を超えるほどの威力を生み出せる、人類最強の技である。本来は自分の命と引き換えに打つ技であり、ユーノの放ったビッグバンパンチがどれほどの威力だったかについては明確ではない。元ネタは『ジャイアントロボ THE ANIMATION 地球の静止する日』の中条長官の同名の技。寸止めとはいえ、その威力はキノコ雲が上がるほどの威力。また、静かなるスクライアの異名も彼の二つ名から。はたして彼とユーノの関係は…？

### ゲッターロボサーガ

ゲッター<sup>セイント</sup>聖ドラゴン 登場作品：真ゲッターロボ（原作漫画版）

正体不明の超巨大ゲッターロボ。漫画版とOVAに登場したが、全くの別の個体と考えられる。本作で登場したのは原作漫画版の方。無数のゲッターロボGによって体が構成されているが、真ドラゴンのようにオープンゲットした後のゲットマシンの状態で合体しているのではなく、ゲッターGそのままの形で浮き上がってるように描写されていた。その全貌は明らかにされておらず、推定ではあるがおよそ2、3万メートルはあると考えられる。自分の意思のあるような描写がされているが、それが聖ドラゴンのものなのか、それともパイロットのものかについては明らかではない。

真ゲッターロボ 登場作品：真ゲッターロボ、ゲッターロボ號（いずれも原作漫画版）

従来のゲッターロボを遥かに上回る性能を持つゲッターロボ。これに並行して建造されたのがアークである。燃費を馬鹿みたいに食い、ゲッターロボGを増幅器に使っても、エネルギーを満タンにすることができなかつた。漫画版ではストナーサンシャインっぽい技を一回だけ使ったが、技名の呼称はなく、威力も大したことはなかった。漫画版、スパロボ版、真対ネオ版、チェンゲ版で若干の外見の違いがあり、技も異なっている作品もある。特に違いが激しいのが真ゲッター2であるが、ここでは多く語らない。漫画版の真ゲッターロボは竜馬や號を敵もろとも取り込み、暴走して火星と一体化した。恐らくこの真ゲッターが悠久の年月をかけて進化したのが、ゲッターエンペラーの素体となるものになったと考えられる。

## 主人公設定資料集 (後書き)

と、こんな感じでしょうか。新設定が出次第どんどん更新していきます。これからもチエンなのをよろしくお願いします。

## チエンジ4 魔法使いと穴（前書き）

何でだろうねえ。何故こうなった。ぶっちゃけ3話と繋げても良かった気がする。でも俺は後悔しないぞ。なぜなら…5話はもうちよっといい出来だからっ!!

## チエンジ 4 魔法使いと穴

「…ただいま、はやて。」

ドアをそつと開ける。なかなか心の整理がつかない竜馬だったが、意を決してドアを開けた。すると

「リヨウ兄!!」

はやてが泣きじゃくりながら抱きついてきた。…どうしよう…

## チエンジ 4 魔法使いと穴

「…そういうことだ、はやて。こんなこと、今すぐ信じるとは言わない。…でも、どんなことがあっても、俺とムサシはお前の味方だ。…それだけは忘れないでくれ。」

俺ははやてに、魔法について教えた。闇の書のこととは当然伏せておいたが、俺たちが異世界の人間であることや、さっきの巨大樹はジユエルシードという魔法世界の産物が暴走したものだと言明した。もともとこんな話、俺だって信じられなかったんだ。はやてがにわかには信じるとは正直思っていなかった。でも、あいつはこう言った。

「…まあ空から降ってきたって時点で普通の人間やないと思ってたけど…魔法って、もっとこう…マハリクマハリタヤンバラヤンヤンヤンな女の子やテクマクマヤコンな和田な人が使うもんちゃうん？」

「…世代が古すぎる。それと和田な人はないだろ。せめて月に代わってなんたらかんたらとかさ…」

『おいおい、それも古くねえか？』

まあ、こんな風に冗談言えるようになったから大丈夫だ。なんとなくがあいつも納得してくれたみたいだったし…なんか最後「深く考えたら負けや」とか聞こえた気がしたけど…いいんだよな？

「…よっしゃ、終わりや！リヨウ兄！見せい！」

「何を？」

「だーから！ま・ほ・う！リヨウ兄の見せてくんろ。」

何度拒否つてもしつこく言ってくるから、近所の人には絶対秘密の条件で、見せてやることにした。カーテンを閉め、薄暗いリビングで武蔵を手取る。

「わくわく」

子供みたいに（実際子供なんだが）目を輝かせてるはやて。こいつは妙に大人みたいなところがあると思いきや、急に子供っぽくなる時がある。

「ちっ…しゃーねーな…行くぞ、ムサシ！」

『おう、いいぞ、リヨウ。…声は控えめにな。』





折角だから気合入れたら…天井に刺さった?!急いで抜いたけど…跡が残ってる!!

「す、すまんはやて!!マジで俺が悪かった!!」

「ゲッターはええなあ…めっちゃかつけえわあ…」

『だろ?はやてちゃんもゲッターの良さが分かるなんて…わし…感激じゃあ!!…ぐすっ』

…いいよな?穴の一つや二つ空いてても。

## チエンジ 4 魔法使いと穴（後書き）

なんか前回ゲッターがばしばし暴れるとか書きちゃったけど、その違いに愕然。でも次回は竜馬が違う意味で暴れるので…よろしくっ！！

## チエンジ 5 白と黒の邂逅（前書き）

書いてて竜馬らしさを一番表現できた回だと作者は思う。

## チェンジ5 白と黒の邂逅

「おい、はやて。オロメミンC冷えてる?」

「ありゃ?無いで。入れんとあかんよ。ちなみにオロメミンCじやなくて、オロメミンCドリンクや。」

はやてに魔法がばれてから早1週間。別に何も起きず、俺はぐーたらな日々を送っていた。

『一般世間では、お前みたいなのをニートつつんだぞ、リョウ。』

「うるせえ。若干気にしてること言うな。」

「まあ、自覚があるならまだええな。はい、もやし買ってきて。」

今日は俺一人でもやしを買いに行くことになった。働くにしても戸籍がないから駄目だし、本人はいいって言っても、何もしないわけにはいかない。…そこらのチンピラから巻き上げるか?

## チェンジ5 白と黒の邂逅

「はい、いらっしやいませ…ひっ!」

「…もやし二袋。」

「あ、あの…お一人様一袋まで…あ、いや、何でもないです!す

みません！」

新人のアルバイトの子か。しかしお前、客に対して『ひっ！！』  
はないだろ、『ひっ！！』は…なにはともあれ、もやしを買ったか  
ら、俺たちは帰ることにした。別に寄るところもないし、早く帰るに  
越したことはない。また化け物でも出てきたら大変だ。というより  
面倒。

「それじゃ、近道使いますか。」

『お、今日も通るんだ。』

スーパーの道沿いにはパチンコ屋がある。ここの裏には細い道が  
あつて、大通りへの抜け道がある。ここを通ると2、3分早く着け  
る。細い道だし、ちょっとガラの悪いのも通つてるから、はやてと  
行くときにはまず通らない道だ。俺の目の前にも、いかにもやくざ  
つて感じのパンチパーマが、子分引き連れて歩いている。これで強  
くなつた気にいるんだから片腹痛い。ああゆう連中に目を合わせち  
やだめだ。サルと同じだから、いつ切れて突つかかってくるかわか  
らない。パンチパーマが大通りに出て、右に曲がる。はやての家は  
左だ。俺が左に曲がるうとしたその時だった。

「おい！どこ見て歩いてんだ、ゴルア！！」

うつわ…月並みすぎるパターン。でも実際見たのは初めてだ。

『おい、リョウ。どうする？』

「おいおい、ムサシ。俺たちは警察じゃないんだぜ？いいじゃね  
えかよ、ほつといて。」

俺が行こうとした、そのときだった。

「うるさいわね！ぶつかってきたのはアンタ達でしょ！」

「ア、アリサちゃん……」

「なのはは黙ってて！」

…帰ろう。あの3人組だ。特に『な』のつく奴には関わりたくない。ああ、俺は何も見えてないし聞いてもないぞ。帰ってもやしの芽かきをするんだ！

「こいつ！！」

こぶしを振り上げる子分。あいつらは子供だ。大人が子供を殴れば…結果は分かっているはずだ。だが周囲の大人は見て見ぬふりをしている。女の子だ。顔殴られたら一生残るかを知れない。俺はお人よしな自分のため息をついて

バシッ

振り上げた腕をつかんだ。

「な、なにしゃがる！！」

「ヤーさんがよお、何がキ相手にムキになっているんだ？」

パンチパーマの服には、ほんの少し白いものが付いている。そして震えてる紫の髪の少女 月村すずか の手には白いアイスクリー

ムが。金髪の少女 アリサ・バニングス が何も言わなければ、「あーあ！この服のクリーニング代高けえのにな。どうしてくれるんだ、え！！」とでも言うつもりだったんだろ。面倒だから子分Aの腕を折る。

バギャツ！！

「ぎゃあー！！」

「てめえ！！」

殴りかかる子分Bをさつと躲して、金玉にキック。うずくまったところを、後頭部にかかと落とし。そのまま踏みつける。

「へっ！骨の無え野郎だぜ。ガキに絡んで勝った気になってるか？馬鹿が。」

「…調子乗んじゃねえぞ…！！」

パンチパーマは身を躍らせ、ナイフを懐から取り出す。舌舐めずりしたその刃先が、鋭く光る。

「ひゃっはあー！！」

突き。竜馬はバックで躲すと、やくざは二度、三度切りつける。少し竜馬の体勢が崩れる。それを待っていたかのように、やくざはナイフを突き出した。

「もらった！！」



突き出すナイフ。だが、竜馬は動じず、それを掴んだ。がっちり握られた刃先。手からは血が滴り落ち、右手の包帯は赤く染まっていた。

「なっ!？」

血がぼたぼた垂れても痛い顔一つしないこの男に、パンチパーマは背中に冷たいものを感じた。だが次の瞬間、彼はついに身じろぎし、おののき、震えあがった。目の前の男、流竜馬が笑みを浮かべたからだ。野獣の様なぎらついた眼で。

「どうした?引かねえのかよ。指の一二本落とせば、手前らも顔が立つつてもんだろ?ああ!！」

するとどうしたことが。さっきまであたかも殺人鬼の様な狂暴性を見せた男が、赤子同然に震えあがってしまったではないか。いやいや、もし貴方が「私は度胸が据わっています」と大いに自信がありだとしても、私は断言します。きつと貴方も、彼の形相を見たら血相変えて逃げ出してしまうことでしょう。いやはや、ひよつとしたら腰を抜かして身動きが取れなくなるかもしてません。それほどまでに、彼は恐ろしい形相をしていたのです。

しかし、それでは飽き足らず、男はすごい力でナイフの刃先をパンチパーマに向けた。じりじりと迫る刃先。のど元をかすれることに、赤い線が刻まれていく。男はその線を、猟奇的な表情でなめるように見た。

「どうしたどうしたあ…へへっ。ほらほら、このままだとのど裂けちゃいまちゅよ〜」

「うわああああ!たすっ!たすたす…!」

「ん？もつとはつきり言ってくれねえと、お兄さんわかんないな」

突然幼稚語で話す竜馬。ある意味そつちのほうが恐怖感をあおつた。胸ぐらを掴まれたまま、失禁するパンチパーマ。汚ねえと罵り、竜馬が放り投げる。

「あ、あう、あうあうあう…！！」

傷ついたので元をかきむしり、半狂乱になりながら、パンチパーマは逃げていく。気を失っている子分は置いてきぼりにされた。

「…ふん。やくざの質も落ちたか。鼻っ汁もひっかけねえ輩だぜ。」

俺は正直焦った。パンチパーマがナイフを出したとき、逆上してこいつらを襲わないか、それだけが心配だった。

ふと少女たちを見ると…怯えている。あいつらからすれば、俺もあのやくざと一緒になんだろう。特に月村すずかは、泣いちまってる。よっぽど怖かったに違いない。俺は屈み、そつと頭に手を乗せた。

なでなで

はつと顔を上げるすずか。前世の記憶、アニメの中の月村すずかが、今ここに現実として存在する。でも、そこにいたのは、泣いている小さな女の子だった。

「よく我慢したな。偉いぞ。」

「くりくり顔くすずか。すると、恐る恐る栗毛色の髪の少女が近づいてきた。」

「あのあのっ…ありがとうがございましたっ!!」

ぺこりときこちなく頭を下げる。俺が後に戦うことになる少女。それは運命、避けられぬ戦い。だが

「怖かったか?でも、もう大丈夫だぞ。」

するとわなわなした表情で、思いつき指を指しながら、アリサ・バニングスは言った。

「あ、あんた、何者よ!?なんでナイフつかんで平気でいられるのよ!!」

「それについてはノーコメント。それとお前、口には気をつける。そもそもお前があんな事口走らなければ、事態はもっと軽く収まっていたはずだ。」

「う…」

少しうつむくアリサの頭もなでる。

「…でも、友達助けようとしたんだよな。それはすごく勇気がいることだ。そんじよそこの大人でもできないぜ。」

「あ…」

俺はすっと離れると、置きっぱなしになっていたもやしを提げ、

走り出す。

「…じゃあなー!!」

そのまま俺は、夕日に向かって走っていった。

『しっかしリョウ。お前、子供好きだな。』

さつきからひっきりなしに話しかける武蔵。あいつ曰く「わし、滅茶苦茶見なおしたぞ、リョウ!!」らしいが、正直言ってうざい。

「うっせーなー。少しは静かにしろよ。」

ダッシュで家に帰る。きっとはやてが角生やしてるに違いない。俺はため息を交えながらも、少しいい気分で帰るのだった。

## チェンジ5 白と黒の邂逅（後書き）

一言。最初のネタ分かる人は少ないと思うな…多分。

チェンジ6 五月雨の血斗(前書き)

前書き書くのが面倒になった男…スパイダーマツ!!

## チェンジ6 五月雨の血斗

「今日も雨か…」

もう4月下旬になり、咲いていた桜は皆散ってしまった。それに今日は3日目の雨。4月にしては降りすぎだ。今日は武蔵と外出中。これから戦うことになるであろう海鳴を、もっと把握しようというのが表の理由。真の理由は

「俺は…翠屋のケーキが食いたいんだ!!」

『今日でそれ何回目だ？リヨウ。』

「うるせえ。食いたいものは食いたいんだよ。」

そう、急に翠屋のケーキが食いたくなっただ。突然。というわけで出発したわけだが、ちゃんと事前に手は打ってある。武蔵から聞いたんだが、俺は魔導士とは異なるらしい。俺の体内には、リンカ コアではなく、それと同じ大きさのゲッター炉心が入っているらしい。つまりエリアサーチ系魔法を使っても、俺からは魔力反応が出ないのだ。それにブラックゲッターにチェンジしたとき、顔が隠れてしまう。だから別に俺が翠屋へ行っても、高町なのはにはばれないのだ。

「えつと…おっ、ここだ。」

## チェンジ6 五月雨の血斗

「いらっしやいませ…!!」

お、お出ましは桃子さんでしたか。そういやなのはって完全に桃子さん似だよな。将来こんな風になるのか…ん？なんか反応がおかしいぞ？

「はやての分も買ってくか…あいつショートケーキが好きみたいなこと言ってたよな。」

ショートウィンドウの前にしゃがみこみ、選ぶ俺。…まさかこの恰好がいけなかったのか？新ゲよりかは悪役面じゃないはずだが…!!

「……………」

視線だ。しかも気配を『隠して』こちらを見ている。…誰かは大体見当が付いているが…気味が悪い。

「おい。誰だ。」

俺は誰もいない空間に向かってしゃべる。

「誰だって聞いてるんだ。返事したらどうだ！高町士朗…!!」

…おお、シビれる。なんか今、めっちゃかつこいい気がした。まあ、案の定士朗さんが出てきたわけだが…原作より若く見えるな。30過ぎだろ？こ、これも…愛の力なのか？俺には分らん。なにせ彼女いなかったし。前世。

「…俺はただケーキを買いに来た客だ。何のつもりだ？」



表情を変えず、棒読み口調で言う。明らかにこの男からは殺気がにじみ出ている。

「いや、すまなかつた。なんか久々に面白い人がいると思ってね。まさかばれているとは思わなかつたよ。よく気づいたね。」

…明らかに空気が悪い。俺が調子に乗りすぎた。そ、そういえばこの人って無茶苦茶強い気が…ま、まずいぞ…桃子さんって、今目をそらした！まずい！誰でもいいから助けて…と思ったその時だった。

「ただいま〜！って、あ！あのとき助けてくれたおじさん！！」

高町なのはだ。でも今、おじさんって言ったよな？

「いや、本当にすまなかつた。娘を助けていただいたのにこんな…」

「いいえ、こちらこそ。俺があんなこと言わなければこんなことには…」

一触即発ムードだったが、まあ高町なのはのおかげでなんとか丸く収まった。だが

「士朗さん。あとでちょっとOHANASHIがあるから？」

と桃子さんが笑顔で言っていたのは、俺は見えてないぞ。世界の終わ

りを感じていた土朗さんの顔も見えてないぞ。

「申し訳ありませんでした。私も誤解を招くようなことを…」

「いえいえ、そんな。まあ普通の反応ですよ。以前もこんなことがありましたし…」

結局30分ぐらい話したあと、俺は翠屋を後にした。高町夫妻はせめてもと、ただでケーキをごちそうしてくれた。土朗さんが「今度会ったときに手合わせを」と言っていたから、丁重にお断りした。まだまだ死に急ぐこともないだろう。そんなわけで俺はケーキを片手に、こうもり傘を差しながら帰ることにした。

『若い命が真っ赤に燃え〜て〜』

「ゲッター〜スパ〜アクウ〜そ〜ら〜高〜く〜」

『ゲッターロボ!!』を武蔵と歌う俺。周りに人がいないから大丈夫だ。この歌知ってるって言ったら、武蔵驚いてたな。

「『見〜たか〜！合体い〜 ゲッター〜ロ〜ボ〜だ』」

ガッツ！ガッツ！ゲッターガッツ！と歌おうとしたその時だった。

『リヨウ！…来たようだな。』

ピリピリとした感覚。ジュエルシードの暴走が始まったようだ。近くの神社から感じる。市街地に出すわけにはいかないので、俺は

その神社へ向かった。

「へっ…さっそくお出ましたな。」

神社の山道。誰もいないことが幸いしてか、結界を張らずに済んだ。目の前には、恐らく犬を取り込んだであろう暴走体が。姿かたちがいんべーダーに似ているのは…気のせいかな？

「グルルルル…」

『へへ。ずいぶんと可愛いわんちゃんだな、リョウ。』

「化け物趣味になった覚えはないぜ。」

リリカルなのはのアニメでは、こんな暴走体は出現してなかったはずだ。そもそも、犬はもうすでに高町なのが封印しているはずだ。結界もゲッタービームも使えない。下手に使ったら、管理局連中に目をつけられる可能性があるからだ。

『リョウ！チェンジだ！』

「いや。その必要はねえ。」

こちらに襲いかかる暴走体。竜馬は逃げずに、逆に向かっていく。

「たかが犬の一匹や二匹…俺一人でぶっ殺してやる！！」

全力でダッシュする竜馬。暴走体が飛びかかるが、竜馬はポケットに手を突っこんだままだ。

「ゲギヤアアアアア！」

激突。交差したのち、暴走体が竜馬の背後に着地する。沈黙。お互いに背を向け、一瞬時が止まる。刹那にして久遠の時。静寂を裂いたのは、暴走体の悲鳴だった。

「ウ…ゲエアアアあああ…!!?」

ぼとりと首が落ち、おびただしい血液が噴き出す。一方無傷の竜馬の指には、斬ったときに着いたであろう鮮血が、ルビーのごとく光っていた。

「ふん。長雨で犬の気までたつてやがるぜ。」

はねた犬の首を踏みつぶすと、竜馬は動かなくなった犬の胴体へと近づく。封印するか放置するか考えたそのときだった。

『リヨウ！あぶねえ!!』

武蔵の声より先に、竜馬が反応した。なんと首なしの犬が、突然襲いかかってきたのだ!!

「こいつ！」

腕を掴み、左で腹にパンチ。ひるんだところに回し蹴りを浴びせる。しかし暴走体はくるりと回転して着地した。

「グルルルルル…」

みちみちと音を立て、切断した切り口から肉片が二つ飛び出る。それらはどんどん大きくなり、ついには二つの頭になった。

「ガオオオオン！！」

ケルベロスを彷彿とさせるその姿。暴走体は竜馬を噛み殺そうととびかかる！

「なんか凄いことになったが…この流竜馬、むざむざ殺されるほど、甘くねえ！！」

武蔵を手にはめる。とびかかる暴走体をさっと躲し、両拳を打ち付ける。

「チエエエエエンジン！ブラック・ゲッターアアアアア！！スウイッチ・オンッ！！」

ブラックゲッターは、地面を滑るように移動する。戦っているうちに、暴走体の攻撃パターンは読めてきた。攻撃をかわしながら、チャンスを探す。暴走体はバックステップすると、一瞬呼吸を整える。とびかかる前の予備動作。彼には一瞬のつもりでも、竜馬には十分すぎた。

「今だ！ゲッターアアアアトマホウウウクッ！ブウウウウメラントッ！！」

放たれたゲッタートマホークが、まず暴走体の右の首を撥ねる。悲鳴。もがく暴走体の背後で、ゲッタートマホークが進路を変える。そう、これがブーメランと称される所以。一度投げると戻ってくる。見事にもう片方の頭部も空に舞う。そのまま地面に刺さるトマホーク

ク。しかしゲッターは目もくれず、両首から血を噴き出す暴走体へと突っ込んでいく。

「細切れにしてやる！ゲッターレザー！！！」

「ゲエエツ！ギヤア！ウゲエエえエアアア！！？」

ゲッターレザーが胴体を縦に切りつける。血。腕をへし折ると、そのまま胴体からねじり切る。腹は切り開かれ、鮮血と内臓、そして肉片や骨までもが引きずり出され、『解体』される。驚くべきことに、その肉片一つ一つが、まだびくびくと蠢いていたのだ。こうしている間にも再生をしている部分もある。ゲッターはその中から、青い宝石をほじりだした。

「……ジュエルシード・シリアル？、封印。」

『封印完了つと……お疲れさん、リョウ。』

封印が完了すると、蠢いていた肉片がぴたりと止まり、そこは血の海だった。竜馬が帰ろうと振り返ったそのときだった。

「な……………?!！」

そう、竜馬の後ろに立っていたのは、金髪のツインテール、黒いバリアジャケットを身にまとった少女。

「……それを渡してください。でなければ……強硬手段に出ます……！！！」

フェイト・テストロッサ、その人だった。



チェンジ 6 五月雨の血斗（後書き）

士朗とのからみは竜馬が調子に乗ってやったことです。ではでは。



チエンジ7 金色の雷 漆黒の竜（前書き）

突然ですけど、ザリガニとセミってどっちがバルタン星人に似ていると思いますか？作者はザリガニかと…

## チェンジ7 金色の雷 漆黒の竜

フェイトSide

私は、フェイト・テスタロッサ。この世界とは似て異なる世界で生まれた、『魔導師』です。私がこの世界に来た理由。それは、母さんの望む『ジュエルシード』を手に入れるため。母さんを笑顔にするため。もっとかわいがってもらうため。もっと私を見てほしいから。だから、私は『ジュエルシード』を探す。そう、どんな手段も選ばない。

たとえ、それが

「…それを渡してください。…でなければ…強硬手段に出ます…  
!」

鬼神が相手だったとしても…

チェンジ7 金色の雷 漆黒の竜

竜馬Side

ここで奴に出くわすと思わなかった。どうも戦闘中は我を忘れる癖がある。性格がどんどん竜馬に近づいてる気がするが…気のせいかな?…そうであってほしい。

なにはともあれ、フェイトさんだ。<sup>ナノハサン</sup>魔王のよm…友人だ。俺としてはSTRIKERSでも古いBJを着てほ…ゲフンゲフン。こう見えても俺は、むやみやたらに相手をぶっ飛ばそうとは思わない。どっかの誰かさんとは違って。

「強硬手段だと…？なめんじゃねえ、このアマー！」

地面に突き刺さったゲッタートマホークを引き抜き、地面に向かって振り払う。ぬちゃ…と、硬くなり始めた血液が音を立てて飛び散った。

「何がしてえのか知らねえが…首と胴体。永遠につながらねえ死にかたしてえのか？ああ！！」

…むう。ビビんないフェイトちゃんすごい。でもこれ…竜馬の姿でやったほうがよかったかな？ま、いいか。

フェイトSide

私は恐怖した。こんなに震えあがったこと、今まであっただろうか？この男…いや、違う。鬼？いや、そんなものではなく…もっと…もっとおぞましく…禍々しくて、強大な…

「…私はそんな事を聞いているではありません。その青い石、ジュエルシードを渡してほしいと言っているんです。」

恐怖からか、私はそんなことを口走る。…この男は強い。ひよっとしたら母さんぐらい…でも、私も退けなかった。

竜馬Side

「フェイト！大丈夫かい！！」

フェイトの次は…アルフか？二対一か…ちょっとタイマン張られるときついところがある。かといってジュエルシードを渡すわけは…

「おい、そのあんた。それジュエルシードだろ？つべこべ言わず出しな！！」

「アルフ！」

ま、まずいぞ。なんかあいつ凄いやる気だ！おいおいフェイト。フツ―は使い魔暴れんよう面倒みるべきじゃって、なんか二人とも殺気が…

『ま、まずいぞ、リヨウ。奴さんたち、すごいやる気のようにだぜ…』

「ムサシ。無駄な戦闘は避けるべきだ。逃げるぞ！！」

俺は構えながら、ゆっくりと回りこむ。それに合わせてフェイトとアルフも移動する。そつとそつとケーキに近づいて…取るうとしたその時だった。

「この野郎！！」

図らずとも、いきなりアルフが殴りかかってきたのだ！！一瞬ひるんだ俺でも、二度同じ手など喰らわん。

「ちつ！人がいい顔してりゃあ、しゃしゃりやがって！そんなに死にてえんだったらお望みどおり、そのガキもろとも血祭りにあげてやる！！」

竜馬Side out

垂直に上昇するゲッター。下から接近するアルフを確認すると、右肩に手をかざした。

「ゲッターアアアア・トマホウウウウクッ!!」

戦斧を片手に急降下するゲッター。アルフの後ろからフェイトの魔力弾が飛んでくるが、間一髪で全弾回避する。ゲッタートマホークで切り払いながら、アルフとの距離を一気に縮める。

「うおおおおおお!!」

雄たけびを上げながら、突っ込んでくるアルフ。その一瞬のすきを突いた。

「トマホオオオク・ブウウウウメランツ!!」

回転しながら、想像絶するスピードで飛んでくるゲッタートマホーク。アルフが避けようとした時、急にトマホークの軌道が変わった。

「躲した!? いや、はずれただ…」

敵のミスで躲せたと思ったトマホーク。しかしそれは『攻撃』したのではなかった。

「フツ… 畏にかかったようだな。ゲッターアアアアビイイイイイムッ!!」

竜馬の作戦は的中した。アルフの後ろ、つまりフェイトとアルフの間にトマホークを投げ入れるのが狙いだった。回転しながら飛ぶ

トマホークにゲッタービームを当てたらどうなるか…そう、全く予測できない方向に拡散させたのだ！アルフの注意が一瞬竜馬から離れた。

「死ね！！」

アルフの腹に一撃入れると、一瞬屈んだところに延髄切りを打ち込んだ。回し蹴りに対応できず、直撃を食らったアルフは白目を一瞬剥くと、そのまま落ちて行った。

「アルフっ！」

「仲間の心配などしている暇はあるのか？」

一瞬で飛び上がり、フェイトの頭上からゲッタートマホークを投げつけるゲッター。トマホークをバルディッシュで払うも、少し腕がしびれた様子のフェイト。いくら魔導師とはいえ、130センチ程度の少女と角入れれば2メートルは軽く超す大男とは勝手が違すぎる。小学生とプロレスラーが喧嘩しているようなもんだ。

「もらったあ！ゲッターアアアア・トマホウウウウクッ！！」

ゲッタートマホークとバルディッシュが激突し、火花があたりには飛び散る。体格差もあつてか、フェイトが若干押される。押し返そうと彼女が前へ力を入れたとき、急に押さえつけていた力が無くなった。

「なっ！？」

半ばつんのめった状態で前傾姿勢になるフェイト。ゲッターは一

度大きな力で押し、フェイトが押し返してくるのを逆に利用して、後ろに回り込んだのだ。フェイトが体勢を直そうとしたときはもう遅かった。

「そこだ！ゲッターアアア・ビイイイムツ！！」

背後からのゲッタービーム。いくら自動でシールドが展開できても、防ぎきれぬわけ無かった。

「くっ?!『Protection』きゃああっ!?!」

爆発とともに墜落していくフェイト。シールドで防御しているとはいえ、小柄な少女を気絶させるには十分すぎる威力を持っていた。恐らくシールドが遅れていたら、重傷を負っていたに違いない。

「ふう…終わったか。」

最早追撃してこないとみるや、竜馬は地上に降り立つと、奇跡的に無事なケーキを手にとった。アルフをフェイトも、あの程度なら大丈夫だろうと竜馬は判断した。今日は戦いすぎた。腰や特に首周りが痛い。

「まったく面倒だな…帰るぞ、ムサシ。」

『あ、おい、待てよりヨウ！』

俺はケーキを持ち、一気にその場から離脱した。

「まさかとは思うが…追っかけてきてねえだろうな？」

『ああ、大丈夫だぜ。どうやら奴さんは伸びちまつたらしいな。』

フエイトから完全に逃げれて安心した。ケーキは…大丈夫、うん。傘置いてきちまつたからゲッターウィングで濡れないようにしたけど、崩れてないし無事だった。

「んで、これがそのケーキなんやな。」

「こいつには凄まじい経緯があるんだ。心して食えよ。」

夕飯の後、ケーキを取り出して、箱を開ける。ショートケーキとチーズケーキ。はやてはやっぱりショートを取った。

「…いただきます!!!」

さすがあの戦闘を潜り抜けたケーキ。その美味しさもひとしお…な気がする。とにかくおいしかったし、食えない武蔵がかわいそうだった。

『リヨウ。お前、チーズケーキが好きなのか？』

「ああ。ケーキと言ったらチーズに限る。俺はレアより焼いたほうが好き。」



「うーん…チーズケーキって、何も乗ってないからちよっと寂しいんやけどなあ。」

ケーキを食べ終わり、俺は歯を磨く。そのとき、俺はふと思った。

(何か…何かおかしい。嫌な予感がする…)

敵の順番がアニメと異なるのは承知の上だ。だが、その暴走体の姿が、みんな石川賢の漫画に出てくるようなのばかりだった。特に今日戦った敵。あれは、間違いなくインベーターそのものだった。リリカルなのはの世界にインベーターはいないはず。餌になるゲッター線が発見されていないからだ。仮にいたとしたら、それこそもう日本は消滅しているだろう。では、なぜ…？

俺はふとはやての部屋を見る。そこにある一冊の黒い本。まだまだ先の話だが、こいつが起動したとき、否応なしに俺は管理局と戦うことになる。『悪』として。…いま、ふと思っただけどさ、管理人格のリンフォースが早乙女のジジイだったり(あのジジイが、リンフォースのコスプレしてるとこ想像してくれ)、シャマルとヴィータが「そうだよ、ヴィータ君。」「そ、そうだね、シャマル君。」とか言ったり、シグナムがキ、ガイテロリストだったり、ザフィーラが邪鬼王だったりしねえよな…ま、まじでやだぜ？そんなの。人間やめちゃった連中ばかりの八神家。…あ、リンフォース？は…うん。ゴールでいいや。

「うーん。考えてもらちが明かねえ。とりあえず寝るに越したことはねえな。」

考えることをやめ、布団に入る俺。何が待ち受けているか分からないが…俺は、はやてを守る。改めてそう決意し、瞼を閉じた。

チェンジ7 金色の雷 漆黒の竜（後書き）

今更ですけど、一番くじでなのは出るらしいですね。8月はなの破産は必須ですね。今思えば作者の買ったなのはグッズはゲームとVivid第一巻しかない。しかも中古。実写ジャイアントロボと鉄人と初代仮面ライダーはめっちゃくちゃ買ってるんですけどねー

祝PV30000突破企画 ゲッターなのは 第一話(前書き)

うれしいねえ。うれしくってついやっちゃったよ。でもこれ書き終わってたらpvが30000くらい増えちゃった。仕事遅いね、うん。でも俺は投稿するぞ。なぜなら今、俺は最高にハイってやつだから。

## 祝PV30000突破企画 ゲッターなのは 第一話

\*違った意味でリリカルすぎて、死んでも知らんどう\*

PV30000記念小説 没ネタ公開しちゃったZE スペシャル

ゲッターなのは 第一話

注・この小説は、本編とは関係ありません。もともと、この企画はA案として制作を進めておりました。そう、これが今の『チエンジー真リリカルなのは』の原案だったわけです。ですが制作を進めるにあたってこれじゃ石川先生のパクリだと思い、打ち切ったのです。そこで企画したのはB案…今書いているチエンなのにあたります。

つきましては、もともと打ち切った企画であるゆえ、完結するかどうかも怪しいです。現に今現存しているノートでは5話までしか記されていません。これはほとんど作者の自己満です。ただ、ひよっとしたらこうなってたんだよというだけです。まあお祭り企画ですし、少しでも楽しんでいただけたらなと思います。では、はじめります。

季節外れの大雨は、すでに一週間を過ぎていた…

「行こう、父さん。」

土砂降りの雨の中、ぼろぼろの服を身にまとい、遺影を抱えた少女が歩いていく。栗毛色の髪にツインテールの、小学三年生くらい

の少女。しかしその眼は野獣のようにぎらついており、石川漫画特有のグルグル目だった。その少女の向かう先。そこには、「全日本剣道大会」と書かれた看板があった。

「ねえ、そこのお嬢ちゃん。招待券は？」

「……………」

「おい、君！聞こえているのかね！」

無視して通り過ぎる少女の肩を、もうひとりの受付が掴んだその時だった。

「触んな、ブタ野郎！！」

「ぎゃあー！！」

少女の裏拳が決まると、受付の耳が千切れた。それには目もくれず、少女は会場へと足を踏み入れる。そこでは、決勝戦が行われていた。剣道は一回技が入ると『一本』になり、二回先取した方が勝者となる。赤も白も現在一本ずつ取っており、延長戦にもつれ込んでいた。もう20分も過ぎる戦いだった。だが、勝負は一瞬にして決まった。

「面エエエエエン！！」

ほぼ同時に振り下ろされる竹刀。三人の審判の揚げた旗は…赤。この瞬間、勝負が決着した。

「勝負あり」

礼を終えた後、観客席からは拍手が飛び交った。全力で戦い抜いた勝負。誰もがたたえたその時だった。

「まだだ！まだ終わっちゃいないの！！」

突然の怒鳴り声に騒然とする会場。

「きみ、まだ相手は参ってないの！それで勝ったつもりなの？」

どかどかと道場に乱入する少女。何人かの大人が止めようとした時、少女は鉄パイプを取り出した。

「ヒエエエエエエ！！」

有段者の頭を殴りつける少女。大の大人が一撃で伸びてしまった。奇声とともに繰り出される攻撃で、結局捕まえようとした大人が全員白目をむいてしまった。少女に一回も触れることができず。

「わはははは！これが剣道？日本の武道も落ちたの。」

「き、貴様ツ！！」

さっきの優勝者と戦った男が、竹刀で切りつける。しかし少女は二メートル以上も飛び上がり、

「きえええええええ！！」

鉄パイプで後頭部を殴った。血を噴いて男は倒れ、

「ヒヤッハア!!」

少女は優勝者の胴にパンチを入れた!粉々に碎ける胴!ゴムまりのように飛び上がった優勝者は、口から血を流しながら倒れた。

「貴様!!」

「まちゃんしゃい!!」

激昂する弟子を黙らせる一人の老人。彼は少女に言った。

「おぬし、なぜこの神聖な試合の邪魔をするのじゃ?」

少女はそれを聞くなり、大声で嘲笑った。

「神聖!?!ふふふ…わはははは!!」

そして続けた。

「戦いに神聖もクソもないの!あることは勝つことだけなの。」

少女はそう言うと、抱えていた遺影を見せた。

「…ねえ、館長さん。貴方ならこの男に見覚えあるでしょ?私のお父さんなの。」

その言葉を聞いたとき、館長の顔色が一変した。

「な…!!?!?あれは、高町士朗!!じゃあ君は…」



「うん。そうだよ。私の名前は高町なのは。皆殺しにされた高町家の最後の生き残りなの。」

それを聞くなり、館長は震えだした。

「た、高町…お、おぬしは高町の娘と申すか…」

「か、館長！その高町士朗とは一体！」

館長はひどく狼狽した様子で言った。

「そう…そうじゃ…あの男、高町士朗は有名な道場破りだったのじゃ…おまけに奴は、鬼神の様な技を使い、対戦相手は皆殺しにされた。彼だけじゃない。高町には二人の子供がいて、彼らも恐ろしく強い剣豪じゃった。しかし、そうか。まさか三人目がいたとは…」

それを聞いて、なのはは怒鳴った。

「違うの！父さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんを道場破りに仕立て上げたのは館長さんなの。」

「しかし、君たちの剣道は武道ではない！ただの殺し合いだった！」

ぐしゃっぐしゃっ

濡れた靴の音が響き、なのはは優勝杯を手に取った。

「お父さんはよく言ったの。剣道をやるのは、自分より強い奴がいるからだ、そういう奴が目の前に居る限り、剣道をやめないと

ね。そういつやつをぶちのめすまでやめねえとね。」

すると突然、なのはは優勝杯を握りつぶした！とても普通の人間には無理だ！

「こんな物をもらうためにやるのが武道なの！これじゃダンスなのっ！！」

「き、貴様！言わせておけば！」

何人もの弟子たちがなのはに向かってくる。

「きやがれなのっ！本物の剣道を教えてやるの！私はそのために来たの！」

走ってくる弟子になのはは向かって行った。

「イヤッホオ！！！」

飛び蹴りで面を破壊すると、着地と同時に鉄パイプをふるった。

「りゃっ！きえっ！」

恐ろしいことに、弟子たちの攻撃はすべてなのはに躲かれ、防がれ、こうしてる間にもまた一人、また一人と地に伏していく。

「これが剣道なのっ！！！」

目にも止まらぬ早業で、バツタバツタとなぎ倒していくのは。ついに最後のひとりの体が傾き始めた。

「イヤアアアアアアアア！」

なのはが館長に飛びかかる。

「うわあああああああー！」

館長は防ごうとしたが

バギヤーン！！

額から血を噴き、その場に倒れて動かなくなった。

「今の面が躲せなかったの？館長も地に落ちたの。」

すると置いてあつた遺影を再びかかえた。

「敵は取ったよ、父さん。帰ろう。」

なのははそうつぶやくと、外へ出て行った。

## 高町家

三年前、一家が皆殺しにされた痛ましい事件が起きた。高町一家殺害事件。生き残ったのは、当時六歳だった少女、高町なのはただ一人。事件の当日、近所の友人の家を訪れていたから難を逃れたのだ。しかしこの事件はニュースで報道されることも、新聞に載ることも、ましてや警察によって捜査されることもなかった。

## 被害者

高町士朗 機関銃を30発以上受けて、さらに鋭利な刃物で50数か所めつた切りにされ死亡。

高町桃子 両手足を切断されたうえ、レイプされ、全身に生きたままガソリンをかけられ焼死。

高町恭也 目玉をつぶされ、全身の皮をはがされ、口の中に手榴弾を詰め込まれ、爆死。

高町美由希 五寸釘で壁に貼り付けにされた後、レイプされ、全身に溶けたアスファルトを流され、死亡。

以上の通り、付近の住民が気付かないわけはなかった。しかし、みんな見て見ぬふりした。警察も来なかった。そう、彼らは国によって殺されたのだ！しかし彼らは末っ子のなのはは住民として届け出を出していなかった。そして運も重なったことに、高町なのはは生き延びたのだ。しかしそれが彼女にとって幸せかそうでなかったのかは分からない。

今、彼女は焼けてぼろぼろになった家の中に居る。かつてそこは高町家であった。しかしその日、高町なのははすべてを奪われた。家も。家族も。金も。彼女自身、いつ殺されてもおかしくない状況で三年間過ごしてきた。金はすべて奪われたため、葬式を上げることも、墓を造ることもできなかった。焼けた肉片を拾い集め、近くの砂浜で火葬したから、骨はあった。それはみんな海に流した。遺影も家族の持っていた写真を、捨てられてたそれっぽい額縁に入れただけのもの。唯一の友人とも連絡が取れなくなった。いつしか高

町家の周辺には、人が一人も住まなくなった。彼女の心は黒く荒んだが、殺しや物とりはしなかった。

「父さん。母さん。兄ちゃん、姉ちゃん。かたきはとったの。テレビにも映ったし、みんなの前で大恥をかかせてやったの。」

なのはは俯いて言った。

「だけどさ、私、どうすればいいの。今、日本に真の武道家はいなくなっちゃったの。」

「父さんはいつも言ってたの。強くなれって。強くなるのが女の生き方だ。武道こそが女の人生だと…よちよち歩きの私には辛かったの。幼稚園にも、学校にも行かせてくれなかった。泣こうがわめこうが許してくれる父さんじゃなかったものね。」

なのはは血の付いた手を見た。それは女の子とは思えないほどのごつごつした手だった。実際皮膚は石のような硬さになっていた。

「小さい手がグローブみたいに腫れ上がっても、それを塩水につけてまた砂箱突き。燃えてる炭に手をつ込まれたり、野犬と戦わさせられたり…よく生きてこれたと自分でも思うの。」

するとまた俯いてしゃべりはじめた。

「それがどうだい。なんにもなりやしねえの。武道を立て直すのなんて…笑い話にもならないの。くそっ！私はこれから何を目的に生きればいいのか！」

父の遺影を叩き割るなのは。しかしその後は何も起きやしない。

空しい時間だけが過ぎた。どのくらいたっただろうか。ふと音がしたと思つてふりかえると、二人組の少女が玄関に立っていた。

「あれ？お客さん？父さんの友達かな？」

なのはは玄関に向かった。

「あの…すみませんがどちらさままで？」

その時だった。

「ターー！」

サングラスをかけた少女が、ドスで切りつけてきたのだ！とつさにかわすが、髪の毛が少し切れた。

「くっ！さっきの仕返し？それとも父さんたちを殺した奴ら！？」

壁に背をつけようとした時、すごい音がして壁が割れ、そこから人間とは思えないほどの巨大な手が伸びてきた！ジャンプして躲すと、そこから身の丈2メートルはある赤毛の少女が現れた。

「イヤホーツ」

小柄な眼帯をつけた少女がサバイバルナイフを投げてきた。一度躲すも、もう一度投げてくる。一体何本服の裏に隠し持っているんだ！

「はっ！はっ！」

飛んでくるナイフを手足で払うが、そのうちの一本が右肩に刺さった！

「うっ！！」

一瞬すくんだすきに、赤毛のパンチをもろに食らったなのは。小柄な体は吹っ飛ばされ、焼け焦げた木造のドアをぶち抜いた。柱の陰で、緑色でポニーテールの、そして額に特徴的な模様のある女が見ていた。

なのははそれに気づくはずはない。吹っ飛ばされた体を起こす。しかしその眼は死んでいなかった。前よりも、もっとぎらついていった！！

「何の恨みか知らなねえが、きやがれなの！高町なのは、一筋縄ではやられないとこをみしたるの！！！」

三人の少女が襲いかかる！赤毛のパンチがなのはに迫り、当たった！？しかし、両手でしっかりと受け止める。少女の腕が伸びきった時

「ハオツ！！！」

顔面への蹴り！鼻の骨が折れ、歯が何本か折れた。しかし当の本人はと言うと

「ふへへ……」

なんとなくすら笑いをしたのだ！

「うっ！」

ついに隅まで追い詰められたなのは。グラサンのドスが光る！！

「やっ！」

間一髪で避けるが

「ぴゃほほほ」

今度はナイフが襲いかかる！

「くるってる…狂ってやがる！わけもわからず…こんな連中に殺されてたまるかっ！！」

赤毛のパンチを受け止めるが

バキッ！！

強烈な右を食らうなのは。家の壁を突き破り、地面に転がり落ちた。

「もらった！」

グラサンのドスがなのはに迫る！その小さい首を切りおとそうとしたその時

バシッ

まさかの真剣白刃取り！？いくら力を込めようとも、ドスは動か



ない。ぽたぽたと手からは血が垂れて始めた。

「ふひひ。」

驚愕するグラサン。なのはの背後から赤毛が迫る！

「ぐわー！ー！ー！」

なのはに襲いかかろうとしたその時

「おりゃあ！ー！」

なのはは剣をとらえていた手を前に滑らせる！滑るグラサン。その刃は赤毛の眉間に突き刺さった！金色の目がぐりりと白目をむき、絶命する赤毛。眼帯がナイフを投げようとした時、なのははドスを引き抜き手に持つと、大きく振りかぶって投げた！

「?!」

眼帯の腕をかすめるドス。直後、ぼとつと腕が落ちた。

「ひぎゃあああ！ー！」

泣き叫ぶ眼帯。

「ひっ、ひいひいっ！ー！」

発狂するグラサン。

「……………」

死んでいる赤毛。なのはは勝った。

「はっ、はっ。」

地面に座ったまま、息を上げるなのは。すると緑の髪の女と黒髪の少年。そして何人かの男が現れた。

「ついに見つけた！これこそがわたしの探してた人間よ！！」

「あ、あなたたちは一体……」

すると女はなのはを襲撃した男を見た。

「クロノ。敗者はいらぬわ。消しなさい。」

「わかりました。」

するとクロノと呼ばれた少年は、消音ピストルで瞬く間に残りの二人を始末してしまった。

「運びなさい。もう彼女は立ってるだけで精一杯のはずだわ。」

「はっ！」

二人の男に羽交い絞めされるも、なのはは力が入らなかった。

「さて、来てもらっぞ。君には人類の犠牲になってもらっんだ。」

クロノが刺さっていたナイフを引き抜くと、なのはは絶叫した末、

気絶した。

「5と9と12が死んだか。まさか丸腰の不意打ちでナンバーズを3人も屠るとは…化け物か。」

「あの程度の人形くらいで死ぬようじゃ、今ここで死なせてやっ  
た方が彼女のためだわ。」

「ふふ…彼もきつと驚くだろうね。母さん。」

雨のなか、一台のリムジンが走り去っていく。そう、これはこれから起こりうる事件の、ほんの序章に過ぎなかったのだ。

祝PV30000突破企画 ゲッターなのは 第一話(後書き)

うん。わかったっしょ？これ公式にしなかった理由。次回はいつになるかな…まあ、作者も若かったということ。はい。

チェンジ⑧ 血に染まる森(前書き)

## チエンジ 8 血に染まる森

チエンジ 8 血に染まる森

夜。ケーキを食い終わった後、俺たちは臉が熱くなっていた。感動できる最終回が見たい！とはやてが突然言ったから、俺がチョイスしたのが…

『今話した通り、僕はM78星雲に帰らなければならぬんだ！』  
テレビの中で、頭に包帯を巻いた男が、ロングヘアの女性に背を向ける。

『西の空に…明けの明星が輝くころ、一つの光が宇宙へ飛んでいく。…それが僕なんだよ…さよならアンヌ…！』

『待つて！ダン、行かないで…！』

男はすがりつく女を振り払い、赤いメガネのようなアイテムを取り出す。その眼は、決意の色に染まっていた。

『アマギ隊員がピンチなんだよ…デユワツ…！』

「セ…セブンの最終回が、こんなに名作だったやなんて…うつつ」  
ウルトラセブンの最終回、はやては見るのが初めてだった。泣いてるけど…セブンは俺の中ではカッコいい最終回。俺の中で最も泣

ける最終回は…ジャイアントロボだ。今川アニメじゃないほうだぜ？実写版の。知らねえ人がほとんどだろうけど…ありや何度見ても泣けるぜ。俺と作者（？）が保証する。

「でもさ、森次さんって9割悪役なんだよな…」

『必殺シリーズでは3回ぐらい殺されてるんだろ？』

他愛もない話をして、談笑する俺。だが、突然刺すような感覚が襲った。

（む…ジュエルシールドか。だが行く必要はあるまい。高町にしるテスタロツサにしる、俺には関係の無いことだ…）

「…ん？リヨウ兄、どうしたん？具合でも悪いん？」

「い、いや、大丈夫だ。少し考え事してただけだ。」

「そーならええけど…なんか最近、ぼーっとしてること多いからなあ。ほんま、無理したらあかんで。」

「ああ、すまねえ。でも、ほんとに大丈夫だ。心配させちまって悪かったな。」

はやては時々鋭い時がある。俺が読まれやすいのか、それともあいつに読む力があるのか、分からない。何をするにしても、あいつに心配をかけたくない。

「まあ、良ければええんやけど…ん？なんか急に曇りだしよった。」

「

はやては、車椅子のレバーを倒し、窓へいく。

「こりゃあかん。リヨウ兄、洗濯物取り込むから、ちよいと手伝ってな。」

「よし、それじゃあハンガーを取って…はやてっ！伏せろっ！！」  
わからない。何の根拠もないが、俺は何かを感じた。

『ん?!リヨウ、近くにジュエルシ…ま、真下だ!!来るぞ!!』  
後ろで聞こえる武蔵の声。はやては頭を抱えてうずくまる。俺は右腕を振り上げながら飛び上がった。その直後だった。

「ギシャアアアアア!!」

暴走体が目の前に踊りでる。だが、俺は顔面にパンチを入れ、怯んで落下したすきにはやてを家の中に入れる。

「リヨウ兄!!」

はやてが武蔵を投げる。キャッチし、すぐさま装着する俺に、はやては言った。

「ようわからんけど…やっつけてな!!」

「おっ!!」

『わかった!!』



まさか暴走体が直接襲いかかってくるとは思わなかった。たまたまなのか？もしくは、はやての魔力に引き付けられた可能性もある。てことは、ジユエルシードは、高い魔力を求めているのか？俺にはよくわからないが…

『おっと、敵さんはお出ましのようだぜ。』

「ふん！こんな奴、一捻りだ！！」

とびかかる暴走体に蹴りを入れ、掴む。落下する両者。

「行くぞ！チェンジ・ブラックゲッターアアアア！！スイッチ・オン！！」

暴走体は触手で抵抗するが、ブラックゲッターには通用しない。そのまま右肩に手をやる。

「ゲッターアアアア！トマホウウウウクッ！！」

ズシャッ！！

瞬時に右肩を落とす、ゲッター。血液を噴き出す暴走体。するとかなわないと見るや、逃走を始めた。

「逃がしはしねえ！トマホオオオオオクッ！ブウウウウウウ  
メラッ！！」

ゲッタートマホークが、回転しながら襲いかかる。しかし、暴走体の姿は、瞬時に消えた。

「何っ!?!」

戻ってきたトマホークをキャッチするゲッター。見渡すが、それらしきものは見当たらない。

「くそっ、どこだ!?!」

『おい、リヨウ!下だ!?!』

武蔵の言葉通りに下を向く竜馬。その視線の先には、破壊されたマンホールがあった。

「ちっ、面倒になりそうだな。」

竜馬は舌を鳴らすと、マンホールの中へと入って行った。

なのはSide

わたし、高町なのはは、ついこの間までは、ごく普通の小学三年生でした。しかし、どんな因果か運命か、魔法少女に任命されてしまいました!受け取ったのは勇気の心。手にしたのは魔法の力。そして、今わたしの目の前に立ちふさがるのは…

『こや〜』

…おっきな猫さんでした。

いま、わたしが集めているジュエルシードは、どんな願いも『そ

のまま』叶えてしまう石です。ユーノ君に聞いたら、この猫さんの『大きくなりたい』という願いが、そのまま叶えられてしまったみたいです。すぐに封印して元に戻してあげよう。そう思って近づいた、その時でした。

バシュツ！バシュツ！バシュツ！！

どこからともなく、突然飛んでくる光の矢。わたしは急いで猫さんの上に乗りました。

『Wide aria protection』

猫さんに飛んでくる矢を、シールドで防ぐわたし。でも少しずつ押され始めて、それで…

「きゃあ!？」

『Master!!』

倒れたわたしの目の前に、音もなく降り立つ女の子。黒いお洋服に、レイジングハートみたいな、真っ黒の杖。長い金髪で、まるでお人形さんみたいにきれいな顔立ちの女の子。でも、なんでだろう？あの子の目、なんだか寂しそう…わたしがそう思ったそのときでした。

「同系の魔導師…ロストロギアの探索者か…」

「?!?!」

魔導師…ということとは、この子も魔導師ってこと?!え、それに

ジュエルシードのこと知ってるみたいだし…あ、女の子がわたしのデバイスを見ている…

「バルディッシュと同系統のインテリジェント・デバイス…」

「バル…ディッシュ…?」

わたしは、じっと女の子を目を見る。すると、女の子は目を閉じて言いました。

「ロストロギア…ジュエルシード…!」

『Syce Form Set Up』

女の子のデバイスが、黄色の刃の鎌に変わる。わたしが構えたその時でした。

「くっ!!」

女の子が突然振り向き、デバイスを構える。その先から飛び出したものは…

「ガオオオオン!!」

「ぼ、暴走体?!二体同時なんて!!」

大きな声を上げるユーノ君に、急いで念話をしようとしたその時!!

「にゃ…にゃああアギヤdッダアガガ?!!!」

猫さんが、女の子に襲いかかった怪物と、同じ姿になったのです。

Side out

「ギギヤギヤギヤギヤ…」

「ガギギギギ…」

襲いかかってくる二体の暴走体。高町なのはと黒い服の少女、フエイト・テストロツサは、徐々に疲弊していった。だが、なのはには、ある思いがあった。

（あの暴走体…あれはずかちゃんの子猫。助けてあげなきゃ…！！）

決定的だったのは、あくまでなのはは『救出』を目的として戦闘していたことだった。傷つけない。痛い思いをさせたくない。そんな優しい心を持っていた。

「今だ！ハーケンセイバ「やめてっ！！」」

強力な少女の魔法。子猫が痛がっているのをなのはは感じ取っていた。だからである。なのははとっさにフェイトを制止する。だが、それが大きな過ちだった。

「ガギヤッ！！」

「きやあっ？！！」

「うわっ！！！！」

片腕の暴走体のパンチで、吹き飛ばされるのはとフェイト。

「なのはっ！」

ユーノはとっさに助けようとするが

「ギニヤッ！！」

「わっ！！」

子猫の暴走体に蹴られ、それは触手でなのはとフェイトを捕獲する。

「きゃあ！？」

「くっ！解けない?!！」

もがく二人の魔法少女を尻目に、二体の暴走体は『捕食』の準備を済ます。彼女たちを『暴走体』にするために、『化け物』にするために…

「い、嫌…助けて…!!！」

「アルフ…こ、こんなところで…」

フェイトは使い魔が来ないことを、やっと理解した。彼女の思った通り、アルフは血を流して、森の中でぐったりとしていた。

ゆっくり迫ってくる口。もはや元の生物が判別できないそのおぞ

ましい顔には、異常発達した牙が、無数に蠢いている。

（助けて！お父さん…お母さん…お兄ちゃん…お姉ちゃん…！！）

なのはが目をつぶった、その時！！！！

「ゲッタアアアアア！ビイイイイイムツ！！」

黒い何かが、無数の赤い光線を乱射しながら、こちらに向かって落ちてくる。その光で触手は焼き切れ、なのはとフェイトは後ろに飛ばされた。

「つつ！！」

「きゃっ…？！」

煙の先。なのははその姿を見て驚愕した。

「ロ、ロボット…？」

漆黒の装甲。鬼を思わせるような、大きな二本の角。ぼろぼろのマントを身にまとうそれは、なのはの感覚からすれば、どっちかといえはロボット…いや、アニメに出てくる悪のロボット。そんな印象を受けた。

「ゲッタアアア・トマホウウウクツ！！」

肩から戦斧を取り出し、走り出すゲッター。その形状は、なのはやフェイトを『魔法の杖』とするならば、『人殺しの兵器』といったところか。なのはは、完全に目を奪われていた。

「おりやあああああああ！！」

フェイトに襲いかかった 竜馬の取り逃がした 暴走体に、縦に大きく振りかぶって斬りつける。瞬時に暴走体は腕をクロスしたが、それは報われることはなかった。なぜなら

「ギャ…ア…?!！」

文字通り、『真つ二つ』になってたからだ。

ドサツ…!!!

頭から両断された暴走体が、地面に伏す。血のおいをかいで殺気立ったか、子猫の変異した暴走体も、ゲッターに襲いかかった。

「?!や、やめてっ!!！」

ようやくなのはの口から出た言葉。だが、それが聞き入れられることは無かった。

ガシッ!!

暴走体の顔に、ちょうどプレス技のアイアンクローをするゲッター。ギリギリ…ミチミチ…と、生々しい音を立てながら、徐々に暴走体の頭部が変形し、指がめり込んでいく。その先からは赤黒い



液体が、ゆつくりと滲みだしていた。

「……………」

グシャッ！！

ゲッターは掴んだ手を一気に下げ、顔面の肉をえぐり取る。おぞましい奇声を上げのけぞる暴走体を尻目に、ゲッターはナツクルの棘を展開する。

「……………！！」

無言のまま殴りつけるゲッター。耳に張り付くような叫びをあげる暴走体に少しも憐れみも持たず、ただ、殴る。

「やめて！！まだ助けられるかもしれないのに…どうして…どうして…」

「…っ！」

返り血を浴びながらただ殴り続けるゲッターに、哀願するなのは。その惨さに顔をそむけるフェイト。だが、彼は殴り続ける。殴る。殴る。殴る…

「……………」

もはや原形をとどめなくなった暴走体。その首にゲッターレザーをあてがい、引き裂く。ぶちぶちと背骨のついた状態で、引きずり出される首。切断されてもなお、その眼はゲッターを睨み、抵抗しようとはほとんど残ってない牙を動かす。だが、ゲッターは目もくれ

ず、頭を握りつぶした。

「ひっ!!!」

なのははしやがみ込み、目を閉じ、耳をふさぎ、ただ震えることしかできなかった。フェイトも足がすくみ、目をそらしたくても、そらせない状況だった。

「みゃあ!みゃあ!!!」

子猫の鳴き声。すると首を失った暴走体の断面から、元の子猫が浮き上がってくるのではないか。かわいい声で鳴き続けるそれを

「……………」

無言で掴むと非情にも

グシャツ!!!

握りつぶされた子猫。その肉と血の塊がなのはのバリアジャケットに着いた。はっと顔を上げるなのは。

『みゃあ!みゃあ!』

「ひっ!?!」

バリアジャケットに着いた肉片が子猫の顔になり、鳴きはじめる。なのはは涙を流しながら、首を横に振り続けた。

「ゲッタアアアアア!!!」

その声に、なのははびくつとする。血だらけになり、ただもがくことしかできない暴走体。だが、あれは罪の無い子猫。現実残酷だった。

「ビイイイイムツ!!」

「いやあああああ!?!」

ゲッタービームの直撃を受け、爆発、消滅する二体の暴走体。返り血で赤黒く染まった戦士は、空中に浮かぶ、二つのジュエルシードに手をかざした。

「…ジュエルシード・シリアル?、??、封印。」

『ニギヤtsジャナEdジェウイ!?!?!?』

青く輝き、ゲッターの掌に吸い込められるジュエルシード。それと同時に全く声にならない叫びをあげて溶け始める子猫の肉片。ぶくぶくと沸騰すると、溶けかかった顔から目玉が二つ地面に落ちる。直後それも沸騰をはじめ、バリアジャケットに着いた肉片は消滅した。金属的なボディと対照的な有機的な目が、なのはと合った。

「そいつらの死にざまをよく見る!我々が戦う敵の恐ろしさを見る!!」

ゲッターはなのはを指さして言った。

「今の様な戦い方をしては、次に炎に包まれるのはお前だ。そして人類全体なんだ!!」

フェイトとも一瞬目を合わせるが、無言で背を向ける。振り返る。浴びたぼろぼろのマントが、しずかにたなびいていた。

「ゲッターウィングッ！」

一瞬で木々の上まで飛び上がり、どこともなく去っていくゲッター。高町なのはは、その傷ついた背中をただ見ることしかできなかった。

## チェンジ9 竜馬対クロノの決闘(前書き)

2話にするつもりがなぜか1話にまとめてしまった。なんてこっ  
たい!?

## チェンジ9 竜馬対クロノの決闘

クロノSide

僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。ここ第97管理外世界に、僕の母親でもあるリンディ・ハラオウン提督とともに来ている。ロストロギアの探索が目的だったのだが…今、モニターに映っている二人の少女。何がどうなって争っているのかさっぱりわからないが、その魔力値を見たときに、僕は度肝を抜かれた。異常すぎるその数値。正に『天才』というものを目の当たりにしたんだ。その才能の十分の一でも自分になれば…いや、こんな話はよそう。

ともかく、僕は衝撃を受け続けた。中でも、僕の前に突如として現れたこの男は格段に違うだろう。ぼろぼろの黒いマント。漆黒の体躯。左腕に光る三枚の刃。頭全体を覆い隠す、鬼や悪魔を連想させる仮面。そう、彼は

「…ブラックゲッター…」

そう名乗った。

チェンジ9 竜馬対クロノの決闘

L級次元航行艦『アースラ』内部

その少女、高町なのはは不安げだった。どうにもそわそわして、ツインテールのぴよこぴよこがより一層激しくなっていた。何か中に入っているのだろうか？

『ねえ、ユーノ君。』

念話で、なのははユーノに語りかけた。

『ん？どうしたの、なのは。』

返事をしたユーノに、そつと聞いた。

『あの…黒い人に話しかけても大丈夫かな…？』

『え…ま、まあ、大丈夫だとは思っけど…』

とまどうユーノをよそに、なのはは同行している男に話しかけた。

「あの…ブラックゲッターさんでいいんですよね…？」

「ああ？」

ぶつきらぼうな返事に、ちょっとびびるなのは。彼女に隣にいる男。彼こそが流竜馬だったのだ。しかし何故彼がアースラに居るのか。少し時間を巻き戻してみよう。

30分くらい前

竜馬Side

俺が高町なのはの前に姿を見せてから、しばらくたった。あの日以降暴走体が襲ってくることもなくなったし、ちょこちょこジューエルシードの反応はあるものの、すぐに鎮静化された。どうせなのは

かフェイトが封印していることだろう。でも、そろそろ面倒な奴ら  
が来るかもしれねえ。そう、時空管理局だ。気をつけていても、な  
んかの拍子に鉢合わせ…なんてこともありえる。それは何としても  
避けてえ。

「リヨウ兄、ムサシさん、おおきになー。つき合わしちゃって悪  
いなあ。」

「ん？別にどうってこたあねえよ。にしてもいいダチできたじゃ  
ねえか。」

『そうだけ、はやてちゃん。早くわしとリヨウに教えてくれよ。』

「だーめーや！行ってからの楽しみや！」

今日は、はやてを友達の家に連れて行くことになった。友達がで  
きたなんて嬉しい限りだ。

「ダチはいいぞ。本当に心を許し合えるダチは、一生の宝だ。な、  
ムサシ。お前もそう思うだろ？」

『そうだな。単純に楽しいしな。はやてちゃん、あんなに嬉しそ  
う…あつ！でけえリムジン?!』

見るからに高そうな車がこっちに走ってくる。明らかに俺たち一  
般人とは住む次元が違う人間の乗り物だ。だが、あるうことか、そ  
いつは俺たちの目の前で止まった。自動扉で開く窓。そいつの顔を  
見たとき、俺は固まった。

「あ…」



「え…あのときの…」

紫色の髪日本人なんて誰が忘れるものか。そう、彼女は月村すずか。俺が一カ月くらい前にやくざを追っ払ったときにいた少女だった。

## 2時間経過

いやはや、月村には世話になってしまった。なんか凄い豪邸に招待された揚句、メイドまでいて…なんか長身で無口なのと、ちっちゃくてそそっかしいのがいたな。ちっちゃいほうは終始俺にビビっていたが…話聞くと15つて言うじゃねえか。俺ずつと一つ二つぐらいしか年変わんないのかと思ってた。

「リヨウ兄。私の知らんところで何してたん？」

突然はやての奴が、ほおをつねってきた！

「あだだだだ！ギブギブ！何すんだコンチクシヨウ！！」

「怪我したらほんとどうするん？怪物ならまだしもやーさんまで喧嘩売ってるんやったら怒るで。」

「待て待て。喧嘩は別に売ってないし、そもそも逆に俺は感謝される方じゃ…」

「わたしが法律や！八神家で一番偉いの私なんやから、私の言うことが一番なんや！」

ぼこすかと、どこから出したか分からないピコハンで頭をたたくはやて。何となく楽しそうだった。

「フン。黙って聞いてりゃあ偉そーにしやがって…ちょっとお仕置が必要みてえだな。」

そうやって俺は、メリケンサック（武蔵じゃない方）をはめた。

「ひいつーら、らめえええええ？！おーかーさーれー」意味不明なんだよタコー！」「ぶぎゅう？！」「」

訳の分かんないこと言うはやてを拳骨で黙らせた、そのときだった。

…ドドドド

『ん？おい、リヨウー！』

「ああ。どうやらそうらしいな。」

突然人が消え、遠くで何か爆音が聞こえる。間違うはずはなかった。

「…悪い、はやて。ちょっと先に帰っててくれ。」

「う、うん…気をつけてな、リヨウ兄。」

心配するはやて。

「ああ、大丈夫だ。帰れそうになったら連絡する。…すまねえっ

「!!」

俺ははやてに背を向け、走り出す。武蔵をはめて、夕暮れ空を睨む。

「面倒なことに巻き込みやがって…跡形もなく消し飛ばしてやる!ムサシ!」

「おう!いけ、リヨウ!!」

「チェンジブラックゲッターアアア!!」

ゲッターウイングで飛び上がる俺。はやてが視界に入ったが、俺はそのまま飛び立った。

「…リヨウ兄…ばか…」

そんな声が聞こえた気がした。

竜馬Sideout

今ブラックゲッター…いや、流竜馬は林の中で身を隠している。

その視線の先には、本来敵同士であるはずの二人の少女が共闘していた。

「まったく…何でいつも俺の時だけインベーター化するんだ?」

今なのはたちが戦っている暴走体は、原作で彼女たちが戦ったものと同じ暴走体であった。しかし竜馬がいつも戦う暴走体、いわば暴走体の第二形態にあたるものを、彼は「インベーター化」と名付

けた。

しばらくすると暴走体も鎮圧され、空にジュエルシールドが浮かび上がる。その前に対峙する二人の魔法少女。何か話しているようだが、こちらからは全く聞き取れない。だが、竜馬には会話の内容のおおよそは分かっていた。まあ彼の予想していた通り、両者が得物を振り下ろした瞬間に黒髪の少年が割って入り、制止しようとしているのか、なにやらぶつぶつ言っている。しばらくして

『何だ？仲間割れか？』

「何、ほつといて大丈夫だ。」

仲間割れ。第三者から見ればそう見えるかもしれないが、実際には元々敵同士だった二人が決着をつけているだけの話である。なのはとフェイト。どっちが勝っても竜馬には特に関係はなかった。

「フツ…：ダークホース登場ってとこだな。」

振り下ろされる武器。そこに立ちはだかった少年は、クロノ・ハラウンその人だった。だが、その次に彼の言った言葉に、竜馬は耳を疑うことになる。

「こちらのリーダーには映っているんだ。そこにいる奴、出てこい。」

竜馬のほうを向き、彼は確かにそう言い放ったのだ。

竜馬Side

信じられないの一言だった。だってゲッターは、魔導師とは違って魔力反応は出ないし、どうしてクロノが分かったのか見当もつかなかった。

『リヨウ。ワシ、今気づいたんじゃないけど…』

「どうしたムサシ。もったいぶらずに言えよ。」

この後、俺は自分の馬鹿さ加減に気付いた。

『確かに魔力では見つかんねえけどさ、熱源とか普通のリーダーには、映るんじゃないかって…』

全部魔力。この考えに俺はとらわれていた。魔力しかとらえられないリーダーじゃ、どうやって地球に来たんだって話になる。普通のリーダーだったら、俺の姿もごく簡単に捉えられるじゃねえか！

「どっししよう、ムサシ…」

『まあ、向こうはわかつとるんじゃないあ。一度顔合わせるしかねえ。』

まだばれたくなかったが、俺は茂みから出ることにした。

竜馬 Side out

「こちらのリーダーには映っているんだ。そこにいる奴、出てこい！」

少年の声にびくつと反応する、高町なのは。フェイト・テストロ

ツサは、視線をずらしただけで動じていない。

ガサガサ…

その声に反応したのか、林の草むらが揺れる。だが次の瞬間、少女がすっぽり入るぐらいの背丈の草が一瞬で刈られ、ススキに近い細長い葉が空に舞う。そこに立っていた者を見たとき、さすがのフエイトも目を見開いた。

「僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラウン。お前は一体何者だ！その仮面をとってみる！」

黒光りする装甲。金髪の少女と同じカラーリングだが、明らかに質感の違うマント。鈍く光る左腕の刃。二本の大きな角と、血涙を流しているような眼。全体が機械的なデザインでありながら、この眼だけが生物的であり、妙な不気味さを醸し出していた。クロノは少々圧倒され、強気な態度で話すことしかできなかった。その態度が気に入らなかつたのか、黒い戦士の眼がぎよるとクロノを睨みつける。なのはは恐怖で震え、フエイトも背中に冷たいものを感じた。しばらくすると、その仮面から低い男の声が返ってきた。

「…ブラックゲッター。それが俺の名だ…」

クロノが何か言おうとするが、ゲッターが先に切りだした。

「時空管理局だと？ハッ！地球にそんな組織あるなんて、聞いたことないぜ。」

一応会話が成り立つことを理解したクロノは、ゲッターと名乗る男に話しかけた。

「ふざけるな！お前は一体、どこでデバイスをい手に入れたんだ！どうして魔力を探知できないんだ！詳しい話を聞かせてもらう。」

彼は自身の相棒『S2U』をゲッターに突きつける。ゲッターは動じず、じつとクロノを睨んでいた。

「そんなの手前に教える義理はねえ。凶に乗ってるんじゃないぞ、ガキ。あまり癪に触れることすると、地獄で後悔するぜ。」

すつと肩に手をやると、彼は叫んだ。

「ゲッターアアアア！トマホウウウウクツ！！」

ゴシック彫刻さながらの、繊細なデザインのS2Uに比べ、簡素で武骨なデザインのゲッタートマホーク。だが、竜馬がそれを持つと、なぜか異様な威圧感がにじみ出てきたのだ。

「……………」

両者に訪れる沈黙の時間。アウトレンジともクロスレンジともれない間合い。クロノが一步踏み出そうとしたその時だった。

「…あつ！！」

突然声を上げた少女、高町なのは。ほとんど蚊帳の外だった彼女にクロノは視線を送る。だが、竜馬は、空に浮かぶジュエルシールドの方に目をやった。そこには、今にもジュエルシールドを掴もうとするフェイトの姿があった。

「フツ…馬鹿見ちまったな、ガキンチョ。」

「うるさい！…この距離ならいける！ステインガー・レイ！！」

フェイトを撃墜しようとして、魔導弾を撃つクロノ。まっすぐ飛んだそれにはアルフも反応できず、確実にフェイトを捉えた。

「え…?!」

フェイトの顔に驚愕の表情が浮かぶと、それは青白い光でかき消された。

「フェイトちゃん！！」

なのはの悲痛な声。その直後、クロノは自分のミスに気付いた。

（しまった！あのゲッターとか名乗った奴がない！）

彼ははっと、漂う爆煙に目を向けた。

（あれ…？私、浮いてる…）

フェイト・テストロッサは、目を開けると撃墜されたはずの自分が浮いていることに気付いた。周りを覆う黒煙で、なにも見えない。そんな中、聞き覚えのある男の声が響いた。

「大丈夫か？ガキ。」



その声を聞いた途端、彼女は凍りつく。ブラックゲッター。あの男だ。ある種の本能的なものもあるのか、無意識のうちに逃げ出そうとしていた。

「おい！じたばたするんじゃない。これやるから。」

『えーと…お、あつたあつた。ほれ、嬢ちゃん。もってけ。』

右手を無造作に突き出し、私の手に3つのジュエルシードを置く男。彼の行動は、私には理解しがたいものだった。…私には明確な目的がある。私と戦ったあの白い女の子、高町なのはにもそれなりの理由がありそう。でも、この男だけは、一体何の理由で戦っているのか、さっぱり分からなかった。

「逃げるなら今だ。ほら、とつととずらかれ!!」

「…はい!!」

煙が晴れるのと同時に、私に向かってくるアルフに念話を送る。

『アルフ。私は大丈夫。すぐに離脱するよ!!』

『フェイト!!大丈夫だったんだね!』

急いで転送魔法をかけるアルフ。でも、後ろから管理局の少年が追ってくる。

「くそっ！待てっ!!」

再び飛んでくる光弾。でも、アルフに当たる前に、またしてもブラックゲッターと名乗った男の人が、腕で切り払っていく。

「アルフ、大丈夫！」

「うん、大丈夫。いくよ、フェイト！」

光り輝く魔法陣。光が体を包み込むと、私たちはこの世界から消えたのでした。

フェイト Side out

フェイトとアルフが脱出に成功したあと、クロノとゲッターは向かい合い、お互いの武器を構えていた。

「一体どういうことなんだ。なぜ僕の邪魔をした！」

ゲッターは非常に落ち着いた様子で答えた。

「何となくだ。気が向いたからかばった。」

その答えにクロノは怒った。

「ふざけるな！いいか。彼女のしている行動は、非常に危険なものだ。僕たちはそれを止めるために来た。早い段階で阻止しないと、大変なことになるんだぞ！」

「僕たち…か。仲間も来てんのか。その時空なんかの。」

クロノは少ししまったと思ったが、気を取り直して話した。

「…そうだ。だが、それ以上あなたに教える必要はない。あなた  
のしたことは、完全に公務執行妨害だ。それにわからないことが多  
すぎる。一緒に来てもらおうぞ。」

「そりゃ、力づくってことか？」

「…そう取らざるを得ない。」

その瞬間、無表情のはずのゲッターの顔に、笑みが浮かんだよう  
に見えた。

「そうか。…やってみろよ。お前にできるのならなあ!!」

ブラックゲッターⅡ流竜馬は、大きく一步を踏み出した。

「おおりゃあああああ!!」

ゲッターウィングを大きくはためかせ、クロノに真正面から突っ  
込んでいくゲッターⅠ。ほとんど銃を構えた相手に、徒手で突っ込む  
のと同じだ。しかし、ゲッターにはひとかけらの躊躇もなかった。

「前に出てきただと?!無駄だと分からないのか!!」

クロノは6発のステインガー・レイを放つ。読者の方なら分かる  
通り、比較的威力が抑えられているとはいえ、シールドなしの魔導  
師が喰らったら、ただでは済まない威力である。しかし、現実とは  
いつも斜め上に行くものだった。

「効かんわあああああ!!」

クロノは慄いた。当然だ。あらゆる戦闘において、作戦は大きな意味をなす。当然クロノも、この謎の男、ブラックゲッターに対峙するにあたって策を練っていた。

クロノは、ブラックゲッターが格闘戦が得意だということを読んでいた。確かにゲッターの遠距離武器はゲッタービームしかないし、それも射程はせいぜい15〜20メートル程度。距離をとおだつてしまえば、こちらが一方的に攻撃できてしまうのだ。だからクロノは、まずけん制にステインガー・レイを撃ち込み、当然ガードをするだろうから、その隙に飛び上がって距離をとってから戦うつもりだった。しかし当の相手は防御などせず、一切減速せずに突っ込んできているのだ!

「ば、馬鹿げている!くそっ!」

回り込むために飛び上がったクロノだったが、さすがゲッター、物理法則を全く無視したカーブで、一気に距離を詰める。ある程度さしかかったとき、ゲッターウイングを体にまとわせ、黒い弾丸のような姿になった。

「遅え!!ゲッターアアアア・ビイイイムッ!!」

乱射されたゲッタービームが、地面をえぐりながらクロノに襲いかかる。ラウンドシールドで防御するも、乱射されるゲッタービームを無効化できるはずはなく

「そんな!防ぎきれ…!うわああああっ!!?」

シールドが破壊され、墜落するクロノに、ゲッターは全速で接近

する。墜ちるクロノもそれに気付かないわけはなく、必死に反撃する。しかし突っ込んでくるゲッターを阻止することはできなかった。

「もらったあああああ!!!」

拳のスパイクを展開して、思いっきり殴りつける。当然自動的にシールドは展開されるが、何発も殴られるにつれひびが入り、やがて砕け、その衝撃でクロノは地面に衝突することになった。

「が…げほっ！げほっ!!!」

口から血の混じった吐しゃ物を吐きだし、腹を押さえ悶えるクロノ。ゲッターはゆっくりと歩み寄ると、クロノの髪を掴み、ベンチにうつぶせの状態に乗せ、首だけを外に出して押さえつけた。

『リヨウ…おい、やめろ!!!』

武蔵が止めようとするが、もう彼は行動に移していた。

「手前のその冴えねえ面、ゲッタートマホークで斬り落としてやる!!!」

クロノを押し倒し、がっちりとうつぶせで固定する。ぴたりとトマホークの刃を首に付けるゲッター。その冷たさを感じてクロノの顔が青ざめ、こわばる。必死に制止する武蔵。しかし、彼にはゲッター、いや、竜馬を止めることはできなかった。

「ふん。物も言えねえか。なら」

ゆっくりとゲッタートマホークを持ち上げる竜馬。クロノが動か

ないと見るや否や、一気に振り下ろした!!

「死ねええええええええ!!」

『やめろ、リヨオオオオ!!』

竜馬の罵声と武蔵の叫びが重なり、ゲッタートマホークが振り下ろされる。その刃が首に触れる、そのときだった。

「デイバイイイイン・バスタアアアア!!」

「何っ?! くっ… うおっ!!?」

横から突如として飛んできた桃色の光線に直撃し、吹き飛ばされるゲッター。クロノを攻撃している間、ゲッターは惜しくも高町なのはの存在を忘れていた。恐怖で足をすくませた彼女が、いつまでも何もしてこなかったからである。油断してしまった自分に舌打ちすると、飛ばされながらも体勢を立て直す。

「こんの…ゲッターアアア・ビィ『待ちなさい!!』ぬおっ?!」

ゲッタービームを体制をとったゲッターだったが、四肢を緑色のバインドで拘束されてしまった。その太さは、とても個人でできる代物ではなかった。

「くっぞ、引きちぎってやる!ぬっおおおおおお!!」

ゲッターがいくら暴れようが、バインドはびくともしなかった。

『対艦バインド出力安定！目標を完全に拘束しました。』

『よくやったわ、エイミー。さて…』

どこからともなく声が聞こえると、空に巨大なスクリーンが映し出される。そこに映るは、緑の髪を後ろに束ねた、見たこともない制服を身にまとった女性だった。

『話は大体わかったわ。…ブラックゲッターさんでよろしいですか？事情はこちらで伺います。エイミー！クロノの回収を！』

『りょーかい！』

画面には映っていないエイミーとかいう人物に話しかけると、彼女はこちらを向いた。

『私は時空管理局のリンディ・ハラオウンです。あ、それと高町なのはさんでよろしいかしら？あなたも来ていただくとうれしいんだけど…』

「は、はい…」

なにやらどんどんと危険な方向に向かっていくことを感じたゲッターもとい竜馬は、バインドで縛られながらうなだれた。

「畜生…」

『こつなつたらしようがねえ。ま、成行きに任せるしかねえな、リヨウ。』

拳のスパイクを出し入れしながら、リンディをじっと睨みつける竜馬であった。



チェンジ10 決別する想い(前書き)

ついに二桁目に突入。飽きずによくやったものだ。

## チェンジ10 決別する想い

その日、アースラ内部では、緊迫した状況が続いていた。フェレットを肩に乗せた少女と、何重にもバインドで拘束された男。魔法文明が全く発展してない世界『地球』において、優秀な魔導師の身柄を確保することに成功したのだ。このツインテールの少女は、普通とは比べ物にならないほどの魔力資質を持っていることが確認され、正直管理局としてはのどから手が出るほどの人材だろう。だが、問題は彼女ではない。その横の外套を被ったような姿の男。彼に問題がありすぎた。

「しっかし…対艦用バインドを人間にかけるなんて…」

「おい、ばか！声でけえよ！」

職員がそういうのも無理はない。バインドに代表される拘束系魔法は、艦のコンピュータで増幅し、さらに強化して使うこともできる。たとえば巨大なロストロギアや犯罪グループの所属する小型艦などを捕獲する際に使用する、対艦用バインドが代表例だろう。当然ながら人間相手に使うものではない。しかし、このブラックゲッターと名乗った男の戦闘能力から判断して、そうせざるを得なかったのは事実であろう。そもそも『男』とはいいが、彼自身が本当に男なのか、そもそも人間なのかすらも判別できない状況にあった。ミッド式、ベル力式の両方に全く当てはまらない魔法。それだけでも非常に不気味であり、脅威の対象になりえたのである。だが、当の本人は、そんなことなど知る由もなかった。

（おい、いつまで歩くんだ、ムサシ。）

むすつとした表情（外見では分からないが）で竜馬は武蔵に言った。

（まあ、待てよりヨウ。もうそろそろで着くと思っぜ。）

武蔵がそういったその時だった。

チエンジ10 決別する想い

「あの…ブラックゲッターさん…でいいんですね？」

突然隣の少女、高町なのはが話しかけてきたのだ。しかしイライラしていたこともあり、竜馬はぶっきらぼうに返事をしてしまった。

「ああ！…！」

「ふえ！あうあう…！」

あまりのビビり様に、さすがの竜馬も困った。実際、竜馬は子供が嫌いなわけではない。どちらかといえば好きなほうだ。彼曰くほつておけないそうだ。

「…すまん…！」

「あ、いえ…！」

そこからはばらく続いた沈黙の時間。今歩いている廊下もそれほど長さはないから、時間的には一分もたっていないだろう。しかし、

二人にとって、いや、特に高町なのはにとっては何分にも何時間にも感じたのであった。ものすごく居づらい雰囲気、辺りを支配していた。そんな空気を察したのか、はたまた彼が空気を読めなかったのか、さつきからなのはの肩に乗っかっていたフェレットが、いきなりしゃべりだした。

『ブラックゲッターさん。あなたの魔法は、この世界のあらゆる魔法形態から大きくかけ離れています。あなたは一体何者なんですか？』

知っているとはいえ、実際にしゃべる動物を見ると気味悪く感じた竜馬。多少リアクションをとろうと思ったその時だった。

『ひえ〜？！お、おい、リョウ！イタチがしゃべってるぞ！どういっこった！！』

「フツ…幻聴さ。あんなケダモノがしゃべるわけねえだろ？」

基本ポケ担当の武蔵がつっこんだから、結構普通の受け答えをしてしまった竜馬。だが、この直後後悔した。

「えっ？！日本語でしゃべるデバイス！それに人間みたいな名前…あと、ユーノ君はフェレット！イタチじゃないよ！！」

『あー、すまねえ。フェレットっていいのか、こいつ。』

なのはと武蔵が普通に会話をはじめたその時だった。

『待って、なのは！今、そのデバイス、【リョウ】って言わなかった？』

やばいと竜馬が感じた時には遅かった。

「やっぱりそうなんですね！あなたの本当の名前は、ズバリ【リョウ】さんです！」

某体は大人素顔は子供の名探偵のごとく、ビシリと指さして断言するなのは。ユーノの言ったことそのまま言っただけじゃんとツツコんではいけない。

「…好きにしゃがれ。」

竜馬は吐き捨てるようにそう言うと、そのまま歩き出した。そうこうするうちにドアにぶち当たり、そのまま竜馬たちは指令室へ入って行った。

…面倒なので、なのはがユーノの正体を知った時の描写は控えさせてもらおう。

竜馬Side

リンディ・ハラオウン。今俺の前に居るこの女、恐らく現段階では最大の敵になりえるだろう。ただし幸い、まだこちらが明確に管理局に対して敵意を表していない以上、ドンドンパチパチにはならないだろう。しかしこっちが派手にこいつの息子ぶっ潰しちまったから、どうなるか分からないが…

「はじめまして。私がリンディ・ハラオウン。この戦艦、アースラの艦長よ。」

「わ、わたし、高町なのはです!..!」

「ユーノ・スクライアです。よろしくお願いします。」

「.....」

この二人のガキはいいとして、どうも初対面の相手に名乗るのを渋るのが日本人だと思う。見ず知らずの人間、それも敵なのか味方なのかはつきりしてない人間に、いきなり自己紹介は無いと思う。

「...事情は聞いているわ。ブラックゲッター...いや、『リヨウ』  
さんでいいですか?」

「ふん。壁に耳あり、障子に目ありといったところだな。ぬかり  
ない女狐だぜ。」

「そう? 光栄だわ。」

「けっ...」

何となく予想はしていたが、全部傍受されていたか。確かにそう  
だ。でもずっと見られてたと思うと気味悪くなってくる。...もしト  
イレなんかに行ったらどうなるんだ? まさか中まで...いや、やめよ  
うこんな話。

「貴方のデバイスは全く見たことないタイプだわ。そもそも貴方  
の使う魔法自体、どちらかといえば質量兵器に近いの。そのデバイ  
スをどこで手に入れたのか...教えてくださらないかしら?」

「…嫌だと言ったら？」

「さあ。どちらが貴方にとって得かしら？そもそも貴方に拒否権があると思いで？」

…こんな人だったっけ？リンディさんって。まさか息子がぼこられたことまだ根に持つてるのか！？い、いや、そんなだったらはなっから息子を管理局になんて入れないはずだ。ある意味俺がこの世界で接した人間の中で、最も苦手なタイプなんじゃないのか？な、なんとかしなければ…

「…話せない事情があるようね。」

「誰だってプライバシーの権利はあるぜ。んで、どうするんだ？俺をひつとらせるのか？それとも逃がしてくれるのか？YESかNOか、その答えを聞きたい。それによって俺も態度を変えなければならねえ。」

しばらく考え込む…フリをするリンディ。畜生め！最初から言うこと決まってるならばつきり言えばいいじゃねえか！

「両方ね。こちらはあなたの自由を阻害したくないし、かといって野放しにするわけにはいかない。」

「ああ？てめえ何が言いてえんだ！俺に分かるように説明しろ！」

その後、奴の口から出た言葉は意外なものだった。

「時空管理局で貴方を雇うのよ。傭兵としてね。貴方にはこちら

の指揮下に入ってもらおうけど、私たちは貴方に対して決して危害は加えないわ。悪い話ではないと思うけど？」

「ほう…報酬は？こつちだつて命張るんだ。ボランティアですなんつつたらぶん殴るぞ。」

「傭兵ですもの。こちらからきちんと報酬は払わせてもらつわ。もちろん日本円でね。」

…今思つたんだけど、隣の幼女+ケダモノがぼかーんとしている。ぶつちやけ何言ってるのか分かってないみたいだし、そもそも9か10の女の子がこんなこと理解できたら怖い。リリカルも糞もない、銭つこくせえ話だ。

「…ずっと立つてて疲れたる。その辺座つてていいぞ。なあ、艦長殿もそれでいいだろ？」

「え、ええ、そうね。疲れたら席離れてもいいからね。」

「は、はいっ！行こつ、ユーノ君。」

とりあえず邪魔なのはいなくなつたし、本題を話そうと思つたそのときだった。

「…じゃあ、話の続きといきま」艦長！その男の言うことを鵜呑みにしてはいけません！…何？」

いきなりドアが開くな否や、俺がさつきぶつ飛ばした男、クロノ・ハラウンその人が入ってきた。頭には包帯を巻き、右腕は固定されている。その眼は俺に凄い気迫を出しているが、ま、所詮は負け



犬の遠吠えにすぎない。

「だめだよクロノ！右腕まだ動かさせないんだから！」

「エイミイ、離してくれ！素性も分からない敵に作戦を任せられると思うかつ！母さん！いや、艦長！どうなんですか！！」

エイミイの制止を振り切って、足を引きずりながら来るクロノ。竜馬はそもそも興味などなかった。

「フン。オペレーターの方がこんな状況なのに彼氏の見舞いか？クク…真つ先に落とされるな、この艦は。そう思うだろ？艦長。」

「お前、ひ、人の話を聞「だまれええええ！！」ぐわっ？！」

足を引きずって会話に割り込もうとしたクロノを、俺は容赦なく蹴り飛ばした。デスクにぶつかってうめき声上げていたりするが関係ない。

「クロノ！な、なんてことするの！！」

さすがに重傷の息子を目の前で蹴り飛ばされて癩に障ったのか、今度はリンディの野郎が突っかかってきやがった。

「ああ？負け犬は負け犬らしく、底辺這いつくばってればいいんだよ。世の中弱肉強食よ。弱え奴は死に！強え奴だけが生き残る！生かしてやっただけでも感謝しな。んで、どうなんだ？いくらだ？いくらで俺を雇う？」

ほとんど脅迫だが仕方がない。ここであいつらに、はやてと闇の

書が知られるとまずい。しばらく居なくなるが、その分あいつに仕送りができるだろう。それに急に面倒なことが起こるとまずい。

「…労災や手当付きで300万。作戦が成功した暁にはさらに上乘せするわ。どう？悪い話ではないと思うけど」

「フツ…いいぜ。だが、ちょっと待ってくれ。」

「？」

「…少し話をしたい奴がいるもんでな。」

今俺は、公衆電話の前に居る。ケータイが普及してから一気に少なくなったものだ。というのも、俺は今やてに電話をかけている。物分かりのいいあいつは、俺の言うことを素直に納得してくれた。

「…ということなんだ。…すまねえ。」

『うん…ちょっと寂しくなるけど…リョウ兄が行くんならわたしは止めへん。』

「はやて…」

『だから、本当に…体だけは気をつけてな!』

「お、おい！はやて！はやてっ！…！」

一方的に切られた受話器からは、ツーツーをいう音しか聞こえてこない。少しあいつ鼻声だった。

「…はやて…すまん。」

受話器を下ろすと、電話ボックスの先から奴が見ている。まさか本格的に介入することになるとは。少し早すぎる気はするが仕方がない。

「チツ…この落とし前、どうつけてくれようか…なあ、プレシア・テスタロツサ…!!」

俺は見えない敵に向かって、そう言い放った。

おまけ

(これは竜馬がはやてと電話で会話していたシーンでのこと…)

「いやー、神経使うわ。ね、エイミィ。」

『ちよ、ちよっと…び、びっくりしたよ！急にシリアスになるんだから!』

リンディ・ハラオウンは、俗に言う『暇人』である。かつて神隼人や碇ゲンドウや静かなる中条(全部オツサン)の陥った道をまっしぐらしていた。ぶっちゃけ今回ちよつと腹黒リンディさんだったけど、そう見せかけておいて、実は楽しんでるところがあった。(本人曰く「交渉人 リンディ・ハラオウンシリーズ」を作りたかったらしい。もちろん却下)怪我したクロノには「唾つけりゃあ治る」

で一蹴だし、今回全然出番なくてがっかりしているのはには、「  
今度フェイトちゃんのお××をア・ゲ・ル？」と物で釣る始末…彼  
女の会話に突っ込んではいけない…なぜならこれはおまけだから。

「小さい頃…ネゴシエーターになるのが夢だったのよね…」

『ウソでしょ。』

「ビッグオー・ショータイツ!!」

『うるさい。』

今日もアースラは平和である。平和つつたら平和である!!

「ば…僕の立場って…それにしても×××って何…」

相変わらずクロノはかわいいそうな奴だった。

祝PV50000突破企画 ゲッターなのは 第二話(前書き)

書き終わったときにはPVが60000に近くなっていた…ある意味スパークロナタイムです、はい。

## 祝PV50000突破企画 ゲッターなのは 第二話

祝PV50000突破記念なの

ゲッターなのは 第二話

\*早速原作キャラのひとりグロすぎる死に方をします。ゆっくりしてっつてね！\*

浅間山山麓 時空管理局 ハラオウン研究所

このところずっと続いている雨。一人の局員が観測に出ていた。

「全くよく降りやがる雨だな。もう春だつてのにあつたかくならねえな。」

局員は手に息を吹きかけると、ボールペンを手に取った。

「早く観測を終わらせてストーブに温まろう。」

仕事に集中する局員。すると上から何か降ってきた。頭についたそれを持つてみると…

「なんだ…？わあっ！？フェレット！？」

突然のことで驚くのも無理もない。フェレットを払うと手を拭いた。

「な、なんでこんなところにフェレットが？」

その直後

びしゃ

「うわっ!」

またフェレットが落ちてくる。それを見上げるとどんどんフェレットの数が増えていった。

「ぎゃあっ!!!」

局員の顔には二、三匹のフェレットがへばりついている。しかし降ってくる数は見る見るうちに増えていく。

「空からフェレットが降ってきた!!ヒイヒイヒイ!!?」

局員の体を無数のフェレットが覆い、ついにはその姿が見えなくなる。観測所の地面一面はフェレットだらけになり、その数は優に200匹を超えていた。その大群はゆっくりと、しかし確実にはハラウン研究所へと向かって行ったのであった。

「うわああああああ!!」

なのはが起きるとそこは、見知らぬ天井だった。自分の体には包帯が巻かれ、家族が死んでからは一度も寝たことのない上等な寝具に横になっていた。

「びつくりした！急に大声出すんだもん。」

顔を上げると、茶髪の女が立っていた。頭のアホ毛がとても気になる。

「ちっ、夢か…」

「あらら…まだ寝ぼけてるの？」

頭がシャッキリしてくると、なのはの思考回路は正常に戻った。

「はっ！君は誰…？わたしは何でこんなところに居るの？」

「私はエイミィ・リミエッタ。貴方は夕べ気を失ったまま艦長に運ばれてきたんだよ。」

なのははエイミィに聞いた。

「艦長ってあの緑のポニーテールでおでこに変なあざのあるババアなの？」

「バ、ババアって…まあ、そうだけど…」

するとなのははベッドを殴りつけた。

「くそっ！あの野郎どこにいるの…！」

「えっ」

「あの野郎が私をこんな目に遭わせたうえ、なにもわからないう



ちにこんなわけの分かんないところへ拉致しやがって。あいつとO  
HANASHIして理由を無理やりにも吐かせてやるの。奴はど  
こなのっ!」

なのはがエイミイの胸ぐらを掴んだその時だった。

『エイミイ。なのはさんが気が付いたらすぐ連れてきなさい。』

その声を聞くとなのはは手を離れた。

「ふん。こつちから行ってやるの。エイミイ。案内するの。」

「あらら。あなたも怖いけど艦長はもっと怖いわ。心して行くこ  
とね。」

二人がドアの外に出るなり、なのはの眼には信じられないものが  
映った。

「ん!? す、すごいロボットなの…」

なのはも少しは世間のこと分かる。今の日本の科学技術では、  
二足歩行ロボットは人と同じ大きさ程度のものしか作れないはずだ  
った。いや、作れないとされてきた。しかし、今なのはの目の前に  
あるロボットたちは優に20メートルは超えているものばかりだっ  
た。

「あ、あれは動くの?」

「うん。そこにあるのは作りかけだけど、完成したのものは、も  
うガッシンガッシン動くわ。貴方のここで働くようになるんだから

しっかり見といてね。」

「わたしがここで？冗談じゃないの。」

「艦長は貴方が何て言おうとも許す人じゃないよ。」

「……」

そうこうしているうちに、ドアの前に来た。

「おはいり。」

中から声がすると同時に、なのはとエイミイは中へ入って行った。

「おお！来たのね、なのはさん。体はもう大丈夫？こんなに回復が早いなんて思わなかったわ。」

「そんなことより聞きてえことがあるの。」

しかしリンディは無視した。

「おっと、自己紹介が遅れたわね。私はリンディ・ハラオウン。この研究所の所長と、地下にある地底要塞アースラの艦長をしているわ。そしてここに居るのは、君を三カ月間みっちりしこんでくれるクロノというものよ。」

「クロノ・ハラオウンです。よろしく。」

リンディは途切れることなくしゃべり続けた。

「三カ月間はこいつの指導にしたがってもらおうわ。寝起きもこの研究所を使って。あ、部屋は冷暖房完備だから。食事も毎日三食、ばっちり出るわ。訓練は少々厳しいけど、なに、貴方ならすぐになせるようになるわ。クロノ。早速今日からはじめて。」

「はい。高町なのはと言ったね。今日はまず研究所を案内するから、僕についてきてくれ。」

ポカーンとなっていたのはだったが、やっと正気に戻った。

「冗談じゃないの。何の説明もなしに何をやらせようとしてるの。私に分かるように説明しろなの！」

その直後、リンデイの眼光がなのはを貫いた。さすがのなのはもその迫力に黙ってしまった。

「訳を言っても今の貴方には分からないわ。とにかく命令には従ってもらおうわ。それから一切の口答えをしないで。長生きしたければ黙って私の言う通りにすることね。」

「くっ…!!」

その時だった。

ビーツー！ビーツー！…

鳴り響くサイレンの音。一気にその場が騒がしくなる。

「どうした！」

『な、何者かが研究場内に入りこみました。電線がズタズタに切られ…ひっ！？く、くるなあ！！』

「何！ねえ、何が起きてるの！？」

『フェ…フェレット…緑色の眼の…うぎゃっ！！』

短い悲鳴とともに回線は切れた。

「クロノ！研究所に非常態勢を取らせろ！！」

「了解！！」

ミシ…

ふとなのはの後ろの壁から何か音がする。なのはが不思議に思ったその時だった。

バリーツ！！

後ろの窓ガラスが割れて、無数の細長い生き物がなだれ込んでくる！！よく見るとそれはフェレットだった！？

「うわあああああ！！！」

「にげる、なのは！！ここは僕に任せろ。お前は艦長とエイミィを連れて逃げてくれ！！！」

フェレットの群れにひとり突っ込んでゆくクロノ。そのすきにリンディはドアを開いた。

「なのはさん！早く！！」

「待つて！あの中にはまだクロノが…」

しかしエイミイの言葉は無視され、ドアは非情にもロックされた。

「いま大切なのは生き延びることよ！彼は命を張っているわ。今ここで引き返したらすべてが無駄になるの。わかるっ！！」

「で、でも…」

その会話になのが割り込んだ。

「リンディ艦長。あれはいったい何なの！何でフェレットがイナゴみたいに襲ってくるの！？」

「分からないわ。ただここ数年、君も見たとおりヒト以外の生物の進化が進んでいることは確かだわ。でも、こんな狂ったように攻撃してきたなんてはじめてよ！！」

「まてっ！あぶない！！」

なのはの声で全員が止まる。するとガラスを突き破って、またしても大量のフェレットがなだれ込む。このまま進んでいたら飲み込まれていたに違いない。

「くそっ！しまった！！」

なんと後ろのガラスも突き破られ、三人はフェレットに挟み撃ち

にされてしまった。絶対絶命のピンチ！しかしなのはは両脇に二人を抱えると、ジャンプした！壁をけり進み、前進するなのは。大ジャンプすると、一気に扉に向かって飛び蹴りをかました！破壊される自動ドア。着地したなのはたちの見た光景は！！

「くそっ！奴らめ、ここまで来ていたの！？」

爆破されるロボット工場。そのには無数のフェレットが蠢いていた。

「きゃっ！！！」

突然のエイミイの悲鳴。すると足元にフェレットが群がっていた。なのははフェレットを数匹踏みつぶすと、二人を連れて走り出した！目の前の自動ドアの先には…

「こ、これは…！！！」

それは衝撃的なデザインだった。亀の甲羅の様な顔。真紅のボディ。二本の巨大な角。そう、このロボットこそが高町なのはの運命を、そして人類、地球、いや、宇宙全体の運命を変えることになるとは、まだ誰も知る由もなかった。

「すごいロボットなの…でも、胴体がないの。まだ未完成なのか…」

するとリンディが何かを渡してきた。

「これは？」

「火炎放射機よ。入ってきた奴はこれで焼き殺して。」

エイミイが壁に耳をあてる。徐々に大きくなっていく音。額にー  
筋汗が光る。それが地面に落ちたその時だった。

「くるわ！」

「よし、扉を開けるの！」

扉が開くと、目の前には無数のフェレットが待ち構えていた！それと同時に火炎放射機の炎が、フェレットの群れを焼きつくした！！

「へへへ。ざまあみるなの。散々脅かしてくれたお礼なの。一匹残らず跡形もなく焼き殺してやるの。」

あたりにいたフェレットが全滅すると、むこうから誰かがこっちに向かっている。クロノと研究員だ！しかし明らかに様子がおかしかった。

「あ…ああ…」

「クロノ君！」

クロノの体はフェレットに覆われていた。うつろな目でよだれを垂らしながら向かってくる。

「フェレットが人間をコントロールしている！？」

「きゃあ！クロノ！！！」

しかしクロノは進んでくる。

「あわあ。あ。」

「気をしっかり持つの、クロノ君。それ以上近づいたら貴方も撃つ。」

しかしクロノは答えなかった。

「だめだ。完全に体を征服されてる。そうかといってフェレットと一緒に研究所の人とクロノ君を殺せない。どうしようか。」

「あ…わ…わ…わ…わ…っ!!」

ついにクロノが飛び上がる！なのはが火炎放射機の引き金にてをかけたその時

「なのは！クロノを撃たないで！私の婚約者なの!!」

「婚約者だと!?!」

そのとき、なのはの動きが一瞬止まった。

「うっ！しまった!?!」

フェレットがなのはの顔につく。

「くわわー!!」

クロノがなのはに襲いかかろうとしたその時!



ズワーーーーー!!

「ぎゃああああああ!!」

「きゃあ!クロノっ!!」

クロノの体が炎に包まれる。生きたまま焼き殺されるクロノ。しかし一体だれが!?そう、それは、彼の母親であるリンディ・ハラオウンその人であった。

「なのはさん。敵を見たら考えるな。すぐに殺しなさい。」

リンディは怒鳴りつけた。

「なのはさん。非情になりきりなさい。敵は貴方の考えるほど甘くはないわ。」

すると炎の中で何か蠢く。研究員の男が飛び出してきた!

「キイイイイイ!!」

ズワーーーー!!

焼き殺される男。それを指差しリンディは言った。

「そいつらの死にざまをよく見なさい。われわれが戦う敵の恐ろしさを見なさい!人類以外の生物がどうやって私の息子を殺したか見なさい!!今の様な戦い方をしていては、次に炎に包まれるのは貴方よ。そして人類全体なのよ!」

「ま、待ってくれなの。話がぶっ飛びすぎなの。フェレットのよ  
うな下等動物が何故こんなことをするの？」

「下等ではないわ！」

おもむろにリンディは、焼け死んだフェレットを一匹掴むと、頭  
を引きちぎった。そこに指を突っ込むと、なにかが手に落ちた。

「これが奴らの脳みそよ。こんな小さな体なのに、これだけ大き  
な脳を持っているわ。恐らくやつらが人間大だったら人間以上の働  
きをするわ。」

その時だった。天井が突然壊れ、がれきが落ちてくる。上空には  
三匹の羽根の生えた巨大なフェレットが迫っていた！

「な、何て化け物だ！？」

「なのはさん！ゲッターロボを使うのよ！」

リンディは、胸だけのロボットを指差して言った。

「げ、下駄ロボ…？わ、わたし免許持っていないの！」

「免許など後でいくらでも作ってやるわ！とにかく乗って動か  
しなさい。細かいことは電子頭脳がやってくれるわ。」

なのはは言った。

「これなら…なんとかなるの？」

「なんとかなる!!」

巨大フェレットの一匹が中を覗き込む。すると中から二つの光が光った。警戒するフェレット。しかしそれは遅かった。

「いけえええええええ!!」

高町なのはの叫びとともに、ゲッターロボがフェレットを貫く！胴体から真っ二つになるフェレット。反転するともう一匹の頭をつぶした！

「皆殺しにしてやるの！死ねなの!!」

最後のフェレットが逃げようとするが、ゲッターの速さには敵わなかった。後ろから激突され、羽根の一枚が無残に引き裂かれる。きりもみ状に落下するフェレット。その先には鉄骨が立っていた。

「ギヤアアアアア!!」

グシャーーーーー!!??

雨の空。壊滅したハラオウン研究所と頭から串刺しになって絶命した巨大フェレットをバツクに三人の人影が立っていた。

「みんなやられちゃったの。研究所はぼろぼろなの。」

「心配しないで。研究所は政府が何とかしてくれるわ。所員もいくらでも集められる。アースラも大破してしまったけど、数カ月後には「艦長!!」」

そういったのはエイミーだった。

「艦長は残酷な人よ。自分の息子が目の前で死んだってのに、それなのに憐れみの言葉一つかけようとしないなんて。」

しかしリンディは

「私となのはさんが生きていればいいのよ！それだけでも運がよかったのよ。ゲッター計画を完成させるには、あとふたり。あとふたりなのはさんのような人間が必要だわ。」

泣き叫ぶエイミー。背を向けるリンディ。しかしなのはは分かった。彼女が背中では泣いていることを。しかし、これはまだ事件の発端に過ぎなかったのだ…

一方その頃

ここは地下深くにある謎のアジト。日の光の全くささない海底のさらに奥深く。人間には作れない謎の巨大要塞がそこにはあった。

「何？メカフェレットが三体やられただと？」

「はい。なにやら巨大なロボットの様です。完成途中だったらしいのですが…」



祝PV50000突破企画 ゲッターなのは 第二話(後書き)

クロくんが死にました。ラスボスは帝王ユーノです。そしてこの流れだとエイミイがミチル"ヒロインの座に…なんてこったい！次は80000超えたらやろっかな…

チェンジ11 始動！嵐の海！！（前書き）

旅行に行く直前の投稿です。これやったら寝る！！

チエンジン11 始動！嵐の海！！

「うおおりゃあああああ！！トマホオオオク・ブウウウウ  
ウウメラントッ！！」

鳥のような姿の暴走体を、ゲッタートマホークが真つ二つに斬り裂く。管理局と組んでからは、何かと仕事が早く進むようになった。

「こちらゲッター。敵は殲滅した。帰還する。」

『わかったわ。エイミィ！座標を固定して！』

『了解！』

いずれにしても、この仕事は早く終わらせたい。早く俺は…

「家に…帰るんだ…！！」

チエンジン11 始動！嵐の海！！

「畜生め…あーあ。腹減った腹減った。」

俺は個室に入ると鍵を閉め、変身を解除した。当然ながら監視力メラの類は先に撤去させたし、もしあったとしたら内側からこの艦沈めるぞと脅してある。まあ武蔵もいるし大丈夫だろう。あ、バインド？これって変身解除してもくっついてるんだな。まあそうでなきや意味ねえが。



「変身解除しねえと物食えねんだよな…不便だぜ。」

ゲッターには口はない。(アークと偽ドラゴン?以外)さすがの流竜馬とはいえ、腹が減っては戦はできん。前世の頃から一日三食は欠かせない俺は、どうしても腹が減る。そんなもんだから素顔ばれないようにこっそりと自室で飯にあるついてるわけだ。ちなみにゲッターウイングの500キロで3分飛行した時の消費カロリーって、5キロマラソンしたのと同じだそう。なのに教えた張本人の武蔵があんな体型なのか俺には理解できない。何でって聞いたら

『そりやお前、ゲッター3のパイロットが太っちょじゃなきゃ、この世は末じゃあ。』

ときたまもんだ。まあブラックゲッターは関係ないけど。…あれ? ひよっとして偽書って…考えるのはよそう。

「唐揚げ5個で120円は安くね?」

『いくな〜リョウ。わしも食いたい…』

と他愛無い話をしてると、向こうからドアをたたく音が聞こえた。

「…誰だ。」

「ひゃう!?!あ、あの、高町なのはです…リンディさんが全員指令室に集合してって言ってましたから…ごめんなさいっ!」

ぱたぱたと聞こえる足音。奴め、逃げたな。

「…別に人に好かれないとか微塵も思わねえがよお。こりゃちよつとひでえんじゃねえのか？」

『いや…リヨウ。お前自分の胸に手え当ててみる。お前となのはとかいう嬢ちゃんとの初対面。』

「…俺は間違ったことをしたつもりはない。あそこで殺さなければ危険だった。降りかかる火の粉はすべて払うつもりだ。チェンジ  
ブラックゲッター・スイツチオン。」

俺は装甲に身を包むと、指令室に向かった。

「…遅くなった。」

「いいえ、これから説明しようと思っていたところだったわ。それでは始めますね。」

リンディが合図すると、頭上に巨大なモニターが現れた。そこに映っていた少女を見て、声を上げたのは高町なのはだった。

「フェイトちゃん?! 何でこんなところに!!」

言えばその画像は『嵐』そのものだった。黒くよんだ空。激しい風と雨に打たれながら、ひとりの少女が苦痛の表情で辛うじてその場にとどまっている。何をしようとしているか、見え見えだった。

「フン…複数同時に暴走させたな、あの馬鹿め。」

そんなゲッターになのはは聞いた。

「え…フェイトちゃんは一体何をする気なの？」

「見て分からねえか？あの馬鹿、何考えてるのか知らねえが、複数のジュエルシードを同時に発動させたようだ。しかも一個や二個の話じゃねえ。お前が一番よくわかってんだろ？あれ一個であんなに手を焼いてたんだからな。フフ…自滅とは滑稽だな。ありがたく彼女には犠牲になってもらおう。邪魔だからな。ハツハツハツ…」

楽しげにそれを見るゲッターに、なのはは怒りを覚えた。

「…何で？あのままじゃフェイトちゃんが！」

「あんなガキなどどうでもいい。生きてようが死んでようが俺には関係ねえ。」

「そんな…」

「君の言い分は分かる。だけど君一人で艦の決定をすることはできない。」

ゲッター…もとい竜馬を弁護したのは、言うまでもないクロノ・ハラオウンだった。あれからしばらく時間がたち、今ではもう出撃できるくらいに回復していた。もといそれには彼のただならぬ努力もあるのだが。

「いいか。確かに君の言い分もわかる。だが、君一人行ったところでどうこうできる問題ではない。」

「んな難しいこと言うなよ。いいか、チビ助。あのガキが今発動したジュエルシード。その後奴がぶつ倒れてくりゃこっちのもんだぜ？ジュエルシードなんか全部かすめ取っちまえばいいんだし、そのあと奴を人質にすれば使い魔もどうにもできない。」

それに止めを刺したのはリンディだった。

「なのはさん、よく聞いて。…私たちは常に最善の選択をしなければならぬ。残酷に見えるかもしれないけど…これが現実。」

「そ…そんな…そんなのって…!!」

「なのはっ!!」

走って出ていくなのはの後をユーノが追いかける。クロノはため息をつくと振り返った。

「…さて、仕切りなおしだ。リヨウ…貴方の案に僕も賛成だ。無駄な戦闘は避けるべきだと思っている。」

「フツ…まあ、こっちはふんぞり返ってモニター見てりゃあ事はすべて万事解決といったところだ。だがそれじゃあ少し腑に落ちねえところがある。」

聞き返してくるクロノに俺は言った。

「あの金髪のカキ…あいつが自分のためにジュエルシードを集めているとは思えねえ。となると奴をいい様に利用してジュエルシードを集めている馬鹿がいる。」

「そうだな…彼女はお母さんのためとか言っていた。母親が娘に搜索させている可能性が高い。」

そう、もうすぐプレシア・テストロツサの名が上がるはずだ。どこのババアか知らねえが、俺に喧嘩売ったことを地獄で後悔させてやる。そう思った時だった。

『行つて!!』

なんかそんな声がしたと思って振り向いたら、ユーノの野郎がゲートポートを開いてやがった!? クソツ! 無印編の記憶があいまいだったのが響いたか…

「ごめんなさい! 高町なのは、指示を無視して勝手な行動をとります!!」

ユーノは素早く印を結ぶと叫んだ。

「あの子を結界内へ…転送!!」

やばいと感じて俺たち二人は走り出した!

「やらせはしねえ(しない)!!」

ズルッ

はずだった…

デーモン!!

何が起こったのか説明すると…

? 俺たち二人が走り出した

? クロノが椅子の足につまずいて転びかけた

? とつさにゲッターウィングを掴んだ

? 俺までバランスを崩して…

「この…ヴァカ野郎!! なにやってるんだこのタコ!!」

「うつつ…す、すまない…」

「すまねえじゃねえ! ごめんて済んだらこの世に警察はいらねえんだ! 謝るぐらいだったらとつと準備しろ。おい、艦長さんよお。この邪魔っけなのを取ってくれねえか?」

するとリンディは

「それはバインドを解除するってこと?」

「ああ。そつだ。」

「許可すると思ったのかしら?」

「するもしないもお前の勝手だ。だが、高町なのはとユーノ・スクライア、それにフェイト・テストロツサ。俺を行かせるのならば、この三人の命は確実に確保してみせる。」

「そお？ボランティア…とは言わないわ。」

「フツ…分かってるじゃねえか。依頼は確実にこなすさ。その分報酬は弾んでもらうがな。」

「…エイミィ。バインドを解除して。」

「り、了解！」

バインドがほどけると、俺はゲートへと向かった。

「ちよ、ちよっと待て！お前も行くのか！」

「ああ。あの馬鹿どもが出ちまった以上、俺たちの作戦は潰されちまった。こうなりや全員力づくで連れ戻さなきゃならねえ。行けとは言わん。ただ俺は出る。」

そう言つと俺は

「いくぞ！ゲッタアアウイイイグッ！！」

ゲートの中へと突っ込んでいった。

チェンジ11 始動！嵐の海！！（後書き）

ということで行ってきます。盛り上げといてすみません。帰って  
きたら感想の返信をしますので、よろしくお願いします。



チェンジ12 OVER THE STORM(前書き)

帰ってきて投稿します。短いけどごめんね。ゆるしてー

## チェンジ12 OVER THE STORM

一気にゲートを突破した俺、流竜馬。だがその眼の前に飛び込んできたのは

「な?! た、竜巻だっ!!?」

## チェンジ12 OVER THE STORM

ゲートを出るや否や、目の前に巨大な竜巻が迫る光景を目の当たりにした竜馬。考えるよりも先にとっさに行動が出た。

「くそっ! ゲッタアアアア・ビイイイイムッ!!」

ゲッタービームは目の前の竜巻を貫くと、消滅させた。突然の危機を回避安心すると、この状況のすさまじさが改めて分かった。

「うおっ!?! す、すげえ風だぜ...」

『体の安定もままならねえな。こいつは驚いたぜ。』

激しい雨と風が、まるで殴りつけられるかの如く体を打つ。あたりを見渡すと、遠くに4人ほどの人影を見つけた。何かをしているように見える...すると一瞬桃色と金色の光が煌めいた気がした。この直後、俺の後ろのゲートが開いてクロノが出てきた。

「うっ! どうだ? 彼女たちは捕捉できたか?」

「ああ。ほら、あっちにいるぜ。」

俺が指差したその時

バシャアアアアアアア！！！

「「ぶべらっ！?!?!?」「」

…今起きたことを説明しよう。さっきの竜巻…俺がゲッタービームで吹っ飛ばした奴だが、あれは竜巻自体をふっ飛ばしたわけで別に封印まではしていなかった。それを何とち狂ったのか、あのアマ二人は俺たちに向かって砲撃、その衝撃でできた波をもるにかぶったって寸法だ。

「あのアマ…ぶっ殺す!!！」

『おい、リヨウ。相手だつてわざとやったわけじゃねえんだ。それにあの様子じゃ100%気付いてねえぞ。』

「ちっ…おい、坊主!とつとと行くぞ!」

「ああ…つて、何勝手に仕切ってるんだ!？」

そんなこんなでクロノを連れて来てみると、だんだんと人影がはつきりしてきて話声も聞こえるようになった。突如、蒼い光が一筋海から空に向かって走ると、ゆっくりと雷雲が消え、太陽の光が差し込んできた。それはまるでスポットライトのごとく、二人の少女を照らしていた。

「友達に…なりたいたんだ。」

その光景はあまりに綺麗だった。俺みたいな汚れきった大人とは違う、一人の少女の純粋な思い。傍から見ればこんなセリフ片腹痛くて聞いてられねえが、なぜかその時だけは、俺はとても笑う気にはならなかった。見とれる…と表現するのだろうか？いずれにしても俺はこの光景に目を奪われてた。次に起こることも知らず。

『みんなっ！敵の攻撃が来るから逃げて！！』

アホ毛の声が聞こえた正にその時

ピカッ！！

一瞬空が光ったと思うと、正に紫電一閃といったところか。紫の稲妻が空を、そして海を断ち切る。頭上が一瞬光るのを感じるよりも早く、全速でバックして稲妻をかわす。遠くで何か海に落ちていくが今はそれどころではない。遙か遠くからの無差別攻撃に、俺たちはただタコ踊りをするしか仕様が無かった。

「ちっ！このくそったれ！！」

遠くで何か海に向かって落ちた気がしたが、そんなことを気にしている余裕はない。ゲッターは異常な攻撃力の半面、防御力は低い。つまり直撃した時のダメージは、他の魔導士たちよりも大きくなる。…まあ俺の体と女の子の体じゃ勝手が違いすぎるが。

『ど、どうやら収まったようだな…』

さすがに攻撃し続けることはできないのか、10秒前後で雷はや

んだ。相変わらずクロノは急にいなくなってるし、次の攻撃が来ないか俺は警戒していた。しばらくすると光の柱ジュエルシードに向かってアルフが突っ込んでいく姿が。しかしその手がジェルシードに触れる瞬間、全身黒いのに影は薄いクロノが待ってましたとばかりにそれを防いだ。しかしこの小説ユーノの扱い悪いなあ…ま、いつか。

「邪魔、するなあああああ！！」

突き飛ばされるクロノ！ところがどっこいタダじゃ起きないのがこの男。主要キャラで誰よりも早く（つてか唯一）エイミイとゴールインしちゃってアーン？なことを夜な夜ないそしむ、ぶっちゃけ出番ないけど人生勝ち組な第34代最終鬼畜執務官：それが我らがクロノ・ハラオウンなのだっ！！そしてばっちりジェルシードをその手にっ！ここまではいいのだが、問題は奴が俺に向かって飛んできていることだ。

思考開始…

「さっ」

当然避けましたぜ。止めてやる義理もないし奴とて俺なんかに受け止められたくもないだろう。そうこうしているうちに奴は海にどっぽんし、アルフはフェイトを抱えてどっかに行っちまいやがった。

『みんな、戻ってきて。…で、なのはさん、ユーノ君のふたりは私から直々のお叱りタイムです。…それと『リヨウ』さん？』

「んあ？」

『…クロノを回収してもらえるかしら？実は彼…』

「フツ…それ以上は奴のためにも言わんでやってくれ。俺も昔はそうだったんだ。あの辛さは今でも忘れねえさ。」

『そう…ありがとう。』

こうして俺は、奴を回収しに降りて行った。

おまけ

「くぁ wse d r f t g y ふじこーp」

簡単に言うとかクロノが溺れてた。こりやマジな顔だ。もしこれが溺れていなかったのであれば、俺は蹴り飛ばしたりして虐めただろう。だが、溺れてるとなれば話は別だ。

「ゼーはー…何故助けた…？」

おんぶったまま飛んでると、いきなりクロノが話しかけてきた。この時間、約2分。早いやら遅いやら。

「フツ…俺にもわかるからさ。お前の気持ちか…」

「えっ…?!」

俺はこいつに話した。

「俺はな、中三…つまり15になるまで泳げなかったんだ。その

せいでダチによくからかわれたもんだった…」

「そ…そうだったのか…」

「だがな、俺はその年の夏、決死の覚悟で練習したんだ。…あきらめんじゃねえ。海に行つて綺麗な姉ちゃんの水着拝めねえなんて…辛えだろ？」

「…ありがとう。お前、いいやつだな…」

「フツ…今更気付いたか？クソボウズめ。」

そのあと、帰ってきてそうそう意気投合してた二人に皆が驚いたそうなの…こうしてクロノと竜馬には奇妙な友情が生まれたのであった…おわり。

チェンジ12 OVER THE STORM (後書き)

ちょっとしたサプライズをやるために、小説の進行速度が大幅に遅れます。何をやるかって？それ教えたらサプライズじゃな…あ、別に興味ない？



チェンジ13 狂い始めた真実(前書き)

合宿が近いのでどんどん投稿します。

### チエンジ13 狂い始めた真実

現在お叱りタイム中。やることない。

『熱くなれ！夢見る明日を！ 必ずいつか捕まえる！』

脳内でゲッターの歴代主題歌4つぐらい歌い終わっても終わらねえ。大あくびをしても声出さなければいけないことはない。便利だ。これ前世で校長の話の最中とかよくしてたんだよね。プレシアの経緯を話し始めたが、そんなのどうでもいい。どうせフェイトの母親云々で話だ。適当に聞き流していると、ふと思いついたことがあった。

(あ…そういえばゲッターってカートリッジ使えるのか?)

### チエンジ13 狂い始めた真実

ちょっと思ってたけど駄目だった。武蔵曰く『そもそもゲッター自体がデバイスなのかどうかすら怪しいんだから…』だそうだ。まあ要らないけどな。そんなの使うんだったら、それこそ真ドラゴンレベルの敵が出てきた時ぐらいだ。ま、永遠に来ないだろうがな。ずっと先になるけどナンバーズとかいう宝くじみたいなタイツ軍団も、そんなに強そうには思えない。だって三対一で負傷したティアナに負けてるし。おっぱいでかいのは認めるけど。んな事しないで普通にアイドルグループで売り出したら結構いい線いってたと思うの俺だけか？研究費はともかく生活費は楽に稼げるぞ。捕獲したギン姉が見た中で一番強そうって、そりゃないぜスカ公！…と思っしてしま。う。お前らもそう思わないか？ドリルいいよね。ういーん。

「だりい…」

なんかクロノが睨みつけてきた。思わず声に出しちまったからしやーないだろ…って、何お前も「そーなのかーそーだよねー」って顔してんだ！？妙に馴れ馴れしくなったな、こいつ…ひよっとして話し相手がいないのか？

やっと終わった。俺は昔っから人と話をするのが嫌いだ。電話は5分過ぎれば切る。誰が何と言おうが切る！…といつても5分も話すの死んだばあちゃんくらいだったから、切ったりしてないが。

「今日の残りはサボタージュっ…」

やることないからうるうるした。あんまり暇だったから資料室入っ…っていいって聞いたら

「イイヨ！！」

と砂糖がフランチエンみたく言ったから入った。おいおい、俺は後々敵になる男だぜ？こちらの連中はお人よしとか馬鹿とか…そのくせやるのがいちいち強引ときたもんだ。話にならねえ。

「えーっ…お、プロジェクトFの資料あんじゃない。」

きよろきよろ。監視カメラの死角に入った。誰もいない。

「フツ…それじゃ、御拝見っ…」

俺はプロジェクトFの経緯を目で追った。たどって行くと、プレ

シア・テストアロツサの欄に当たった。それを読んだ時、俺は自分の眼を疑った。

「な…！？う、ウソだろ…？そんなことあるわけ…じゃ、じゃあ、あの攻撃は…！！」

「そうね。絶対あり得ないことだわ。そこに書かれていることが真実ならば。」

「…！！？」

突然声がしたから、自然と体がびくつと震えてしまった。その先には、リンデイの奴がいた。

「…私とエイミィ、そしてクロノは事態を把握させたわ。クロノはほんのさつき。貴方と同じ反応を取っていたわ。結構思考回路が似てるんじゃない？」

「へっ、あんなカタブツと一緒にされてたまるかよ。…んで、お前はどうか考えてるんだ？この件について。」

「…現在調査中と言ったところね。なにせ私も驚いたから。あ、この事は…」

「ガキ連中には黙っとけ…だろ？」

そう言つと、リンデイは頷いた。

「分からなさすぎるわ。情報が足りなさすぎると言っただ方が正しいかしら。私の様な立場になると、何をするにしても明確な根拠が必

要になってくるわ。艦長ですもの。私一人の命を乗せた船ではないわ。そういう立場なのよ。」

「フツ…てめえも苦勞してんだな。」

「その分給料は高いけどね。」

「何だお前。ずいぶん現金な奴だな。」

「貴方ほどではないわ。」

こうくだらない話をしているが…リンディの顔には焦りが見える。そう、おかしいのだ。ありえないのだ。あ…っ…ては…な…ら…な…い…の…だ…

プレシア・テストロッサが、すでに死亡していたなど…

それも、26年前

娘のアリシア・テスタロッサと使い魔のリニスと共に…

なのはSide

今わたしはユーノ君とジュースを飲んでいきます。わたしの飲んでいるのは『みつくみくのネギジュース』。正直後悔しました。最後まで飲めるか心配です。だって…パッケージの女の子の絵、かわいかったんだもん…ユーノ君は『搾乳みるく いちご味』を飲んでるけど、パッケージがとってもHです。女の子が縛られてらぴゅーって…でも、ちょっと飲ませてもらったら普通においしかったです。ネギより遙かにおいしかったです。てゆうかネギ、ユーノ君飲んでくれないかな…辛いです。

「ねえ、ユーノ君。フェイトちゃんのこと…どう思う？」

「どう思う…か。け、結構アウトだね、なのは。僕に聞く前に、君はどう思っているの？」

わたしは思ったことを言いました。

「わたしは…友達になりたいんだ。でも、フェイトちゃんを戦いに駆り立てているものがある。その元をなくさない限り、フェイトちゃんとわたしは戦い続けることになるって思うんだ。」

「そうだね。プレシア・テストロツサにあって話をしない限り、それは解決しないね。でも、元をなくせなかったとしても、思いを伝えることはできる。」

ユーノ君は時折Hです。でも…こうして真剣に相談に乗ってくれるし、なんだかんだ言っただけでわたくしのことすぐ気を遣ってくれるし、元気になるアドバイスをくれるし、わたしはユーノ君のことを信じてます。

「昔、ある哲学者がこう言った。人は物事をやって後悔するのとやらないで後悔するのでは、やらない方が後悔するってな。」

突然後ろから声がしました。振り向くと…

「なに、ガキならガキらしく突っ走ってりやいいじゃねえか。…後悔してからじゃ遅いぜ。手前の魔法は何のためにあるんだ？手前はその力で何がしてえんだ？」

リヨウさんはそう言うけど…わたしはまだ答えを出せませんでした。

「フツ…まあその年じゃまだ早えか。そう焦んなくなっただけいいさ。それは手前が戦いの中で気付き、拾っていくもんさ。」

だからわたしは聞きました。

「あ、あのっ！」

「んあ？」

「じゃ、じゃあ、リヨウさんは自分の魔法は何のためにあると思うんですか!?!」

すると彼はこう答えました。

「…クソどもをぶっ飛ばすために俺はこの力を使う。ま、俺はそんな感じだがな。あばよ。後は手前で見つけな。」

そう言うと彼は去って行きました。

「…ユーノ君。あの人…励ましてくれたのかな?」

「ま、まさか!だってあんな残虐な戦い方をする人だよ!?そんなわけ…」

「そうかなあ…」

わたしはわかりません。自分のことも、フェイトちゃんのことも、リヨウさんのことも。でも、この事件が終わった時、わたしは何か掴めるかもしれません。きっとリヨウさんはそのヒントをくれたんだと思います。わたし、高町なのははもっとかんばろうと思います。



### チェンジ13 狂い始めた真実（後書き）

旅行先で捕まえたゲンゴロウの幼虫がさなぎになりそうです。今日の午後はその準備になりそうだ。絶対成虫にするぞーっと、意気込む私。

チェンジ14 過去との決別（前書き）

読んでみる。読めばわかるぞ。

## チェンジ14 過去との決別

朝6時過ぎ。葉巻すってる豚の絵がトレードマークの「MOSS」を買つと、一口飲んでベンチに座つた。俺はブラック派だ。

「ふあああああああ！…寝みいし体の節々が痛えし、つたく、あのババアのせいで！…」

コンクリの壁を殴つたらちよつと抉れたので、俺はそそくさと退散した。

## チェンジ14 過去との決別

「おい、砂糖B作。生きてるか？」

「な、何そのニツクネーム！？」

砂糖女リンディのとこに行くと、モニターには奴が映っていた。

「フツ…死刑執行とはこの事だな。」

「し、死にはしないよ！…」

エイミイがそういうも、傍から見ればそうにしか見えない。バンドに拘束されてもがくフェイト。その姿は屠殺寸前の家畜を彷彿させる。単純に上げつない光景だった。

『これが私の全力全開！スターライトオ…ブレイカー…！…！』

恐ろしいまでに収束された魔力は桃色の閃光となり、フェイトを消し飛ばした…

「なんつーバカ魔力!？」

「うわあ、フェイトちゃん生きてるかな？」

「おいおい、さつき死にはしねえって言ってたじゃねえか!?!…  
って、なんで高町とテストロッサが殺り合ってるんだ？」

…只今事情説明中…

俺は思ったことを率直に言った。

「んで、テストロッサが勝っちゃったらどうするつもりだったんだ？」

「あ、そりゃ総動員でフルボツ」「エイミー!」「…サーセン」

なるほど、恐ろしい連中だぜ。なのはが霞んで見えるほどだ。

「どっちに転んでも良かったというわけだな…それはさておき、  
プレシアの奴の居場所とやらは分かったのか？」

「いんや。向こうから動いてくれない限り何とも…」

「ケツ、使えねえ野郎だぜ。」

そんなこんなしていると海に落ちたフェイトとバルディッシュを回収しに来たなのは姿が、モニターに映し出されていた。

『Put off』

どことなく残念そうな声を出して、バルディッシュが今まで回収していたジュエルシードを開放する。意外と律儀な奴だ。俺だったらアルフあたりにバルディッシュ渡してトンスラしまうのに。その後なのはに言われて自力で飛ぶフェイト。自力で飛べるのか…アレ喰らった後に。

「まあ、ここで終わったらめでたしめでたしだが…おい、アホ毛。あのババアは絶対フェイトを攻撃する。いつでも割り出せるように準備しろ。」

「ちょ、き、気にしてるんだからね、それ！…って、きた！！」

「い、言ったそばからだな…」

案の定フェイトにはプレシアからの無慈悲な雷撃が襲い、バルディッシュは碎け、解放された9個のジュエルシードはプレシアの下へ転送された。

「ビンゴ！尻尾つかんだ！！」

「よし、よくやった。終わったらコーヒーの一杯でもおごってやる。」

「それはどうも。座標はもう割り出して送ってるよ！」

俺は腕を組みながら考えた。

「いくらあのババアが歳だからって、こんなことしたら余裕で居場所がばれるのは分かり切ってたはずだ。どうやら敵も焦ってるらしいな。」

「敵が焦った時こそ勝機よ。今ここで攻めなければ取り逃がすわ。武装局員、転送ポートより出動！任務はプレシア・テストロッサの身柄確保です！」

『『『『『はっ！！』』』』』』

リンディの指示の下、どこに隠れてたのか分からないほどの武装局員が、時の庭園へと転送されていった。

「転送完了…って、あれ？」

「どうした、エイミィ？」

急に首をかしげたエイミィにクロノは聞いた。

「し、知らない間に、リョウの姿が消えてるんだけど…」

「えっ!?!」

思わず親子二人あたりを見渡すが…いない。

「ま、まさか、たかが数秒で転送ポートまで行けるわけないよね

…」

そうエイミイが言った後、席の横になにか置いてあるのに気がついた。小さな機械だった。再生のボタンが押してある…急いで停止してすぐに巻き戻して再生すると

『…こんなことしたら余裕で居場所がばれるのは分かり切ってたはずだ。どうやら敵も…』

「しまった！謀られた！！」

そう、竜馬がいたのは最初だけ。気付かれないように前日録音しておいたカセットテープを横に置いて、こっそり転送ポートに先回りしていたのだ。

(何ですって！？じゃあ、彼はこうなることはすでに予想していたってこと…！！？)

リンディは信じられないような表情を浮かべるが、首をぶんぶん振って正気に戻した。

「艦長。高町なのはが帰還しました。」

同員の声があると同時に、自動ドアが開いた。高町なのはの隣には金髪の少女、そして彼女の守護獣が立っていた。

「お疲れ様。そして、はじめまして、フェイトさん。」

リンディがそう言うのと同時に、クロノが前に出る。そのままフェイトにSU2を突き付けた。

「な！あんた、フェイトに何する気だい！！」

「うるさい！静かにしろ！！」

パキン…

「え…?!」

フェイトの拘束具が光とともに外れる。フェイトとアルフは目を丸くした。

「艦長。彼女はすでに保護対象同然とみなしていいはずですよ。これはもう要りませんよ。そつだろつ？高町なのは。」

「クロノ君…！！ホントは優しいんだね！！」

嬉しそうなのはと目が合つと、少し顔を赤くして、そつぽを向いて言った。

「ま、リ、リヨウのような男が艦内を自由にうるつけるんだ。どう見ても彼女には抵抗する意思がないだろつ？それに…」

明らかに照れてる様子のクロノ。後ろから見ても耳が真っ赤になつていた。そんなクロノに苦笑しつつ、リンディはなのはに念話を送った。

『母親が逮捕される瞬間を見せるのは忍びないわね。なのはさん。彼女をどこか別の部屋に。』



『あ、はい。』

なのはがフェイトを連れて行こうとしたその時

『総員玉座の間に侵入！目標を発見！！』

武装局員がプレシアを囲む。そして別行動をしていた隊があるものを発見した。それはカプセルに浮かぶフェイトと瓜二つの少女。

「え！！？」

「！！？！！？」

声を上げるなのは。目を見開くフェイト。

『私のアリシアに近寄らないで！！』

プレシアが叫んだその時だった。

『なっ！あ、あれは！！？』

「どうしたの！？」

その声が聞こえた瞬間、艦の中にいたすべての人間の時間が止まった。

『ま、魔力反応…無数！敵機動兵器は…フェイト・テストロッサです！！』

「な…何ですって!!?」

モニターには、プレシアを守るように浮かぶ、無数のフェイト・テストロッサが映っていた。

## チェンジ14 過去との決別（後書き）

別にフェイトちゃんたちが合体して真フェイトちゃんになったり  
しないから安心してね ∴でも見てみたいかも。

祝PV80000突破企画 ゲッターなのは 第三話(前書き)

凄まじいスピードで、容赦なく原作キャラが死にまわります。では。

祝PV80000突破企画 ゲッターなのは 第三話

祝PV80000記念小説なの

ゲッターなのは 第三話

注・べつにさくしゃがびょうきなのではありません。げったーだからわるいのです。ホントデスヨ？

私立聖祥大付属小学校

海鳴市に、一つの小学校がある。並大抵の頭脳の生徒では絶対に入れない、エリート中のエリート学校。そこがここ、聖祥大付属である。

しかし、ここには一つ、学校とは完全に切り離された校舎がある。その中の一室から、物語は始まる。そう、その時も雨だった…

『打倒！！独裁者！！』

真っ赤なペンキで書かれた木の板。割れて散乱した窓ガラス。その奥から声が聞こえる。小学生が何人が集まって、そこで会議をしていた。

「いい、これが大臣の車。研究所の手前には、小さな橋がある。」

少女がミニカーを走らせる。本来ならよくある光景だが、それは非常に異様だった。

「あらかじめ橋を車二台分の重みには耐えられないようにしてある。まず、護衛の車が来るわ。次に大臣の車。橋は支えきれず、落ちる。」

橋のミニチュアを折る少女。皆が目を皿にしてそれを見る。

「そしたらこちら側から叩く。そして出てきたところを…丘の上からズドン。」

静まり返る室内。ごくりと音がする生唾。するとキイキイと、耳障りな車いすの音が聞こえてきた。

「…月村よ。大臣がハラオウン研究所に来るのはほんまやろな？」

少々おびえた様子の月村は、車椅子の少女に言った。

「そのことは秘密だが本当ですよ。父さんが言ってましたから。偉い人が集まって毎晩話してます。」

騒がしくなる教室内。しかし、緑のゆったりとした服に身を包んだ少女と、赤いゴスロリの少女が、二人、静かに出て行くこととする。しかし、車椅子の少女は見逃さなかった。

ガシャーーーーー！！

「おやん…！」

「ぎゃあああー!」

一瞬で移動し、二人の少女にアイアンクローする車椅子。二人の顔は、血で真っ赤になっていた。

「シヤマルウ…ヴィータア…何のつもりや…?」

震えた声で緑の服の少女が言った。

「ゆ、ゆるして、はやてちゃん…わたし、人殺しなんてできない…」

しかしはやては自分よりも大きい相手をつるしあげながら言った。

「おのれら、遊びで我々のグループに入ったん? 革命をゲームだと思ってたん?」

「ま、待つてよ、はやてちゃん。その子たち昨日入ったばかりで…」

月村が必死にフォローするが

「わあっ! ゆるしてっ! 私たちは実は革命という言葉がカッコよかったから付いてきたんです! お願ひ…こんな事するなんて…聞いてないよお…」

涙を流し哀願するシヤマルだったが

「ゆるせやと?? フン。」

はやては鼻で笑った。

「うち等の掟を破り、秘密まで聞いて、挙句の果てに『カッコよ  
かったから付いてきた』やと…!!」

その瞬間、はやての形相が一変した!!

「ゆるせるわけないやろ。やあつ!!」

ベリッ

「ぎゃああ!!?」

はやての爪がシャマルの顔面に刺さる。そしてそのまま顔の皮を  
はがした!!血にまみれ、肉をさらすシャマル。

「ひいいい!!?」

ヴィータははやてから逃れると、近くにあった金づちを手にと  
った。

「うわああ!来るな、来るなあつ!!」

渾身の力でそれを振るうが、それははやてに利き腕でない左腕  
一本で掴まれた。めりめりと音を立て、握りつぶされる木の柄。

「あ…ああ…」

恐怖のあまり、身動きのとれなくなったヴィータ。それを見ると



はやては一瞬嬉々とした表情を浮かべた。が

「目や。」

はやての指がヴィータの大きな両目を潰す。一瞬でただの穴になった両目。ヴィータは絶叫を上げ、うずくまった。

「耳や。」

次はヴィータの両耳が吹っ飛ぶ。

「鼻!!--」

バギヤーンと音を立て、鼻が千切れ飛んでいく。顔に手をやり、絶叫して転げまわる二人。はやては無表情で返り血のついた顔を、血の付いた指でぬぐった。

「やれ、シグナム。」

「はっ。」

日本刀を持った少女が、二人を生きたままめった切りにする。はやてはつまらなさそうに窓を眺めた。

「そうや。このはやての校しやをけがす奴は、一人として生かしておいてはだめなんや。ふふふ。裏切り者には、死、あるのみや。」

八神はやては、そう言うと口元に歪んだ笑みを浮かべた。

はやての校しゃ

『学生運動の盛んだったころ、各地で学生による過激な暴動がおこったわ。まあ、大概が学園側や下手したら警察によって押さえられてしまうものだが、このグループは素早い行動と強い団結力で、警察すらも切りきり舞いにさせてるのよ。』

リンディが一枚の写真を出した。

『彼女が八神はやて。この少女がすべてを指揮しているといわれているわ。IQ300の天才でマツトの彗星とよばれていたわ。将来を期待されていたけど、三年前に交通事故で両親を失う。その時から彼女は車椅子を使うようになったわ。ただし入院した記録はないけどね。』

リンディはニヤニヤしていった。

『しかし彼女は頭が切れるわ。小さな女の子ですもの。どんなに訓練した警官でも心を開いてしまうわ。そして近づいた瞬間…ドワオ。部下の自爆テロでたくさん犠牲者が出て、結局は学園側が折れたの。それがはやての校しゃのいわれよ。どお？なのはさん。高い知能。すばらしい運動神経。そして敵に対して容赦しない心。ゲッターを動かすにふさわしい人材だと思わない？ふふふ…』

なのははリンディに言われたことを思い出していた。そんなことをしているうちに、学校の門まで来た。そこには大きな青い毛並みの犬が鎖でつながれていた。ワンワン吠える犬。なのはが横を通る

うとすると吠えかかってくる。大きくジャンプして飛びつこうとしたその時

ビシッ

犬の首が空を舞った。

「ふん。長雨でザフィーラの気まで立ってるの。」

血を払うとなのはは学校へ入っていった。

学校に入ると、そこは授業中だった。外から窓をのぞくと学生が勉強している。なのはは声をかけた。

「おい、君たち。はやての校しゃってこっちなのか?」

無視する学生たち。

「えー、じゃあ、こっちな?」

するとどこの教室もカーテンを閉めてしまった。

「ふん。礼儀知らずな奴らなの。」

そう言って引き返そうとした時、離れの校しゃから、ミンチにな

った死体が運ばれて、捨てられた。それを捨てた金髪の少女をとっ捕まえた。

「察するにここがはやての校しゃか…おい、お前。ここがはやての校しゃなの？教えるなの。」

「はあ？あんた一体誰よ！」

少女になのはは言った。

「お前ははやての子分か。お前らに用はないの。私が見たいのははやてなの。」

「この…調子乗ってるんじゃないわよ！」

突っかかるうとする少女を

「どけってんだ！！！」

傘で殴り飛ばした。すると何人かの子分が集まってきた。

「アリサ！きさまっ！！！」

（ふふふ…何人か子分をやればはやては必ず出てくる。予定通りなの。）

しかしその時、なのはは殺気を感じた。振り向くとそこには、病的な顔の車椅子の少女がいた。その姿はまるで幽霊だった。

「あんたがはやてか。」

「誰だ貴様!!」

子分が言うことを無視してなのはは続けた。

「さすがリンディのババアが選んだだけあっていい目つきしてるの。あの怪物どもと殺り合うのにびったりなの。」

なのはは言った。

「私はある女に頼まれてあんたをむかえにきたの。おとなしく来てもらうの、はやてさんよ。」

「貴様!!」

さっきぶっ飛ばしたアリサとかいう女がまた突っかかってきた。が

「ぎゃあ!!」

さっとかわすとなのはは傘でアリサの右手を串刺しにした。部下をやられても顔色一つ変えないはやて。

「はやて、こんなガキどもといつまでも革命ごっこなんてつまらないの。お前にはもっととびつたりの戦場があるの。だまされたと思ってくるの。もっといっぱい殺せるから楽しいの。」

「ふん。」

鼻で笑うはやて。

「き、きさま！はやてさんに向かってなんてことを！！」

子分が襲いかかってくるが

「ザコどもはすっ込んでろなの！！」

びしつとアリサの手を引き裂くと、二人の子分もまとめて殴り飛ばす。アリサがはやてとぶつかった。はやては何食わぬ顔でアリサの髪の毛を掴む。怯えるアリサ。

「ああ…」

パーン！！

はやてが叩くと、アリサは後ろの積み上げられた机に突っ込み、二度と動かなくなった。そしてようやくはやてがしゃべった。

「誰に頼まれたかは知らんが、ずいぶんとこの校しやで暴れてくれたやな。私の校しやをさわがしたら、ただじゃ済まないで。」

なのはは構えて言った。

「やるか？口べたの私が口でどうこうできるなんてはじめから思っちゃんないの。こいつでお前の伸びた体を引きずってくの。」

なのはが言い終わったとき、一瞬だけはやてが奇声をあげた。次の瞬間

「キヤアア！！！」

「げっ!!」

奇声をあげて襲いかかるはやての一撃を、なのははさっとかわす。

「ホリヤー!!」

躲した時のバク転の動きを利用し、はやての腹にキックをたたき込むのは。はやてが車椅子ごと倒れるが、地面にぶつかる瞬間、車椅子からはやての姿が消えた。

(Bカップか…)

すつとなのはの横に現れるはやて。彼女は普通に歩けたのだ!?

「キエアア!!」

はやての爪がなのはの腹にかする。わずかに服が裂けた。

「キシヤアアアア!!」

倒れ込むなのはに飛びかかるはやて。しかし

「甘い!!」

両足でキックして弾き飛ばすなのは。しかしはやては空中で一回転すると華麗に着地した。その動きはまさに華麗だった。その薬物中毒者の様な顔と精神異常をのぞけば。

「並の人間とは動きが違うの。それにタフだ…私の蹴りをまとも  
に食らってるのに。こいつはできるの。」

「ヒエッ！キヒエッ！！」

はやてとなのはが動こうとしたその時

「はやてちゃん！！ああ。」

はやてがふりむくと、滅茶苦茶ちっちゃい、銀髪の女の子が、千切れた右手を手で押さえていた。

「はやてちゃん……」

「どうしたんや、リイン、その腕は。」

リインと呼ばれた少女は言った。

「食われちゃったです。明日の準備してたら……変な生き物が窓からきて、リインの腕を食っちゃったですう！！！」

それを聞くとはやては

グシヤッ！！

リインを握りつぶすと、階段へ叩きつけ、部屋に向かおうとした。

「待てはやて！行くんじゃないの！！奴らかも知れないの。絶対そうなの。」

「誰かそいつを抑えろや。」



自分に押さえつけられるのは。そのすきに階段を駆け上ってくはやて。

「どけ、ザコども!」

なのは自分を叩きのめすとはやてを追いかけて行った。

「シグナム!」

はやての目の前には、内臓をぶちまけ、獣に食い散らかされたような死に方をしたシグナムの死体があった。

カリカリ…

何かをかじるような音が聞こえる。その先には

「ひっ!」

千切れた月村すずかの首と、その腕をむさぼる翼の生えたフェレットがいた。その目がはやてを捉えた。

「げっ。」

するとはやての後ろからもう一匹がでてきた。

「ひっ。ひっ」

(ふふふ…はやてと怪物との戦いが見ものなの。)

なのはは傍観することにした。

「きゃあー!!」

はやてが背後の一匹を掴む。

「カーッ」

ぐしゃぐしゃと生きたまま引き裂くはやて。もう一匹が襲いかかる。

「ヒャアーツー!!」

引き裂いたフェレットを投げつけ、もう一匹をふっ飛ばすはやて。その手には血の滴るフェレットの半分の顔が握られていたが

「うっ。うっ。」

フェレットたちは何事もなかったかのように起き上がる。そして

「ギャアー!!」

一匹が襲いかかる！はやてはとっさに近くににあった鉄パイプで

「えい。」

口から喉まで貫通させる。だが、フェレットはニヤッと笑うと、そのまま襲いかかってきた！その爪がはやてに触れるその瞬間

ガシヤ

椅子がフェレットに投げつけられる。そこにはなのはがいた。

「やんやんや。さすがはやてさん。その怪物どもをはじめて相手にした割には、なかなかの戦いぶりなの。ゲッターロボの乗組員に決定なの。」

なのはが傘のスイッチを押すと、先からサーベルが出てきた。

「でも、そいつらは普通に戦っても駄目なの。すぐに体が再生しちゃうの。」

すると怪物たちが襲いかかった！！

「くさいものは、もたらたないだめなの！！」

サーベルがフェレットの首を撥ねる！

「はやての手下はあっさり殺せても、私たちはそうはいかないの。」

それを突き刺すと、フェレットの体に高圧の電流が流れる！一瞬で黒焦げの死体になるフェレット。もう一匹はかなわないと見るや、逃げだそうとしたが

「逃がすもんか！死にやがれなの。」

傘の布をはがすと、それをフェレットに向ける。発射されるもり。何本のもりに串刺しにされたフェレットは、窓辺から落ちて行った。

「さすがリンディのババアの作った武器だ。びっくりするほどの威力なの。」

楽しげなのは。

「はやて、さっきの元気はどうしたの？顔が引きつっちゃってるの。へへ。」

しかしはやてのスカートがじわりと濡れていた。

「へへ。無理もないの。いままで怖いものなしの革命グループの親玉だったんだからね。普通誰でも腰抜かすの。」

なのはフェレットの首を突き刺して言った。

「これからはリンディのババアが怪物についてレクチャーしてくれるの。ありがたく思えなの。」

ふと振り向くと、はやての手には鉄パイプが握られていた。

「てめー!!」

なのはに向かって鉄パイプを投げるはやて。しかしそれはのをかすめて後ろの机に当たった。そのからはもう一匹のフェレットが飛び出した!!

「しまった、取り逃がした!!」

窓を見るなのは。すると本校の校舎の上に、巨大なメカフェレットが現れた!!

「もう、間に合わん。いくよ、はやて。あんなのが襲ってきたらこの学校はおしまいだ。」

！！！  
なのはにダッシュでついてくるはやて。ふと足元が大きく揺れた

「きた！！逃げる！！」

授業中の学校を破壊するメカフェレット。何百人の生徒が潰され、食われ、生き埋めになる。そこは地獄絵図だった。それを遠くから監視する人間がいた。

「ふふ。ついに現れたわね。怪物どもめ、ゲッターロボが動き出すのを恐れているな。ふふふ。それでなのはさんとはやての命を狙ったんだ。そんなにあいつらの命がほしいか。」

リンディは不敵に笑った。

「いくぞ！二人を助けるのよ！！」

声を上げるとリンディは言った。

「なのはさん、はやて。待ってなさい。心強いプレゼントを持って行くわ。」

そしてリンディは号令をかけた！！

「イーグル号、ジャガー号、ベアー号、発進準備完了！！ゲッターロボ、スタンバイ！！」

そこには、三機のジェットマシンが、静かに発進の時を待っていた。

祝PV80000突破企画 ゲッターなのは 第三話（後書き）

ぶっちゃけはやての校しやがやりたいがためにこの企画立てたんだよね…しかしたった一話で皆殺しにされるヴォルケンリッター（しかも大半が味方陣）って…

チェンジ15 歪められた命(前書き)

ちょっと短めです。ぶっちやけつなぞです。



## チェンジ15 歪められた命

そこには、無数の『フェイト・テストロッサ』の姿があった。まったく同じ顔。まったく同じ髪の色。まったく同じのバリアジャケット。まったく同じのデバイス。少しの狂いもない『フェイト・テストロッサ』がそこにはいた。

チェンジ15 歪められた命

「か、構わん！制圧しろ！」

武装局員の退潮と思われる男の命令で、一斉に攻撃を開始する局員たち。しかし

「な、何て速さだ！こつちの攻撃が全然当たらない！？」

「焦るな！しっかり標準を合わせて、確実に落とすんだ！」

10歳前後の少女とは言え、一般の武装局員と比べたらオーバーキル過ぎた。武装局員とて、二手に分かれたからこの場にいるのは30人前後。しかし向こうは無数…明らかに100人は超えているうえ、Aランク以上の魔力資質とオリジナルと全く同じの技を使用できる。状況は絶望的。誰が考えても勝ち目はなかった。

「くっ…だ、だめだ！まるで勝負にならない！！」

一人の武装局員が後退する。すると、背後から何かが起き上がった

た！！

「……………」

「うわあああああああああ！？」

無言で武装局員を一撃で倒す女。頭の耳。赤とオレンジの中間の  
ような髪。

「うそ…アルフさんまで…！！」

呆然とするなのは。フェイトだけではなく、無数のアルフまで現  
れたのだ！！

「……………」

無言でハーケンセイバーを繰り出すフェイト。なのはがフェイト  
と戦った際、何とかして避けることができた。実際基本的にフェイ  
トの遠距離攻撃は比較的回避しやすい。しかし、それは彼女が一人  
だったらの話。10人が同時に放ったとしたら…！！

「ぐあっ…！」

「うおっ！？」

短い悲鳴を上げて武装局員が地に伏す。その数はたった三分で三  
分の一以下に減ってしまった。

「ぬうっ！こんな小娘ごときに…！」

『圧倒的な性能差。圧倒的な物量。戦いは数と言っけれど、一対一でもこれに勝てるかどうかも怪しい武装局員。馬鹿らしいわ。』

プレシアは命令を下した。

『これで終わりよ。量産型フェイトよ。薙ぎ払いなさい!!』

その言葉の直後、白兵戦をしかけていたフェイト達が一斉に飛び上がる。天井に向かって構える量産型バルディッシュ。その周囲には稲妻をまとった光弾が無数に浮かんだ。

『フォトンランサー・ファランクスシフト…撃て!!』

閃光。轟音。それと同時に映像が切れる。あの局員がどうなったか…目に見えていた。

『いけない!?!局員の送還を!!』

『了解!!』

撤退する武装局員たち。それを見届けると、プレシアがカプセルにすぎりついて言う。その周囲には無数のフェイトが浮かんでいた。

『もうだめね。時間がないわ。たった9個のジュエルシードでアルハザードにたどり着けるかどうか分からないけど。でも、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間を、この子の身代りの人形を娘扱いするのも。』

なのはとフェイトは息をのんだ。

『聞いていて？あなたのことよ、フェイト。折角アリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。何にも使えないお人形。あなた一人作るためにこんなに作ったのに…無駄だったわね。』

リンデイは言った。

「じゃあ、これは…」

『そうよ。これはあなたのところにいる人形のプロトタイプ。もういらぬから脳に機械を埋め込んで殺人兵器にしたの。ごみはリサイクルしないとね。』

プレシアは言った。

『最初は胎児の形にもならなかったわ。100匹を超えると胎児にはなつたけどすぐに死んだわ。500匹を超えたあたりで赤ちゃんになるまで成功したけど、二、三日で痙攣を起こして死んだわ。1万匹を超えたころになると5歳児くらいにまで成長したけど、皆発狂したり病気で死んだわ。5万匹を超えると、魔法が一回だけ使えるようになったわ。その直後死ぬけどね。10万匹あたりで、なぜかリンカ コアの相性が悪くすぐに死に始めたわ。100万匹を超えたくらいになると…』

「や…やめて…」

エイミイは知ってしまった真実を言った。

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テストアツサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた実験は使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命体の作成。そして死者蘇生の技術

を。『フェイト』って名前はその研究の開発コードなの。」

そして再びプレシアは発言を始めた。

『よく調べたわね。そうよ。その通り。でも、駄目ね。ちつとも上手くいかなかった。フェイト。やっぱりあなたはアリシアのミスクリエーションよ。折角あげたアリシアの記憶もあなたでは無駄だった。』

「や…やめてよ…!!」

なのはの悲痛な声も彼女の耳には届かなかった。

『アリシアがよみがえらせる間に私が慰みに使ったためのお人形。何千万人と試作品を創って生み出した亡霊…でも、もういらないわ。今日限りであなたの存在価値は消えたの。どこえなりと消えなさい！二度と顔を見せないで！その顔を見ると吐き気がしてくるわ!!』

「お願い！もうやめて!!」

『ふははははははははは!!』

高笑いするプレシア。彼女は涙目のフェイトを見ると、歪んだ笑顔で止めを刺した。彼女の髪に隠れた右目が、一瞬だけ紅く光った。

『いいこと教えてあげるわ。フェイト。あなたを創りだしてから私はあなたが…大嫌いだったのよ!!』

フェイトはとうとう耐えきれなくなり、手に持っていた待機中のバルディッシュを落とし、精神的なショックで倒れてしまった。支

えるなのは。その目は本当に人形の様な目になっていた。

「局員の回収が完了しました！」

ようやく回収作業が終わったエイミイが何かに気付いた。

「大変大変！ちょっと見てください、屋敷内に魔力反応多数！？」

「な、何が起こっているんだ！！！」

クロノが驚きの声を上げる。そこから現れたのは、無数の傀儡兵だった。

「総数3000…5000…まだ増えていきます！！！」

「プレシア・テストロッサ…一体何のつもり！？」

その問いに答えるようにプレシアはカプセルを浮かせ言う。

『私たちの旅を邪魔されたくないのよ。』

そして再び玉座の間へと行く。

『私たちは旅立つの。』

すると9個のジュエルシードが空に浮かんだ。

『忘れられた都…アルハザードへ！！…この力で飛び立って取り戻すのよ…すべてをつ…！！』

しかしその時！！

## チェンジ15 歪められた命（後書き）

尺の都合でここで切りました。普通切るか!?!?!とありますよね  
…サーセン。次回はこの前予告した気のあるサプライズ(?)もや  
ります。今まで書いてて一番熱くなった回ですね。そこそこ面白い  
かと思えます。では、次回お楽しみに。



## チェンジ16 出撃(前書き)

体調がいいのでどんどん投稿。だから9月になって更新ペース落ちても怒らないで

## チェンジ16 出撃

アースラ内はパニックに陥っていた。

「な、なんでフェイトちゃんが!? しかも、あんなにいっぱい…」

「それが分かっただら苦労しないさ!…!ど、どうすればいい!…」

なのはの問いかけにクロノが答えたその時だった。

## チェンジ16 出撃

『私たちは旅立つの。』

復旧した別モニターに映るプレシア。その頭上に9個のジュエルシールドが浮かぶ。

『忘れられた都…アルハザードへ!…!この力で飛び立って取り戻すのよ…!すべてをつ!…!』

その時だったっ!…!

「うるせえ!…!」

突然響く、男の罵声！！

「それはあ！手前のやるこつだああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

突然天井が破壊され、土煙と瓦礫とともに、黒い何かが無数のフエイト・テスタロッサの前に躍り出る。そう、それこそ、我が流竜馬の駆る、ブラックゲッターの雄姿だったっ！！

「テスタロッサのババア！！どうやって生き返ったかは知らねえが…今度こそ、引導を渡してやるぜえええっ！！！」

背中に手を回すゲッター。そこから取り出された二丁の銃。ゲッターマシンガンが火を噴いた！！

「うおるああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

目の前にいた一人のフエイトが、眼球と脳みそを吹き飛ばしながら、顔面をつぶされる。血液と肉片をぶちまけ、無残な死体へと変わっていくフエイト達。次々に倒れ、死体の山が形成されていく。

「うお おお おお おお おお あああ！！！！」

『やめなさい！！！！』



とびかかるフェイト達を逆に利用し、その下を一気に駆け抜けるゲッター。ゲッターの後方で団子のように固まってるが、目もくれず全速で突進する。

二列になって、突進してくるフェイト達。量産型バルディッシュはサイスマードに変形している。しかし竜馬はひるむことなく、真正面から打破する！！

「ゲッターアアアアトマホオオオオクッ！！」

ゲッタートマホークをゲッターレザーのついてない右手に持つと、両腕を振り上げ突破する。すれ違いざまに斬撃を受けるフェイト達。腕が、首が、胴体が、竜馬の後に跳ね上がる。倒れ、踏まれ、潰れる少女。しかし竜馬は少しもためらうことなく前進を続ける！！

走り抜けた先には、横一列に並んだフェイトが。先頭の一人がバルディッシュを振りかざしてくる！が！！

「ゲッターアアアアビイイイイイムッ！！」

体をゲッターウイングで包んだゲッターから発射されるゲッタービーム。乱射されたそれは後ろに一列になっていたフェイトを一扫する。ビームを潜り抜ける、先頭のフェイト。だが、ゲッタートマホークでバルディッシュごと両断される！！返り血の浴びたブラックゲッターの顔。そこには浮かぶはずのない竜馬の笑みが重なって見えた。

『ぬうつ！？さすがに大口叩くだけはあるわね。伊達じゃない。』

プレシアがレバーを倒すと、竜馬の足もとが大きく揺れる！土煙とともに持ち上げられる床。そこにいたのは

「アルフだと！？くっ！しまった！？」

何と地中から無数のアルフが現れた！？竜馬の体に抱きつき、拘束する三人のアルフ。プレシアがにやりと笑う。

「ぬうああああああ！！」

『フン。止めだ！！』

無数のフェイトが空に浮かび、さらに無数の光弾を浮かび上げさせる。それはあまりにも非常識だった。

『逃すか！フォトンランサー・ファランクスシフト、一斉射撃！』

『！』

千は優に超える光弾が、竜馬に襲いかかる！だが！！

「甘え！！トマホークスラッシュ・タイフウウウウン！！」

ゲッタートマホークを両手に構えた竜馬は、その場で高速回転する！！血を噴いて絶命するアルフ達。浮き上がった一瞬のすきをつけて急上昇する竜馬。一瞬遅れてフォトンランサーの直撃を受けて四散するアルフ。

『何！？まさか！！』

「なめるなあああああああああああああああああ！！」

！」

ゲッタートマホークを投げ捨てる、両手にゲッターマシンガンを持ち、乱射をしながら飛ぶ！マシンガンの弾丸で撃ち落とされる光弾。撃ちもらした分は竜馬が物理法則を全く無視した動きで回避する。驚くべきことに、竜馬は正面から無数の攻撃をされても、一歩たりとも後退していなかったのだ！避けながらも確実にプレシアとの距離を詰める竜馬。

フェイトの一斉攻撃を避けるため、急上昇する竜馬。その眼下にプレシア・テストロツサの姿を捉えた。

『なっ！？馬鹿な！！』

「もらったああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

竜馬は渾身の力を込めてゲッタートマホークを振り下ろした！！が！？

『ぬん…！？』

ゲッタートマホークがプレシアの魔法障壁と激突し、ものすごい火花を散らす。

「！？ど、どけ、ババア！！ジュエルシードもそのカプセルも消し飛ばしてやる！！」

しかしプレシアは言った。

「ふふふ…何も分からぬ愚か者めが！いい、良く聞きなさい。これは私が20年以上の月日をかけて夢にまで見たもの。背負わねばならぬ宿命そのもの。それにここで、そのパワーで9個のジュエルシードを破壊してみなさい！そうなれば、世界は最後の時を迎えることになるわ！！」

「うるせえ！俺はな、世界やそのカプセルがどうなるうと知ったこっちゃねえんだ！だが、お前の勝手で俺とはやてをバラバラにしたあんたを殺せれば…！！」

その時だった。

『やめて…痛い…苦しい…助けて、お兄ちゃん…！！』

竜馬の頭の中に少女の音が響いた。

「な…なんだと…！？」

その瞬間、辺りは光に包まれた。



## チェンジ16 出撃(後書き)

ネタ絵はやばそうだったら消しますが、いいんじゃない?と思っ  
てくださる方がもしいたとするならば、鼻で笑ってやってください。  
あとネタ絵はパソコン推奨です。次回はなのは勢です。

祝PV100000突破企画 ゲッターなのは 第四話（前書き）

よくまあ、こんなハナクソ小説がここまでいったものだ。

## 祝PV100000突破企画 ゲッターなのは 第四話

祝PV100000突破企画 ゲッターなのは 第四話

小学校の校舎を破壊するメカフェレット。そこは地獄絵図だった。

「ぐっ！...」

「はやて！しっかりしろなの！！」

飛んできた瓦礫が頭に当たり、血を流すはやて。なのはは彼女を背負う。

「だめなの！とても手に負える相手じゃないの。」

「う...くっ...」

確かに無理だ。いくらなのはとはやてが人間とは思えない戦闘能力があるとはいえ、40メートルを優に超すメカフェレットに勝てるわけがない。このままだと死を待つばかりだ。

「くそっ、ババアは何もたついているの！このままじゃ私たちまで化け物の餌食なの。」

なのはたちが絶体絶命のさなか、3台の大型トレーラーが路上を走っていた。道路に停車すると、コンテナの中から3機のジェットマシンが現れた。その中の黄色のマシンからリンディの声が響いた。

『コックピット最終調整完了！こっちはいつでもOKよ。』

「ベアー号発進準備完了！」

「風速13メートル。行けます!!」

「ゲッターエネルギー、チャージ完了!艦長、いつでもいけます!!」

局員の声が響く。

「第一ロケット、点火！」

「いくわよ!ベアー号、発進!!」

轟音とともに、ベアー号と呼ばれたマシンは飛び立っていった。

「ひいっ!!」

「こら、はやて!首しめんじゃねえ!!」

はやてを背負って逃亡するのはだったが

「うっ!!」

目の前には巨大なフェレットの顔が現れた。

「くそっ!しまった!!」

二首のメカフェレットに、挟み撃ちされてしまったのだ。

「ギヤアアアアアアアアアア！」

「南無三！ここまでかつ！！！」

なのはがそう言ったその時！！

『なのはさん！死にたくないなら伏せなさい！！』

突然聞こえた女の声に、なのははすぐしゃがんだ！！前方から飛んでくるミサイル。メカフェレットの顔面に命中した！！

「ベアー号だ！リンディのババア！私たちに当たったらどうするんだ！！」

『黙れ！グダグダ言う暇あるなら、とっとと乗りやがれ！！なのはさん。イーグル号とジャガー号を用意したわ。死にたくないなら乗れ。以上。』

リンディがそう言うと、後ろからトレーラーが走ってきた。

「いくぞ、はやて！お前を今からジャガー号に乗せるの。四の五の言わず、乗れなの。」

「私をどうする気や？」

「うるせえ、黙って言われたとおりにしろ！！」

するとなのはは強引にはやてをコックピットに乗せた。

「手前の仲間の敵討ちなのだ。」

するとはやての頭に、見るからに怪しい機械を取り付けた。

「いいか、手前はこのマシンについては素人なのだ。だから手前は何にもしくなくていいの。頭にくっつけた電子頭脳がすべてやってくれる。ゲッターロボの動きを体で掴めなのだ。」

しかし、当の本人は

「わたしはいやや。何が悲しくて私がこんな機械に乗らなあかんのや!!」

なのははとことん強引だった。

「うるせえ！手前もわたしもリンディのババアに目を付けられたんだ。死ぬも八卦、生きるも八卦、運命と思ってあきらめるのだ。」

「ジャガー号、発進！ベアー号に誘導を任せろなのだ。」

その瞬間、コックピットに凄い振動がかかる。

「いやや！死にとうない！ここから出して…」

「ジャガー号、発進!!」

はやての抵抗むなく、ジャガー号は飛び立っていった。

「わははは！はやて、本当に怖いのはこれからだ。イーグル号も発進なのだ!!」

しかしその時、メカフェレットの首が体当たりしてきた。倒れるトレーラー!! 車体は60度傾く!! しかしこうしてる間にもどんどん車体は傾いていく!!

「くそっ!!」

ジェットエンジンに火がともる!

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

横転するトレーラー!! しかし、ギリギリのタイミングで、イーグル号は飛び上がった!!

「イヤッホー!! へへ、ざまあみるなの。」

イーグル号は体勢を立て直すと、ジャガー号とベアー号の横に付けた。するとメカフェレットの動きに変化が生じた。

「むっ! 飛び上がった!!」

「一体何のつもり!？」

一方ジャガー号では…

「ヒイヒイヒイ! 出してえ! 出してくれえ!! 何で私がこんなのに乗らなあかんのや!!」

はやてが絶叫を上げていた。しかし誰も気にも留めていなかった。

飛び上がったメカフェレット。その両翼から棘の様なものが展開された！

「いけない、ミサイルよ!？」

「はあ？んな出鱈目な!！」

雨あられの様に向かってくるミサイルの嵐!!それを間一髪でかわすジェットマシン!!

「なのはさん。一気に上昇してから合体するわ。」

「いや、機体を変に動かさない方がいいの。ジャガー号には、はやてが乗っているの。このまま合体するの!！」

メカフェレットに正面から向かっていくジェットマシン。先頭から、イーグル号、ジャガー号、ベアー号の順で一列になる。

「チエエエエエエエンジンジツ!！」

なのはの掛け声とともに、イーグル号の窓の部分が変形し、ゲッターロボの顔になる。まるで粘土の様に両端が変形し、なのはが最初に乗った形になる。

次に変形したジャガー号のジェットエンジンが停止する。そこにリンディの駆るベアー号が突っ込む!!

「ひゃああああああああああ!！」

絶叫を上げるはやてであったが、見事合体を成功させた胴体から



は、両腕と両足が飛び出す。すると一気に急上昇した！！

「ゲッターアアアア・１ンツ！！」

ジャガー号の機首に、イーグル号が合わさる！同時に走る緑の稲妻。メカフェレットの上に立つ真紅の巨人。それは紛れもない、ゲッター１の雄姿だった！！

「ゲッター１、合体成功！！」

リンディの声とともに、ゲッターパンチがさく裂する。メカフェレットの頭をもぎ取るなのは。

「なのはさん、一気にやっつける。完全に叩きのめすんだ。」

「魔法の杖で叩きのめしてやる！！」

グルグル目で叫ぶなのは。ゲッター１の手には、レイジングハートが握られていた。

「うりゃあ！！」

レイジングハートで殴りつけ、メカフェレットを撲殺するのは。強固な装甲も、レイジングハートで殴りつけるたびにへこみ、血が吹き出る。すると急にレイジングハートが変形し、斧の様な形に立った。

『アックスモード』

「レイジングトマホークでぶち殺してやる！！」

その斬撃は、一撃でメカフェレットの右主翼を、フェレットの頭ごと切り落とした！！

物の数秒でぼろぼろになったメカフェレット。突如、その中央にある機械の頭部が外れ、逃走を開始した！！

「逃がすか！ゲッターアアアウイイイイイグッ！！」

真紅のマントをはためかせ、飛び上がるゲッター1。

「なのはさん、はやて。安心するのはまだ早いわ。」

「わかっているの、リンディ艦長。怪物どもの仲間はまだたくさんいる。さあ、行こう！！」

メカフェレットの脱出装置を追って、ゲッター1は太平洋へと飛んで行った。

祝PV100000突破企画 ゲッターなのは 第四話（後書き）

レイジングハートでツボったのは作者だけではないはずだ。

チェンジ17 少女たちの戦い（前書き）

まったく、こんなに暑いのに熱い小説を書かんでええ気がするの  
作者だけですかねえ？

## チェンジ17 少女たちの戦い

アースラの中は騒然となっていた。武装局員を秒殺したフェイト軍団。しかしそれ以上に彼らに衝撃を与えたのは

『うおるあああああああああああああああああああ！

』！

ブラックゲッター

流竜馬の鬼神のごとき強さであった

チェンジ17 少女たちの戦い

エイミイがなのはを抱きしめるようにして目を隠す。その光景は凄惨なものであった。

「な…何て戦い方をするんだ…」

クロノが絞り出すようにして声を出す。それもそうだ。いくら敵であるとはいえ、あいては少女だ。人間だ。もしかしたらフェイトの様に自我や感情を持っているかもしれない。しかしそんな倫理や道徳的な感情など、彼が持つてるわけがなかった。

「ひ…ひどい…ひどすぎるよ、こんなの…！」

エイミイの言っていることは正しかった。いくら感情が無かったとしても、そこにいるのは紛れもない人間。しかし何のためらいもなく虐殺していくゲッター。その動きを見てリンディは思わずつぶ

やいた。

「戦うのを…殺すのを…楽しんでるの…!!?」

そう。彼のしゃべり方と言い、完全に楽しんでるようだった。人を殺すことをためらうどころか楽しむ…もし、彼が敵に回ったら…?リンディの背中に冷たいものが走った。

「そ、それよりも、あのゲッターマシンガンってどう見ても質量兵器だ!? 一体いくつもの兵器を隠し持ってるんだ!」

ユーノがそう言ってる間にも、ゲッターは圧倒的な強さでフェイトを一掃していく。あえて言うが、フェイト達が決して弱いわけではない。彼女一人でもなのはと互角に渡り合えるだけの戦闘能力はある。なにせ性能はオリジナルと同じなのだから。しかし竜馬が強すぎた。強すぎたのだ!!

「…彼が戦っている今がチャンスよ! クロノ、なのはさん、ユーノ君、あなたたちはプレシア・テストロツサの逮捕を!」

「了解!」

ゲートに向かって走る三人。お互い無言で走り続ける。すると前からアルフに抱えられたフェイトがこちらに歩いてきた。いや、正確に言えばフェイトを抱えたアルフがこちらに歩いてきているのだが。その目は量産型と同じまったく光のない瞳で、まさに世界のすべてを拒絶しているようだった。足を止める三人。ふと、一人がフ

エイトに駆け寄った。ユーノだった。

「フエイト。そして…なのは。これを見てほしい。」

するとユーノは右腕を掴んで下に引つ張った。バチンと何かのフツクの外れるような音。彼がゆっくりとそれを右肩から引き抜いた。

「ユーノ君…それ…」

声の震えるなのは。その視線の先には、付け根から金属の飛び出たユーノの右腕があった。

「義手だよ。精巧なね。僕は昔事故でね、右腕と左足を失ったんだ。ふふ。なのは。フエレットの時も全然気付かなかっただろう？ ずいぶんリハビリには苦労したからね。ほんとい最近の話さ。」

「ユーノ君…どうして…」

するとユーノは右腕を再び取り付けると、自らの上着を脱いだ。顔を赤くするなのは。しかし次の瞬間、その顔は青ざめた。

「え…!？」

そう、その体には無数の縫い傷が全身にわたって張り巡らされていたのだ。それは左腕にも及んだ。そう、それがユーノができるかぎりフエレットの姿でいようとした理由だった。

「君には見せられないけど、下半身もそうだよ。5歳の頃、不発弾事故に巻き込まれて、僕は全身がバラバラになったんだ。…一緒にいた母さんもね。」

「うそ……」

ユーノは続けた。

「母さんは即死だった。でもね、僕のことを無償で診てくれたお医者さんがいたんだ。顔を名前も知らないんだけどね。その人が僕を生き延びさせてくれたんだ。僕の体の一部には、母さんの一部が入っているんだよ。現に僕の左目は、母さんの目だ。近くに来て良く見てごらん。微妙に左右で虹彩の色が違うから。」

なのはがよく見ると、確かに微妙に左右の眼の色が違った。

「……だから僕は言いたいんだ。君は生まれが少し違っただけであって、人間だ。人間なんだよ、フェイト!!!」

ユーノはフェイトの両肩を掴んでいった。

「僕は君じゃない。君の辛さは僕には一生分からない。……でもね、これだけは言わせてもらおうよ。最終的に君を決めるのは、君自身なんだ。クロノでも、なのはでも、プレシアでもない。フェイト、君だけなんだ!!!」

ユーノは後ろを向いて言った。

「……君なら、どこまでだって行けるさ。だってきみには、立派な腕と、足があるじゃないか。」

「あんた……」



アルフがその言葉に目を見開いた。

「…行こう。なのは、クロノ。いつまでも彼に頼ってなんていられないよ…!!」

そう言うと、ユーノは決して振り向かず、走り去っていった。

「ま、待って！ユーノ君!!」

二人はユーノの後を追いかけて行った。

「っと、出てきたはいいけど、早速すごいことになってるね…」

三人が出ると、そのには無数の傀儡兵がいた。アニメだと何体かだけど、ここではフロアを埋め尽くすくらいの量がいた。

「この子たちって…」

「あれは魔法で作られた人形…ただ近くにいる侵入者を攻撃するだけのものさ。」

「そう…じゃ、安心して戦えるね!!」

クロノとなのはが同時に飛び上がる。

「よし！アクセル・シュータ「いや、その必要はない。「ふえ？」

なのはを手で制するクロノ。

「魔力弾なんて必要ないさ、なのは。消耗戦は、こうやって戦うんだっ！！」

クロノのデバイスから青い閃光が放たれる。それは傀儡兵を貫いていく。

「スナイプ・ショット！！」

掛け声とともに閃光は加速し、粉碎されていく傀儡兵。しかしまだ数は多い。

「おっと、僕を忘れてもらっちゃ困るよ！！」

ユーノが拳を構える。殴りかかってくる傀儡兵！！

「ユーノ君、あぶない！！」

なのはがそう言った時だった。

「でやあああああああああ！！」

傀儡兵のパンチを義手で払い、わずかに軌道をそらし、空振りさせる。傀儡兵の力を殺さず、逆に利用して投げ飛ばした！！もう一体の傀儡兵と激突し、その連鎖が続いていく。ドミノ倒しだ。ユーノはたった一回の背負い投げで8体の傀儡兵を四散させた。目を丸くするクロノ。なのはもあっけにとられた。

「ユ…ユーノ君、強いのだ…」

しかし当の本人はカラカラ笑って言った。

「はは…自分はただの格闘技のものまねだよ。現に暴走体には格闘は全く通じなかったし、なのはに比べたら自分なんてペーペーさ。」

クロノとユーノの活躍により、このフロアの傀儡兵は5分とかか  
らず全滅された。

「ははは！あんな巨体をひしめき合わせるからこつとなるのさ。」

「全くだ。よっぽど焦ってるんだな、プレシアは。」

「あつう…：…なんだか微妙なの。」

余裕綽々の二人に対し、全然出番を見せられてない我らがなのは  
さん。彼女は悪くない。無駄に強いユーノが悪いんだ。

走っていく三人。床には黒い空間が点在している。クロノとユー  
ノは警告した。

「その穴…：黒い空間には気をつけるんだ…！」

「あらゆる魔法が遮断される虚数空間…：落ちたら最後、死んでも  
上がってこれないよ…！」

「うん、分かった…！」

虚数空間に気をつけつつ、なのは一同は駆けていく。すると目の

前に見えた巨大な扉。それをこじ開けると、二つの階段が見える。そしてそれを守るように、30人近いアルフがいた。

「アルフさん…!!」

「なのは、心を鬼にするんだ。全滅させるぞ!!」

クロノのスナイプ・ショットが、なのはのアクセル・シューターが、ユーノの格闘が、アルフ達を沈黙させていく。ユーノが投げ飛ばし、クロノが地上にいる敵の足もとを襲う。そして上空からのなのはのダメ出し。確実に沈黙させていった。

「これで…終わりっ!!」

レイジング・ハートで殴られ、倒れる最後のアルフ。一応全員気絶させている。それを確認するとクロノが言った。

「僕は下に行ってプレシアの下へ行く。君たちは上の駆動炉の封印を!!」

「いや、僕はここに残るよ。」

クロノの言葉をユーノが遮った。その目は金属のむき出しになった義手に向いていた。さっきの戦闘で人工皮膚がすべて剥がれたようだった。

「…時間がない。大量の魔力反応が僕たちの来た道からこちらに向かっている。おそらく、フェイトのコピーだ。」

「ユーノ君、ダメだよ！危険すぎる!!」

しかしユーノは言った。

「なのは、君は先に行ってくれ。駆動炉を封印しない限り、戦いは終わらない。」

するとユーノは背を向けた。

「さらばだっ！なのはっ！！」

一人来た道を駆けもどると、防火シャッターを閉めた。彼は最後まで笑っていた。

『クロノ…なのはを…任せたよ…』

念話がひびくと、

「ユーノ君！？クロノ君、離して！！」

「馬鹿野郎！！」

乾いた音。クロノがなのはを平手打ちした音だった。

「！？」

「ユーノが…あいつが、どんな気持ちで行ったか分かるか！！あいつは自ら退路を消したんだぞ、それがどっという意味か、分かるか、高町なのは！！」

クロノはなのはの胸ぐらを掴んでいった。

「あいつはな…なのは。お前を救うために命かけて戦ってるんだよ！…奴の気持ちを無駄にする気がっ！！」

そう言うと、クロノはなのはを突き飛ばした。

「僕は君にどう思われようが、構わない。君に嫌われようが、恨まれようが、憎まれようが、構わないさ。」

クロノは怒鳴って言った。

「だから、立て！高町なのは！！お前には背負わねばならない十字架があるんだっ！！」

「…っ！！」

短くうなづく、なのはは涙を流しながら階段を駆け上っていった。

「…これでいいんだろ？ユーノ。」

そう言うと、クロノは階段を下っていった。

「バツカ…ヤロウ」

つばやきは、闇にへと消えていった。

チェンジ17 少女たちの戦い（後書き）

今回は竜馬無双よりも熱すぎます。影に埋もれ、淫獣と罵られるあの男が…次回、こっご期待！！

チェンジ18 漢の戦い(前書き)

ユウウウウウウオオオオオオオオオオ!!と、叫んでくれたら嬉しいなあ。ハイパーユーノタイム、はじまります。



## チェンジ18 漢の戦い

ユーノSide

ふふ…カッコつけたはいいが、どうやらここが僕の死に場所らしい。くたばる事なんかいつだってできるさ。でも、僕はたとえ力尽きても、ここを通すわけはいかない。

「さあて…ジャンジャン行こうかあ!!」

チェンジ18 漢の戦い

退路を自ら塞いだユーノ。前方からはフェイト軍団が迫っていた。

「来たか。バインドは、こう使うんだ!!」

ユーノは機械の右手をかざす。

「スパイダー・バインド!!」

通路にクモの巣のようにバインドを張るユーノ。猛スピードで接近してきたフェイトは対処しきれず、バインドに引っかかってバランスを崩して地面に突っ込んでいく。ユーノは義手を変形させた。

「行くぞ!アーム・サーベル!!」

拳が少し浮き上がると内側に折りたたまれ、手首の外側から剣が

飛び出す。その形状は旧日本軍の銃剣に酷似していた。

「うおおおおおおおおおおおおおお！！！」

それを倒れたフェイトの左胸に突き刺した。当然刃は寝かしてある。刺した部分からは赤い染みが広がっていき、彼女の瞳孔は開いた。

「ふ…ふふ…これで僕も『人殺し』か…」

自虐的は笑いを浮かべると、剣を引き抜く。その手は震えていた。はじめて人を殺した感触。だが、感傷に浸っている場合ではない。そんなの死んでからでも十分にできる。彼は深呼吸すると再び構えた。

「死にたい奴はかかってこい！このユーノ・スクライア、そう簡単には殺されないぞ！！！」

少年の声が回廊に響いた。

「おりゃあっ！！！」

ユーノの回し蹴りが決まる。そして回転を殺さず、もうひとりのフェイトの腹に肘打ちを決める。崩れ落ちる二人のフェイト。その上からバルディッシュを振り下ろすフェイトの姿が！！

「……………」

「甘いっ！！！」

振り下ろさせたバルディッシュ。しかしユーノは飛びあがって、バルディッシュの上に乗る。地面に突き刺さる魔力刃。バルディッシュをユーノが駆けあがる!!

「おらあつ!!」

パンチを顔面に決めると、バルディッシュを奪い取り、手に構えて止めを刺す。しかし何体もユーノに向かって上空から襲いかかる。だが!!

「こいつで…どうだあつ!!」

ユーノの左膝が開くと、そこからミサイルが連射される!!大爆発を起こして四散するフェイト達。

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!」

ユーノの瞳には、炎と光が宿っていた。

10分以上が経過した。

「そこだあつ!!」

ユーノの飛び蹴りがフェイトの延髄に命中する。崩れ落ちるフェ

イト。だが

「くそっ！まだ減らないのか!!！」

ユーノの足もとは100人以上のフェイトが血に伏しているが、襲いかかってくるフェイトの数は、一向に減る様子を見せなかった。

「くそ！しまった!!！」

体を金色のバインドで拘束されるユーノ。刹那、ものすごい雷撃が彼を襲う！五重の『サンダーレイジ』、それも殺傷設定のものがユーノを襲った。

「ぐああああああああああああああああああ!!！」

力尽きて倒れそうになるユーノであったが、何とか踏みとどまる。しかし、サイスマードに変形したバルディッシュでフェイトが襲いかかる。彼はただの的に過ぎなかった。額が、腹が、切り裂かれて鮮血を噴きだす。そして無慈悲に繰り出される魔力弾。全身から血を噴きだしても耐えるユーノ。しかしそれがユーノの機械の左足の脛を完全に破壊すると、バランスを失い、前のめりに倒れた。絶望的な状況。勝ち目などあるわけがない。しかしユーノの眼は死んではいなかった。

「ふ…ふふ…この程度か？」

ふらつきながらも立ち上がるユーノ。全身から血を流し、壊れた左足からは配線と火花が飛び散っている。あまりにも痛々しすぎる姿であった。

「お、親父の、げん…こつ…の、方が、へへ、き…いた…よ…ゴ  
フッ!」

口から血を噴きだしてうずくまるユーノ。しかし彼はもう一度立ち上がった。

「まだだ…まだ…僕は…死ぬわけには…いか…ない…んだ…」

それでも戦い続けるユーノ。自分の顔の前に機械の右手の拳を掲げる。

「いくぞ…プロジェクトFの、亡霊ども…なのはの…あの子たちの未来を…渡したりはしない…!!」

彼は満身創痍だった。昔の傷跡も開いている。しかし、こんな絶望的な状況にもかかわらず、彼の眼は輝きを増していた!!最後の咥、防火シャッターに背をもたれる。その口には、笑みが浮かんだ。

「いくぞ…死にたい奴は…かかって…こい…!!」

また血を吐くユーノ。しかしシャッターから背を離すと、彼は自分の民族衣装を模した血まみれのバリアジャケットの上着を脱ぎ捨てる。突如、疾風が巻き起こり、上着は空中をはためきながら消滅した。

構えると、その場でシャドーボクシングをするユーノ。シュツシュツと音を立て、拳から汗と血が飛ぶ。深呼吸。彼は仁王立ちして言った。

「…諸刃の剣は僕だけではない。そう、なのはも、フェイトも、

アルフも、クロノも、リンディさんも、エイミーさんも、局員の皆さんも、そして、ブラックゲッターも、みんな自分との戦いだつた。」

機械の右腕を握りしめるユーノ。そこから漏れるオイルは、血の色をしていた。

「だが僕は、彼らの何の力にもなれなかった。友として何もしてやれなかった。そして、なのは。僕は…僕は、惚れた君の背中を守ることすらもできなかった。」

右の拳を握りしめ、空に掲げるユーノ。機械の拳が真っ赤に光り輝く！！

「そんな自分に、腹が立つ！！！」

ユーノの左足の膝から下が外れる。そこから噴き上がるジェット噴射！！通路のフェイト達を薙ぎ払いながら、ユーノは一直線に進んでいく。最初、自分たちのいた大広間。そこから直角に急降下するユーノ。壁が、敵が、ユーノを阻むすべての物が消し飛んでいく。

「プレシア！これ以上お前のために、誰かの涙は見たくない！！！」

幾枚の壁を突き破った直後、一気に視界は開ける。信じられないくらい広い部屋に、ひしめき合うフェイトとアルフ。その中央には一本の緑色に光る柱が立っていた。それは、すべてのフェイトとアルフに指令を送る装置だつた。

「人間爆弾、『静かなるスクライア』の最終奥義…！！！」



「親父…母さん…ユーノ・スクライアは…ただいま帰りました…  
!」

両目から溢れる涙。それは光と共に消えていった。



## チェンジ18 漢の戦い（後書き）

自らを犠牲にして、なのはたちを守り抜いたユーノ君。次回はついに、なのフェアが大暴れ。スーパークロノタイムはお預けです。

チェンジ19 聖域(前書き)

まさか、こんなことになるなんて…結局なのは次回に…で、でも許してもらえるかな…かな？

## チェンジ19 聖域

アースラ内部

ユーノが単騎特攻する少し前：医療室には彼女らがいた。廃人と化したフェイトと、それを見守るアルフ。アルフが話しかける。しかしその場は静寂だけが過ぎ去っていく。また話す。だが、この静寂をぬぐい去ることはできなかった。モニターには、自分と同じ姿の敵に苦戦する三人の姿が。アルフは心を固めた。

「あの子たちが心配だから、あたしもちょっと手伝ってくるね…？」

しかしフェイトは全く表情を変えなかった。その頬に手をやり、優しく話しかけた。

「すぐ戻ってくるよ。そして、すべてが終わったら…ゆっくりでいいから、私の大好きな、ほんとのフェイトに戻ってね。これからは、フェイトの時間は、フェイトのために自由に使っていていいから…」

優しく微笑むと、アルフは部屋を出て行った。

チェンジ19 聖域

フェイトSide

わたしはだれ？わたしはだれなの？あれ？おねえさんがわたしを

みてる。おかあさんはみてくれなかったのに。あれ？なんでそんなかなしそうなかおをするの？…ふえ…いと…？そうなんだ…それがわたしのなまえ…あんまりかわいくないなあ。やっぱりおかあさんはわたしがきらいだったんだ。

あれ？なんだかぴかぴかするよ？なあに？え！なんかからだがふわふわして…

「うわっ！！」

フェイトが目を開けると、そこは見たこともない世界だった。

「な…なに…？何が起こってるの…！！？」

ズシン…ズシン…

巨大な足音。フェイトが恐る恐る振り返ってみると…

「な…『ゲッターポセイドン』…え！？」

フェイトは自分の口を疑った。目の前の見たこともないロボット。これを自分は、無意識のうちにその名で呼んだ。

「知らない…私はこんなの知らない！！」

フェイトは力の限り走る。目の前の敵から逃げるために。だが、

「ひっ！！」

目の前のビルを破壊して出てきた巨人。フェイトの口はまたして

も動いた。

「あ…ああ…『ゲッターライガー』…いや…助けて…」

じりじりと迫るゲッターライガー、そしてゲッターポセイドン。しかしそれは我々の知っているものではない。幾重にも継接ぎがされて、ほとんどシルエットと頭くらいしか原形をとどめていなかった。しかし、そんな事などフェイトにはどうでもよかった。

「いやあ…来ないで…来ないで…!!」

『おいおい、こんなところにおちびちゃんが紛れ込んでるぜ。どうする?』

『くひひ。殺せ殺せ! 敵の畏に違いない!!』

『そうだな、兄弟。《聖域》に往く前の景気づけだ!!』

ドリルを回転させるゲッターライガー。ゆっくりと振りかぶる。

『きひひひ! 死ね!!』

ドリルがフェイトを挟む瞬間!!

「ゲッタアアアアビイイイイムツ!!」

真横から飛んできた光線が直撃するゲッターライガー!! フェイトに振りかざそうとしていた右腕は上空に吹っ飛び、そのフレームはアイスクリームのように溶け、変形していく。

『ば…ばかな…パワーが違いすぎ…』

ドワオ！！

ゲッターライガーは木っ端微塵に吹っ飛んで行った。

『ひっ！！なんてパワーだ！？』

土煙が舞い上がる。そこから現れた赤き巨人。東洋の鬼の様な顔。悪魔の様な翼。そして、神のごとき瞳。その瞳とフェイトの目が合った。

「『真…ゲッター…ロボ…』…え？『世界にたった一機しかない、本当のゲッターロボ。彼は皇帝の…』<sup>エンペラー</sup>え…エンペラーって…何…？！」

違う。これは私たちのいる世界ではない。私の居てはいけない世界なんだ。フェイトはそう直感した。

「こんなガキ一人にゲッター2機で相手か？馬鹿馬鹿しいぜ！！」

『なんだと！ええい、ゲッターサイクロン！！』

ゲッターポセイダンの胸部装甲が持ち上がり、首周りのフィンが高速回転をはじめ。だが

「遅えんだよ！」

身の丈以上はあるゲッタートマホークを構えると、真ゲッターは瞬時にそれを投げる！！回転しながら飛んでいくそれは、ゲッター

ポセイダンの頭部に突き刺さった！！

『ぎゃあああああああああああああ！！』

『あ、兄貴！！』

メインパイロットをやらね、行動不能になるゲッターポセイドン。  
動きが鈍る。

『うわああ！！どうしよう！！どうしよう兄さん！！』

『落ちつけ！オープンゲッターしろ。ゲッタードラゴンでいく！！』

オープンゲッターする三機のゲッターマシン。下からただ見つめてい  
るだけの真ゲッター。

『あ、あいつ馬鹿だよ！ぼーっとしてる。』

『やるなら今だ。エドの敵を討ってやる。チェンジドラゴン！！』

継ぎだらけのイーグル号が、ゲッタードラゴンの頭胸部に変形  
する。つづいて変形するライガー号。腕が出てきたところで、後続  
のポセイドン号が後をつける。自動操縦である。しかし、本当に馬  
鹿なのは彼らであった。

「…このガキが。十年甘え！地獄で顔洗って出直してきやがれ！  
」！

真ゲッターの額から、ゲッタービームが発射される。それは今、  
正にドラゴン号と合体しようとしているライガー号の右エンジンを

撃ち抜いた。火を噴くライガー号！！しかし、もう変形が始まってしまったから、今更回避することはできなかった。

『う、うわあー！！』

わずかに機体を傾けたまま、ドラゴンに突っ込むライガー！！途中まで出ていた腕は片方もげ、ドラゴンの両目が割れ、機械とオイルが噴き出した！！

『ぎゃああああー！！兄貴iiiiiiiiiiii！！』

しかし彼は気づいてはいなかった。自動操縦のポセイドン号は、ライガーが傾いて合体：いや、突き刺さっているのを知らず、そのままの姿勢で突っ込んでくる。やっと彼が気付いたのは、もう肉眼ではつきりと見えたころだった。

『うわああ！死にたくない！！』

だが、ポセイドン号はそのまま突っ込んだ。

『ぎゃあ。』

コックピットがひしゃげ、内臓を噴きだして絶命するパイロット。そして空中で歪んでいくゲッターロボの機体。そして

ドワオオー！！

空中で、木っ端微塵に吹っ飛んだ。

「す…す…す…」



何も分からないフェイトにも分かった。あのロボット、『真ゲッターロボ』に乗っているパイロットは、他とは比べ物にならないほどの戦闘力、判断力、そして精神力を兼ね備えているんだと。すると真ゲッターがこちらに歩いてくるのではないか！逃げるにも、腰を抜かして動けないフェイト。だが

「おい、そこの嬢ちゃん！あぶねえから真ゲッターの乗れ！！」

すると、ロボットの口にあたる部分が開き、傀儡兵のようなパイロットスーツを身につけた男がいた。

「すまねえ！俺は動けねえんだ。嬢ちゃんは行けるか？」

その言葉にフェイトは、はっとした。

「そうだ！は、はい！バルディッシュ！！」

『Yes, sir.』

何故バルディッシュが元通りになっているのか。普通なら疑問に思うが、今のフェイトにそんな余裕はない。バリアジャケットを身にまとい、コックピットに向かって上昇するフェイト。その男は、目を丸くしてフェイトを見ていた。

「な、なんだあ！？人間が浮いてるだも！！」

とりあえず人間で言うところの口の部分からコックピットに入ったフェイト。男は言った。

「…言うておくが、真ゲッターのパワーは尋常じゃねえ。こいつが飛び上がっただけで、恐らくお前は死ぬ。」

男はつづけた。

「だが、その様子を見るようじゃ、お前も俺と同じ、迷い込んできた奴の様だな。だが、このまま地上においては確実に死ぬだけだ。どうする？俺と来るか、それともここで降りるか。俺は何も言わねえ。お前が考えろ。」

男の言う言葉を考えるフェイト。そして彼女は言った。

「飛ぶ…？何かあてはあるんですか？」

「あてなんかないさ。ただ、さっき倒した奴がこう言っていたんだ。『あの上には聖域がある。そこにいけばどこへだって行けるが、誰もパワーが足りず、いけねえ』ってな。だが、真ゲッターなら可能だ。俺はその可能性に賭けてみようと思う。」

男の答えを聞いて、フェイトは決心した。

「…私は、フェイト・テストロツサです。あなたと共に、真ゲッターロボに乗せてください！お願いします！！」

深々と頭を下げる少女に、男は言った。

「なあに、頭下げる必要何てねえよ。俺は流竜馬ってんだ。よろしくな、フェイト！」

そう言うとき竜馬は、フェイトにサムズアップした。

「さあて…どうだ？覚悟はできたか？なるべくゆっくり飛ぶが、命の保証はできねえ。死んじまっても…構わねえか？」

「はい。どちらにしても、後悔はしたくありません。」

「ほお…いい目してるな。気に入ったぜ。」

真ゲッターの口が閉まると、両眼に光が宿る。空を見上げると、竜馬は思った。

（何だったんだ、今の…）

改めて自分の手を見る。

（あれは勘違いなんかじゃねえ。確かに俺はあのとき、ゲッターと同化していた。でも、あのフェイトとかいう奴を見た瞬間、元に戻っちまいやがった。一体何が起こってるんだ…）

「…さて、行くか！」

「お願いします！」

フェイトの声を合図に、竜馬はボタンを押した。

「ゲッタアアアバトルウイイイイイングッ！！」

蝙蝠の様な巨大な翼を広げて、真ゲッターは飛び立った。

真ゲッターの最高速度は亜光速に達する。が、速度を抑えたとしても、ゲッターロボGを遥かに超えるGが二人を襲った。

「大丈夫か、フェイト!!」

「ぐ…ぐうっ…!!」

フェイトの体には、内側からバラバラになるほどの凄まじいGがかかっていた。生きているだけでも奇跡だった。だが

(だめ…体が…もう、もたない…)

徐々に視界がぼやけ、竜馬の声も聞こえなくなる。

(ああ…わたし…死…)

フェイトが目を閉じようとしたその時

『ゲッターを信じる。自分たちの力を信じるんだ。』

突然響いた声。それは聞きなれた声であった。

「バル…ディッシュ…?」

『そうだ。フェイトよ。ゲッターは力で操縦することは敵わない。心で動かすんだ。』

「ゲッターを…信じる…?」

フェイトは目を閉じると、突然浮遊感の様なものを感じた。すると今までの痛みや衝撃が嘘のように消えていき、だんだんと意識が覚醒していった。そして

「…い…おい！大丈夫か…!」

「ふあ…ん…あれ？竜馬…さん…?」

フェイトが目を覚ますとそこは、雲の上であった。

「いやー、すげえなお前！死んじまったと思ったら、なんか一人でブツブツ言ってるしよ…お前ベンケイよりも大物なんじゃねえのか?」

「…あはは…すみません。まだ頭がぼーっとしていて…」

「…真ゲッターの中で寝れる人間はそうそういないぜ…」

雲の上を飛んでいく真ゲッター。不意に正面に何か黒いゴマ粒が無数に現れた。

「あれは…ゲッターロボ!？」

「いや、待て！なんか様子がおかしい…!」

よく見るとそれは、炎をあげて地上に墜ちていく。爆発を起こし、無残に散っていく名も無きゲッター。横目でそれを見つめるフェイト。

「みんな同じ方向に飛んでる…教えてください！あの先には一体何が…「聖獣」…え？」

竜馬は言った。

「ゲッターセイント聖ドラゴン。奴らはそう言っていた。俺にもよくわからねえ。この先に、一体何があるんだ…!!」

加速する真ゲッター。すると突然、バラバラになって墜落していくゲッターロボが一機もいなくなった。厚い大気の壁。それをこじ開けるようにして、奴は現れた。

「な…あれは…!!」

「これが…セイント聖ドラゴン…!!」

それは機械にしたら、あまりにも大きすぎた。フェイトの視界いっぱい、その顔面はあった。想像を絶する大きさであった。よく見ると、体の表面にゲッターロボらしきものが浮き上がっていた。

「ゲッターロボで…できてる…一体、何が起こってるの!？」

フェイトが言ったその時だった。

『リヨウマ…そしてフェイト…!!』

「うっ！！」

「え！？」

そう、それは聖ドラゴンセイントから発せられた声であった。

『ここはお前たちの来る世界ではない！！何故来た！！』

動揺する二人。ドラゴンはつづけた。

『私がお前たちと会うのは遙か未来。フェイト。汝とは歴史が狂ったままであった時だが…帰れ、帰らぬか！！』

「ちょ、ちょっと待ってくれよ！俺には何が何だがさっぱり分からないんだ！！」

「私も、目が覚めたらここにいて…教えてください！ここは一体どこなんです！！」

しかし

『帰れ！！』

凄まじい衝撃が真ゲッターを襲う！！竜馬はとっさに目をつぶってしまった。

「ぐっ…大丈夫か、フェイト…ト…！？」

目を開けるとそこは、宇宙空間であった。そして横の座席を見ると

「いない…どうなっているんだ…」

竜馬に隼人からの通信が届いたのは、この後すぐの事であった。

「うわっ…！」

ベットからはね起きるフェイト。服は汗でびしょぬれになっていた。

「夢…だった…？」「いや、夢ではない」「バルディッシュ…！」

待機状態の相棒は言った。

『あれは近い未来のミッドチルダ…そして我々は…いや、今ここで語るの早い。もう私に残された時間は残りわずかだ。』

「え！？どういうこと、バルディッシュ…！」

彼は言った。

『フェイト・テストロッサ。あのような未来を、お前は望むか？』

フェイトは首を横に振った。

『そうか。そうだろう。なら、後悔だけはするな。』



「後…悔…？」

『そうだ。君たちなら未来は変えられる。そのために私とレイジングハートは…』

そういうと、バルディッシュは一瞬光って、何も話さなくなった。モニターを見ると、窮地に立たされた高町なのはが映し出されていた。

『後悔だけはするな』

バルディッシュの言葉が胸によみがえる。

『俺はその可能性に賭けてみようと思う』

竜馬の言葉が、フェイトを再び立ち上がらせた。

「そっだよ…後悔なんてしたくないよね…!!」

フェイトは立ち上がり、バルディッシュを手に取って叫ぶ!!

「行こう、バルディッシュー!!」

『Y a s , s i r .』

彼女の時間が、進んだ瞬間だった。

## チェンジ19 聖域（後書き）

原作版竜馬と、そして聖ド<sup>セント</sup>ラゴンとの初のコンタクト!!そして、バルディッシュは一体何を伝えようとしていたのか。そしてフェイトとゲッターロボとの関係は…

今回は確実になのは出ますんで、よろしくです!

チェンジ20 ふたつの心、重ねて（前書き）

ついになのフェイが大暴れ！でも地味にアルフさんが凄い事をやっています。

チェンジ20 ふたつの心、重ねて

高町なのはは窮地に立たされていた。

「デイベイイイイン・バスタアアアア！」

桃色の光がフェイトを一掃するも

「くっ！ いったい何人のフェイトちゃんがいるの!？」

そこには新たなフェイトが、バルディッシュを構えて突撃してきたのだ。

チェンジ20 ふたつの心、重ねて

確かにデイベインバスター等の砲撃魔法で、多くのフェイトを戦闘不能にしてきている。しかし、敵の物量が半端ではなかったのだ。倒せばその二倍は現れる。肉体的な疲労は当然だが、彼女の精神的にもダメージを与え続けていた。

「……………」

残念ながら、フェイト自体の攻撃力、防御力はさほど脅威ではない。冷静になれば、AIのフェイトなど、ほとんどデバイスと魔力の性能に頼った戦いしかできないなのでも、十二分に対処することができた。ほとんどゲームをやっているような感覚なのだ。確かに数こそ多いが、その動きはある種の統一性がある。もともとそう

という系統のゲームが得意なのはにとつては、戦いやすかった。だが

「まだ…！？一体いつになったら終わるの…！！？」

一体一体だったら何とか対処できるも、5人単位が一度にクロスレンジで襲いかかれば、対処しきれないのは目に見えていた。これが仮になのはに竜馬やユーノのような格闘能力や、クロノのような判断力があれば話は別だ。だが、戦いをはじめてわずか数カ月程度の少女にそれを要求するのは不可能である。そしてなのはは接近戦に対応した魔法が少ない。徐々に彼女は押されていった。フェイトの攻撃を防ぐも、数人の同時攻撃の前に苦悶の表情を浮かべるのは。そして

「！？しまっ…！！」

レイジングハートがはねられ、無防備になるのは。左手でそれは握られているも、もうフェイトの魔力刃は首元に迫っていた。

(ごめんね、ユーノ君。私…)

なのはが目をつぶったその時だった。

ギヤイン！！

金属と木材の中間の様な、何とも言えない音が響く。目を閉じているなのはには、何も起きなかった。ゆっくり目を開けると、そこには

「敵の前で、目をつぶったらダメだよ…なのは。」

そう、今まで戦ってきた敵と同じ姿。しかし、なのはには分かった。分からないわけがなかった。

「フェイト…ちゃん…!!来てくれたんだね!!」

「うん。でも、私だけじゃないよ。」

そう言うフェイトの視線の先には

「おりゃあつ!!」

量産型フェイトを蹴散らし、颯爽と登場するアルフだった!!

「大丈夫かい!」

「アルフさん!来てくれたんですね!!」

三人はフェイト軍団を見る。その数は、まだ一向に減る気配がなかった。おまけに傀儡兵やアルフが混じり、状況はさらに悪化していた。

「このままじゃジリ貧だね、フェイト。」

「うん。正面から行ったら、こっちが息切れしてやられる。」

「ふえ!?!打つ手なしなの!?!」

しかしフェイトは言った。

「確かにね、なのは。でも私たちの目的は…何だった?」

「駆動炉の…封印？」

フェイトはうなづいた。

「そう。だから、この子たちを相手にする必要はないんだ。とにかくここを突破することを考えて。」

「うん。わかった！！」

三人は一列になって飛んでいく。右からアルフ、なのは、フェイトの順だ。なのはを中心にして左右の二人が前に出る、？字になって飛行する。

「フェイトちゃん！私がディバインバスターで突破口を作るから、そのすきに突入して！！」

「わかった。頼むよ、なのは。アルフは…」

「この子に近づくやつらをぶっ飛ばせ…でしょ？大丈夫。指一本触れさせないよ！！」

「アルフさん！！」

なのはがレイジングハートをシューティングモードに変形させ、エネルギーをチャージする。当然的になるなのは。だが

「やらせないよっ！！」

アルフが量産型アルフを腕をつかむと、大きく回転して空に向か

って投げ飛ばす！！空中で何体かと激突すると、地上に向かって落ちていく。投げ飛ばしたアルフに、今度は量フェイトが襲いかかる！背後からバルディツシュで首を狙う量フェイト。しかし

「おっとつと…これに当たっちゃ、ただじゃすまないね。」

瞬時にしゃがむことでこれを回避する。

「！！！！！！」

気付いた量フェイトは姿勢を戻そうとするも、空振りバツターのように腕を振り切ってしまう、間に合わなかった。

「でやっ！！」

顔面に直撃するストレート！量フェイトが吹き飛ばされたとき

「フェイトちゃん！アルフさん！私の後ろに下がって！！」

「わかった！」

「了解！いいよ！！」

レイジングハートの先端に魔力光が集束していく。

「スパイラルウ…」

デイベインバスターを発射するために、光が集まり輝きが増す！しかしなのははそれを待っていたかのように飛び上がり、回転を始めた。





「ここは…？」

そこは無数の傀儡兵の蠢く部屋だった。正直傀儡兵にはご無沙汰であった。読者のみなさんにも分かるとおり、傀儡兵は量産型フェイトや量産型アルフに比べると弱い。回避性能はゼロに近いし、体は大きいので的になる。装甲も見た目ほどには硬くなく、攻撃範囲は格闘のみしかないので短く狭い。おまけに攻撃のモーションやスピードが遅いので、この中で一番戦闘経験のないのはでも、余裕に倒せるレベルの敵であった。が、やはり本拠地防衛か。その物量は半端ではなかった。

「あの柱…きつとあれが駆動炉だね。」

「うん。これを叩けば、傀儡兵は機能停止する…かな？」

「どっちにしても敵が大きく減るんだ。どうする？飛行タイプの敵もちらほらいるけど…」

フェイトは言った。

「敵は多いけど、地上の敵は無視していいね。空中の敵を撃破しながら、柱を攻撃するよ！」

飛行型の敵は、剣を持ち襲いかかる。振り下ろされる剣！だが、フェイトは下からバルディッシュを振り上げ、剣を持った手を斬り上げる。剣を持ったまま吹き飛ばされる拳。顔面のモノアイにバルディッシュの柄を突き刺して、機能停止させる。

「ハアアアケンツ・セイバアアアアア!!」

引き抜いた動きを生かし、大きく振りかぶるフェイト。振るモーションでまず一体の首をはね、放たれた三日月状の刃が敵を斬り裂きながら飛んでいく。それは流れる水のごとく。敵の攻撃を流し、ピンポイントで貫く。まったく無駄のない動きで敵を確実に撃破していくフェイト。その一方

「アクセル・シユウウウツツ!!」

こちらは豪快な範囲攻撃で、敵を一直線上に薙ぎ払っていく。その攻撃は、すべて駆動炉に向かって撃たれていた。だが

「だめ!私の魔法が全然通じない!？」

そう言ったその時だった。

「くっ!奴らめ、ここを嗅ぎつけたか!」

アルフの視線の先には、侵入するときにあけた穴のみならず、通気口といったところから湧く様に現れる無数のフェイトとアルフの姿が。

「い、今来られたら…」

フェイトがそう言った瞬間、一斉に攻撃を開始してきた!!

「うわっ!!」

「きゃあ!!」

「なのは！フェイト！くっ…」

いくらなのは達とはいえ、一斉に襲いかかれては手も足も出ない。無数の魔力弾で撃墜される三人。彼女は皆、地上の傀儡兵によつて捕えられた。

「ぐっ…！！」

「が…ああ…」

量産型に寄つてたかられ、地面に顔を押し付けられ、ぐりぐりされるフェイト。アルフは傀儡兵にバットのようなこん棒で何度も殴られる。なのはは

「くっ！かはっ!？」

アルフに羽交い絞めされ、フェイトに顔や腹を殴られ、蹴られる。右のまぶたは完全に開かないほど腫れ、口からは血が垂れていた。今度はバルディッシュを使って殴打するフェイト。激痛のあまり、なのはの声は一層大きくなる。

「や…やめて…」

フェイトの眼に涙が浮かぶ。そこには、もうぐったりとして顔を上げないなのはの姿があった。

「もう、もういいでしょ！何で…関係のないなのはが…」

アルフに突き飛ばされ、前のめりに倒れるなのは。それをバルデ

イッシュで叩き、蹴り、叩きつけるフェイトとアルフたち。それは集団リンチであった。

「やめて!やめてえええええええええ!」

フェイトの一人が大きな石をなのはの頭に叩きつけようとしたその時!!

ズズズズズズ...

「!?!」

彼女たちの耳に届いたのは、大気を震わすかのような轟音。そして

300

「きゃあっ!!」

巨大な鉄骨の様なものが壁を突き破り、地面に突き刺さる!!地面は激しく揺れ、立っていたフェイト達もバランスを崩して倒れる。

「な、なのは!!」

今がチャンスと這いずりながらなのはに近寄るフェイト。虚ろな目で息を荒げるなのは。それは弱弱しく、いかにひどい暴行を受けたのか物語っていた。

「フェイト...フェイト...ちゃん...」

「なのは!!しっかりして!!」

なのはの体を抱き抱えるフェイト。

「に……げて……はや……く……」

その時だった。

「フェイト！うしろー！！」

フェイトが振り向くと、バルディッシュをサイスモードに展開して、振り下ろしてくるフェイトが真正面にいた！！

「くっ！ここまであつ！？」

フェイトがなのはを抱き抱えた瞬間！！

「！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？！？」

フェイトはその異常を感じ取った。自分を追いつめた量産型たちが同じ姿勢でブルブル震えているのだ。

「な……何が、起こっているの……！！！」

それはアルフも同じであった。

「訳が分かんないけどチャンスだよ！フェイト！今のうちに！！！」

「うん！わかったー！！」

なのはを抱え、飛び上がるフェイトとアルフ。空中に出るとそれ

が良くわかった。

「コピーたちが…止まった…」

空中にいたものが地上に墜ちていく。地面を覆いつくす、フェイトとアルフだったものたち。それを傀儡兵が踏み散らしながら蠢いている。傀儡兵だけが動き続けていた。

「大丈夫だよ…フェイトちゃん…」

「なのは！」

フェイトの腕を抜け、ふらつきながら立ち上がるなのは。彼女は言った。

「あれは…ふつうに攻撃してもダメ…私の魔法が一切通じなかった…」

しかしなのはは

「でも…あれの本体を潰せなくっても…まわりの回路を切断して…完全に切り離せば、止まるよね…?」

「…そうか！駆動炉自体を壊せなくっても」

「完全に切り離せば動かない!!」

なのははふらつきながらも立ち上がり、しっかりと足を踏ん張る。先に動いたのはフェイトだった。

『Plasma Lancer』

「いけるのか…!!」

小型の魔力弾が床に穴をあける。その数は計八か所、駆動炉を取り囲むようにあけられた。

「フェイトちゃん、離脱して！レイジングハート!!」

『Yes, master.』

「デイバイイイイン・バスタアアアアアア!!!!」

フェイトのあけた穴をなぞるように、デイバインバスターを発射したなのは!!すべての穴をつなぎ合わせるように撃ち抜くと、土煙を上げて駆動炉が陥没する。

「よっしゃあ!とどめはあたしだよっ!!!!」

アルフが駆動炉にバインドをかける。当然バリアが張られる駆動炉。アルフはバインドを掴むと

「ううううりやああああああ!!!!」

全身を使っって投げ飛ばした!!

「ゴミはゴミ箱に入ってな!!」

傀儡兵を潰しながら地面に突き刺さる駆動炉!しかしその直後、異変が起こった。



「ふえ！？駆動炉が…沈んでいく…」

そう、駆動炉が地面に飲み込まれていくかのように沈んでいくのだ。アルフは笑いながら言った。

「ははは！虚数空間に叩き落してやったのさ！プレシアめ、自分で墓穴掘りやがった。」

「やった。これで、もう…」

フェイトがあたりを見渡すと、ブルブル震えた後、倒れていく傀儡の姿があった。喜ぶ一同。しかしなのはは手放しでは喜べなかった。

（何か、嫌な予感がする…ユーノ君、クロノ君。無事に帰ってきて…！！）

二人の安否を気に掛けながらも、合流するために出発する三人であった。

チェンジ20 ふたつの心、重ねて（後書き）

正面から一撃で潰したユーノに対し、三人の頭脳で勝利したなのは一同：普通は逆だと思うけど、気にしない気にしない。

さて、次回からはお待ちかね（？）のスーパークロノタイムです。ユーノが派手にやってしまいましたからね。クロノはどう暴れるつもりなのか：お楽しみください！！

チェンジ21 氷のプライド(前書き)

いやー、忙しすぎる。更新遅くなっちゃうけど許してください。

## チェンジ21 氷のプライド

『クロノ君は本当に優秀だね。』

そう。

『ハラオウンさんもクロノお坊ちゃんのような優秀なお子様をもたれて…』

僕はいつもそうだった。

『全くうちの息子もハラオウンさんのとこの息子さんの様なしつかりものにならないかしら…』

天才。僕はそう呼ばれ続けた。

『クロノく勉強教えてくれよ』

だからだ。

『おい、あいつに話しかけんなよ。いつもつまんねえしさ、自分天才だと思ってるんじゃないかねえの?』

僕は常に孤独だった。

『君に私から教えることは何もないよ。帰りたまえ。』

僕は人間が嫌いだ。

『キモイんだよ！学校来るんじゃないやねえよクス！』

いや、人間という生き物が至極愚かに、自分も同じ生物なのかと思つと吐き気がしてくる。僕の精神が正常なのか、異常なのか、その答えはまだ出せていない。人間は、常に自分の有利な立場に付こうとする。そのために平気で他人を裏切り、何事も無いかのように振る舞う。あたかもそれが当然のごとく雄弁をふるい、一人がやれば全員がそれに流される。下らない。僕は人間という生き物に対して、その言葉だけの感情しか持たなかった。それは、肉親に対してもそうだった。

### 見せかけの愛

『クロノが倒れたですつて！？』

僕が、愛そうともしていなかったのに

『はい。極度の精神疲労による鬱状態と…』

気づけるわけがなかった。

だから僕は常に一人でいようとした。僕は自然と孤独を選ぶようになり、その方が居心地がよかった。学生のクロノ・ハラウンよりも、管理局執務官のクロノ・ハラウンを方が、居心地がよかった。いや、そうでないと僕自身の精神がもたなかった。

だが

『クロノ・ハラウン君…で、いいかな？私、エイミー・リミエツタつて言うんだけど…』

彼女と、そしてあの子たちが…

## チエンジ21 氷のプライド

止まる事を知らない爆発音。揺れる地面。乾いた音が鳴り響くと、何か地面に突き刺さった。折れてぼろぼろになったデバイス。それには、肩を押さえた少年の姿が映っていた。

「ぐうっ…そうはいつでも、しんどいな…」

一斉に殴りかかってくるアルフの打撃。左手ではじくと、一気にそのうちの一体の懐に飛び込み、強烈な肘打ちを腹に撃ち込む。崩れるアルフ。それを見るよりも早く、クロノの裏拳がもう一体の顔面に直撃、回転しながらのラリアットで、完全に叩き潰す。

「闇雲に殴ってきたところで」

後ろから拳を振り下ろすアルフを

「当たらないよ!!」

腕を払い、完全に伸びきったところで、肘の関節を完全に破壊する。鈍い音 骨の砕けた音が響く。

「!!!!!!」

軽快に飛び上がり、上から手刀を延髄に向かって振り下ろす。鈍

い音が鳴り、首をあらぬ方向に曲げたアルフはその場で絶命した。

「はあ…はあ…」

クロノは自分の手を見る。その手は血に染まっていた。

「くそ…まだいるのか…」

壁を破壊して量産型フェイトがなだれ込んでくる。クロノは折れたデバイスを手に取ると、睨みつけながら構えた。

『君が…クロノ・ハラウン君なんだ。私ね、エイミー・リエッタっていうんだ。よろしくね!』

「そう…」

手首に包帯を巻き、精神病棟に入れられた少年。その部屋にはベツドしかない。窓にはカギが付いておらず、エアコンで温度を調整する。自殺を防ぐためであった。現にクロノは数回自殺未遂をしている。今でも彼の首と手首には、その時の切り傷が残っている。首をつつたこともあった。だが、すぐに誰かに発見される、また今話しているこの少女に止められるといった事情で未遂に終わっていた。

『クロノ君。今日はいい天気だね』

「…だから?」

『…あう…』

少女が何を言っても、少年は原稿用紙一行分の言葉でしか返さない。沈黙。気まずい雰囲気。そのとき、珍しく少年の方から口を開いた。

「なんで…」

『ん？』

少年は言った。

「なんで来るの…なんで…僕を…止めたの…」

平手打ちの音。少女は怒った。

『馬鹿っ！何でそんな事を言うの！クロノ君が死んじゃったら、みんな悲しむよ！！』

「ふざけるな！お前に、お前なんかには、僕の今まで受けた苦しみが分かるかっ！！そんな偽善的な言葉で僕を慰めないでくれ！！」

自分より体の大きい少女の胸ぐらを掴む少年。しかし少女は悲しそうに言った。

『そうかもしれない…でも、そんなの…悲しすぎるよっ…！！』

少年は涙を流す少女の気持ちを理解できなかった。



「……………」

迫りくる量産型たち。半壊状態のデバイスを手に、クロノは窮地に陥っていた。しかし、それを感じさせぬ動きで、彼女たちを翻弄する！！

「ふふふ。搦め手勝負では負けないのでね。」

クロノは一撃必殺の決め手となる必殺技がない。格闘ゲームでタイムアップ勝ちを狙うようなキャラクター、それがクロノの戦闘スタイルだ。だが、このような単騎突入の戦闘では相性が悪すぎた。一撃で沈められないのである。だが、それは彼が努力で補っていた。彼は天才ではない。秀才であった。人が一回で終わらせるものを、彼は十回、二十回と繰り返した。だから彼には負けない自信がある。今までの自分が武器であり、プライドであった。

「クレイモア・バインド！！」

クロノが地面に手をつけると、円形の魔力弾が地面にくっつく。追ってくる敵を見ながら、逃げざまに設置していく。ターゲットを破壊するため、一直線に追いかけてくる量産型たち。クロノの口に笑みが浮かんだ。量産型たちが魔力弾の上を通過しようとした瞬間、クロノが地面に降り立ち、背を向けて右手を掲げる。彼は静かに言った。

「起爆」

指をパチンと鳴らすと、数十の魔力弾が一斉に爆発する！！吹き飛ばされるフェイトとアルフ。土煙がはれると、そこには自分の来た道を完全に塞ぐ瓦礫の山だった。

「ふう。後処理完了つと…」

クロノは目の前の鉄の巨大な扉を睨みつけた。

「さあて、これがパンドラの箱にならねばいいんだがね…」

魔力弾で鍵をこじ開けると、全身を使って扉を開く。そこに広がっていた光景は

「うわっはっはっは！皆殺しにしてやるぜ！！」

両手にゲッタートマホークを持ち、フェイトたちを八つ裂きにする竜馬もといブラックゲッターの姿であった。

「最近出番がなかったからな。大暴れしてやるぜ。ゲッターアアアアアアビイイイイイムツ！！」

粉々に粉碎されるフェイト達。竜馬はふと背中に気配を感じた。

「！？誰だっ！！」

「ははは。あなたもこれだけの量の敵には苦戦しているようだね。」

「

振り向くと、そこにいたのはクロノであった。

「はあ？何で俺がこんなザコどもに苦戦しなくちゃならねえんだ。」

「じゃあ、その肩の傷は何だい？」

クロノがくいつと首を動かす。竜馬が見ると、右の肩の装甲に傷が一本入っていた。

「ふん。お前に言われる筋合いはねえな。」

「ふふふ、それを言われたらおしまいだな。でも、足手まといにはならないつもりだ。一人よりも二人…って言うだろ？」

「フツ…遅れるんじゃないぞ！！」

「応！！」

竜馬とクロノが二手に分かれる。ゲッタートマホークで相変わらず切り刻む竜馬に対しクロノは

「だあっ！！」

飛び蹴りを顔面に直撃させると、肘を腹に叩き、アッパーで体を浮き上がらせる。フェイトが浮き上がった状態のまま、回し蹴りで横に蹴り飛ばす。後ろから襲いかかるアルフを裏拳で沈めると、竜馬は言った。

「まったく、そんなのいつまで時間かけてるんだ!!」

竜馬は背中から1メートルはある巨大な筒を二本両手に構えた。

「ゲッタアアアアアバズウウウウウカツ!!」

発射されたミサイル弾が、フェイトやアルフが固まっていた場所に撃ち込まれる!木っ端微塵になり、焼けた少女の足や胴体、顔面の焼けただれた頭部が散らばる。火薬と人肉の焼けた臭いが鼻に付く。

「あなたが異常なんだよ…っ!?!」

クロノはそういうと驚愕の表情で動きを止めた。

「!?!?どうした、坊主!!」

「見る!奴らの動きが!?!」

クロノが言うが否や、量産型たちはブルブル震えると、すべて倒れてしまった。

「誰かが駆動炉を破壊したようだな。」

「ああ…って、プレシアは!?!」

クロノは見渡すが、辺りには死体の山が築かれているだけだった。

「ちっ、あのババア。なんか光ったと思ったら下へ逃げやがった。」

竜馬が指差す先には、直径5メートルほどの穴が床にあいていた。

「あのカプセルの中身はともかく、ババアめ、何か切り札を隠し持っているみてえだ。あれほどのフェイトとアルフを送り込んできた人間だ。このまま引き下がるとも考えられん。行くぞ、坊主！」

「わかった……って、急に行くな！それに僕に命令「黙れっ！置いていくぞ……！」

そういうと二人は、部屋の奥へと突入していった。

チェンジ21 氷のプライド（後書き）

最近いいことない緒方です。ここんとこ夜冷えますよね。体調管理はしっかりしましょう。ではでは。

ファイナルチェンジ さらばゲッターロボ 前編(前書き)

ついに最終章突入!!!物語は最悪の方向へ!?

ファイナルチェンジ さらばゲッターロボ 前編

平凡な小学三年生だった私、高町なのはに訪れた事件  
人知れず、小さなひとつの物語が

終焉を迎えようとしていました

受け取ったのは 勇気の心

手にしたのは 魔法の力

みんなそれぞれ違う想い

ぶつかり合うことも

食い違うこともあるけど

でも、私は分かりあえると信じて

君と一緒になら、何処までだって飛べる

そう信じて

チェンジー！  
真リリカルなのは 最終回 はじまります。

ファイナルチェンジ さらばゲッターロボ 前編



アースラでは懸命な搜索が行われていた。

「ちょっと、まだ割り出せないの、エイミー!!」

「待つてください艦長。こっちの探索魔法が全部ブロックされてしまつんです!!」

リンディが代わりに操作するが、出てくる文字はエラーの文字のみ。彼女はいら立ちを隠せなかった。

「くっ…大の大人がこんな肝心な時に動けないなんてね…!!」

吐き捨てるように言うと、リンディはディスプレイを殴りつけた。

320

「はあ、はあ…くそ、いつまで続くんだ!!」

「うるせえ!文句あるんだつたら今すぐ帰りやがれ!!」

「ああ、帰りたかつたらそうしてるさ!!」

青白い光が怪しく光る回廊を、ふたつの黒い影が走り去っていく。小柄な少年は杖を、鎧で完全武装した男は斧を構え、走っていく。ふと前方に合流地点が見えてきた。そこから飛び出してきたものを見たとき、ふたりは固まった。

「あ、あれは!?!もう機能停止したはずなのに!!」

「くっ、フェイトか！！ぶち殺してやる！！」

先手必勝とばかりに躍り出る竜馬。だが当の本人は

「ひっ！？」

声を出しておびえるあたり、本物であると判断した竜馬であった。

「んったく、まどろっこしいんだよ！本物なら本物だとハッキリ言ったらどうだー！！」

(うっ…急に襲いかかってきたくせに…)

「ああ！何だその目は！俺になんか文句でもあるのか！！」

「す、すみません…」

竜馬がぎゃあぎゃあ言っている横では、合流したなのはクロノ、そしてアルフが話をしていた。その中にはユーノの姿はなかった。

「じゃあ、量産型フェイトとアルフの駆動炉を破壊したのは…」

「あのフェレットだったってことだね…」

「ユーノ君…！！」

ユーノと連絡が取れない事で苦虫を噛み潰したような表情を浮か

べる三人。すると突然竜馬が言った。

「俺はその場にいなかったからわからねえが…これは俺の勘だが、奴は生きていると思う。」

竜馬はつづけた。

「大体話は聞いたが、あれほどの腕前の人間が、こうもあっさり  
と死ぬとは思えねえ。それよりもテストアロツサのババアを止めねえ  
限り、いつまでたつても脱出できねえ。本艦とも連絡が取れないん  
だろ、坊主。」

「ああ。通信魔法がかなり強力なジャミングで妨害されている。  
恐らくアースラからの支援は絶望的と考えていいだろう。」

「うん。念話すらもろくに通じなかったし…」

クロノはとりあえずその場をまとめると、竜馬のところへ向かっ  
た。

「…スクライアについては後に当たる。それよりも「プレシアの  
制圧…だろ？」…ああ。さて」

もう何度も現れている鉄の扉。お気づきだろうが大概この奥には  
敵がいて、重要なイベントが起こる…って、もうパターンだよな。

「…みんな、準備はいいか？」

クロノの声に一同がうなづく。

「…いくぞっ!!」

クロノと竜馬が扉をこじ開ける!!そこにいたのは

「母…さん…」

背を向け、カプセルを抱えるプレシアの姿だった。

「プレシア・テストアロツサ!!お前の駆動炉はすべて僕たちが破壊した!この次元震も、艦の方ですぐ止められるはずだ。もうお前に勝ち目はない。おとなしく降伏しろ!!」

するとプレシアは嘲るかのように笑った。

「…勝ち目がない…?クツ…クク…クハハハ!!」

プレシアは言った。

「あんなものただの捨て駒にすぎないわ。それで勝ったつもり?ずいぶんと樂觀的な連中ね。」

しかしクロノは喰い下がった。

「樂觀的なのはお前の方だ。アルハザードなどという絵空事にすぎ、仮に行けたとしてもどうするつもりなんだ!失った時間と過ちを取り戻すのか?」

「ハッ、何も分からぬ愚か者どもが。そう、私は取り戻すのよ。私とアリシアの過去を、未来を。こんなはずじゃなかった、世界の



ロツサじゃありません。貴方が作ったただの人形…いえ、そのごみの一部なのかもしれません。だけど、私は、フェイト・テストロツサは、貴方に生み出してもらった、育ててもらった、貴方の娘です。」

「娘エ？このゴミが？それに今こいつ自分で自分の事ゴミって認めたよね。プププ…ヒヤハハハハハ！ハハハ、最高！あんた芸人になれるわよ。それも、あんな…ひひひ…緊迫した状況で…あ、やば。ツボっちゃった…きゃはははははは！！」

「て、手前！！」「よせ、犬！！」「は、離せっ！！」

怒りで激昂するアルフを力づくで押さえつける竜馬。しかしフェイトは表情一つ変えずに言った。

「…そうかもしれない。でも、プレシア・テストロツサ。貴方の言葉が本当ならば、私はここにはいないわ。」

「何…ですって…！！」

フェイトは言った。

「確かに自我を持った面では他よりも珍しかったと思う。でも、気に入らなければ貴方はその場で私を殺す事ができたはずだわ。今までの子たちみたいに。」

フェイトはつづけた。

「ジュエルシード収集が目的ならば、『私』を何体を送り込んで検索すれば手っ取り早いし、私に魔法を教えたのも、量産機ならば



「む…無傷…だと!!?」

無傷で顔色一つ変えないプレシアの姿だった。

「あら?これで終わり?」

余裕綽々のプレシアに舌打ちする竜馬。なのはが前に出た。

「なら、私が!デイバイイイイン・バスターアアアアアアア!  
!」

メガ粒子砲レベルの砲撃がプレシアに迫る!だが

「ふん。」

彼女をドームの様なシールドが覆い、完全に無効化してしまった!  
!?

「そんな!?デイバインバスターが通用しないなんて!!」

驚愕するなのは。今度はアルフとクロノが出た。

「完全防御か。だが」

「バインドで封じれば、勝てるよ!!」

二人の放ったバインドがプレシアを拘束する。光の輪が彼女に触れようとしたその時!!



「き、消えた!?!」

何とプレシアが一瞬で消えたのだ!見渡すクロノとアルフ。しかしその直後、背後からの激しい衝撃が彼らを襲った。プレシアだった。

「瞬間…移動だと…!!」

「くっ、何てチートなんだ、あの鬼婆!!」

プレシアはほくそ笑みながら言った。

「核兵器も通用しない、360度の全く死角のない防御障壁。何度でも使える瞬間移動能力。そして…」

彼女は手をかざして言った。

「絶大な威力の…砲撃魔法!!」

その直後、8つの蛇の口が開き、光が収束されていく。その光景は、高町なのはの最強の砲撃魔法と酷似していた。

「あ…あれは…!!」

「そう…スターライト・ブレイカー!!」

スターライトブレイカーは、溜めに凄く時間のかかる砲撃魔法だ。バインドで拘束して、それも一対一でしかその効力を発揮しない。的になってしまうからだ。だがプレシアは、それを8発、しかも一瞬で溜め、放ったのだ!!

「きゃああああー!!」

「くっ…デタラメすぎる!!」

「完全な防御。完全な機動性。完全な攻撃。私の敗因がどこにあると思つて?」

しかしその時だった!!

「フォトンランサー・ファランクスシフト!!」

フェイトの声が煙の中から響く!

「ファイア!!」

降り注ぐ魔力弾!!しかしそれだけではなかった!!

「これで終わらせる…!!これが私の全力全開!!」

「スターライト…ブレイカアアアアアア!!」

二人の少女の最強の魔法がプレシアを襲う!流石にプレシアとて、8発のスターライトブレイカーを放った後では身動きが取れない。絶好のチャンスだった。だが!!

「ふん。愚か者どもが!!」

8つの蛇がプレシアを囲み、何かのフィールドを作り出す。確かに魔法は命中した。だがその光景を見たとき、彼女たちには絶望の

二文字が浮かんだ。

「え！？」

「吸収…されてる?!」

ふたりはまだ幼い少女とはいえ、その威力は計り知れない。だが、プレシアはその魔法攻撃をすべて吸収してしまったのだ!!しかもただ吸収したのではなかった。

「逃すか!!」

フィールドを開放し、フォトンランサーとスターライトブレイカーを同時に撃ってきたのだ!!それも2倍の威力で!!プレシア・テスタロッサ。彼女はすべての常識を覆す、大魔導師だった。

「私たちの攻撃が…すべて通用しないなんて!!」

分かり切っている事を、なのははつぶやいた。ぼろぼろのバリアジャケット。満身創痍の味方たち。無傷のプレシア。状況は、絶望的。勝ち目はなかった。

「何、それは当然のことよ。身の程も知らぬ者よ。結局はあなたたちは、自分の力に酔っていただけなのよ。」

そして言った。



ゲッタービームを発射するが、瞬時にバリアを張られて無効化される。

「次はこいつだ！ゲッターアアアアマシンガンッ！！」

両腕にマシンガンを装てんして発射するが、やはりこれも防がれる。

「ちっ！打つ手はねえのか！！」

『こつちも武器を検索しているが…くそっ！あのババアごときに遅れを取るなんてな！！』

直後、プレシアの蛇の頭が槍の様な形に変形する。

「下らないわ。死になさい。」

8匹の蛇が彼らを串刺しにすべく、地面をえぐり、貫きながら襲いかかる！最後の力を振り絞り、逃げることしかできないのはたち。そのとき、なのはがつまづき、転んでしまった。

「なのはっ！？」

「くそっ、間に合わないっ！！」

助けに入ろうとするが、距離が離れすぎている。蛇がなのはを串刺しにしようとしたその時！！

「伏せろ、ガキ！！」



「馬鹿者が!!」

すると突然、プレシアの腕が黒く変色した。そして次の瞬間!!

「ぐあああああああ!!」

プレシアの腕が黒い10本の槍の様になり、ブラックゲッターを串刺しにする!!眉間を、右目を、左胸を、手足を串刺しにされ、吊るし上げられる竜馬。おびたしいオイルが雨の様に降り注ぐ。引き抜かれると、槍はプレシアの手に戻った。

地面に叩きつけられる竜馬。ぼろぼろになりながらも、ふらつきながら立ち上がる。何とかして立ち上がったその時

「!!!!!!!!」

蛇が

「いやあああああああああああああ!!!!」

竜馬の腹を

『竜馬っ!!』

貫いていた

ファイナルチェンジ さらばゲッターロボ 前編(後書き)

次回、括目して、待て



ファイナルチェンジ さらばゲッターロボ 後編(前書き)

ついに最終回です。

ファイナルチェンジ さらばゲッターロボ 後編

海鳴市 八神家

その日は激しい雨だった。朝からの雷雨。そして地震。嫌な予感が少女の胸を駆ける。

（地震…いや、世界全体が震えてるみたいやった…）

少女は一枚の写真立てを抱きしめる。それには少女自身と紫の髪の少女、そして

（リョウ兄…ムサシさん…無事で帰ってきてな…！！）

ファイナルチェンジ さらばゲッターロボ 後編

「ぐ…があっ…！」

ブラックゲッターの口を覆う装甲から血が噴きあがり、ゆっくりと赤い瞳が消えていく。ゲッター1と同じ黄色い目になると、ブツツと音を立てて眼の光が消えた。まるで糸の切れた操り人形のように腕をだらりと垂らす竜馬。武蔵がいくら声をかけても反応しない。

『竜馬！馬鹿野郎！こんなところで何昼寝なんてしてるんだ…！』

武蔵は言った。

『こんなところで死ぬんじゃねえ！あのババアに目に物見せるんじやなかったのかよ！はやてとした約束はどうなる。一人だけかつこつけるんじゃねえ！！』

武蔵は叫んだ。

『竜馬！手前の名は、そんな軽いもんじゃねえ！俺の知ってる竜馬はそんな男じゃなかった。目がつぶれようが、耳がなくなるうが、手足がもげようが、あいつは…あいつはそれでも立ち上がった。だから立てっ！竜馬ああああああ！！』

その時だった

「…るせえ…耳元で…でかい声…出すんじゃ…ねえ…」

ブラックゲッターの目に、光と瞳が再び宿る。だが、様子がおかしかった。

『おい…リヨウ！お前まさか…』

武蔵の悪い予感的中した。

「ふふ…ゲッターはまだ動けるが、俺の方が参っちまった。」

モニターに映る竜馬…その顔は血まみれで、目は白く白濁していた。

「すまねえな。だらしねえが目も見えねえし、耳も聞こえねえ。

この中の『会話』しかできねえな。」

『おい、リヨウ！お前…』

竜馬は言った。

「ふふ。俺はな、今まで負け知らずだった。まるで物語の主人公気分だった。」

彼はつづけた。

「だが、どうだい。こんな無様な姿は。これが俺への罰かよ。そりゃないぜ。」

『竜馬！訳の分からねえこと言ってるんじゃないやねえ！』

竜馬は引きつった笑みで言った。

「ムサシ。すまなかった。ここはオープンゲットしてお前だけでもはやてのもとへ帰してやりたかったが…どうやら無理なようだ。」

『何を馬鹿なことを。手前よりデバイスの心配する奴がどこにいるんだ！』

竜馬は真剣な眼差しで言った。

『すまねえ、ムサシ。どうやらお前を地獄への道連れにしちまうようだ。だがな、ムサシ。俺はお前を片時もデバイスとは思ってはいなかった。俺の中のお前は、いつも初代ゲッターチームの巴蔵だった。』

竜馬は言った。

「…ムサシ。ジャガー号の炉心は生きてるか？」

武蔵は一呼吸置いて

『…ああ。ギリギリ助かってるぜ。』

「それが何を意味してるか…お前には分かるだろ？ムサシ。」

竜馬は笑いながら言った。

「…今ここで、高町たちを死なすわけにはいかねえ。消えるのは、イレギュラーだけで十分さ。」

『竜馬…』

竜馬は言った。

「だから、ムサシ。これが俺の最期の頼みだ。俺の目となり、耳になってくれ！！」

『…おう。分かったぜ…竜馬！！』

「ああっ！！リョウさんを助けないと！！」

なのははディバインバスターを撃とうとするも、エネルギー切れで撃てない。フェイトがやっとの思いで放ったハーケンセイバーも、

大蛇の甲殻に傷一つつける事が出来なかった。

「どうしよう…どうすればっ！！」

焦るフェイト。そんな中、クロノの頭に念話が届いた。

『聞こえるか？坊主…』

『！？リヨウなのか！大丈夫か！！』

竜馬は言った。

『…お前に最後の頼みがある。高町たちを連れて、できるだけ遠くへ逃げる。できるだけ遠くだ。走り続けるんだ。』

クロノは言った。

『そんな…！じゃあ、あなたは！！』

『俺の事は構うな！…どの道もう助からん。だが、お前らと心を通ずるつもりはさらさらねえ。まだ10もいかねえガキどもを死なすほど、俺も落ちちやいなえよ。』

竜馬はフツと笑うと言った。

『俺はお前を見込んでいるからこうして話しているんだ。後の連中じゃ俺を助けるとか絶対抜かすからな。』

『…っ！…！』

クロノは言った。

『…わかりました。…すみませんっ!』

『何、礼をされるような事なんざしてねえよ。行きな。』

クロノはなのは達のもとへ行った。

「なのは! フェイト! アルフ! ここから脱出するぞ。急いで離脱しろ!」

「クロノ君! そんなことしたらリョウさんが!」

クロノはぎりりと歯を噛みしめて言った。

「…彼からの頼みだ。できるだけ遠くへ逃げろ…だそつだ。」

「そんな!」

フェイトがそう言うと、竜馬が言った。

「…ああ。そつだぜ。」

くいつと上を見上げて言った。

「俺が最後のチャンスを作る。その隙に全員逃げろ。これは命令だ。」

「でも…」

「いいから早くしろっ!!」

その時だった。

「ヒヤハハハ!そういう事は念話ですものねえ。」

プレシアが腕を変形させ、無数の槍をなのはたちに伸ばす!しかしその時っ!!

「トマホオオオオク・ブウウウウウメラント!!」

プレシアの触手をゲッタートマホークが切り裂く!

『リヨウ、右上だ!!』

「わかったぜ!ゲッターアアアアバズウウウウカツ!!」

バズーカ砲から発射されたミサイル弾で、プレシアは自動防御を発動させる!プレシアのシールドが自動なのに、竜馬は目を付けた。こちらから攻撃を加えれば、なのはたちを逃がすだけの時間稼ぎはできるのだ。

「あんた…いくよ、フェイト!!」

「う…うん…!!」

アルフがフェイトの手をつなぎ、脱出する。そしてクロノがなのはを連れてきた。

「…行くんだ。これが彼の言葉だ。」





「リヨウさんっ……!!」

「……………」

来た道を走る四人。クロノ以外は、皆涙を流していた。

「ありがとっつて言えなかった……ごめんなさいって言えなかった。

」

なのはが走りながら言う。

「最後の最後で……結局彼がいなかったら、私たちは何一つできなかったっ!!」

フェイトが大粒の涙を流して言う。

「バカヤロウ……結局……結局あんただけが全部背負いやがって!!」

アルフが言ったその時だった。

「待つて。……その足じゃ、たかが知れてるでしょ?」

急に響く声。ふと先頭のクロノが前を見ると

「ふふ……久しぶりだね。」

壁にもたれかかり、地面に座っているユーノの姿だった。

「ユーノ君!!」

ユーノに泣きつくなのは。なのはの頭を優しくなでるユーノ。手足の義足はほとんど残ってはいなかった。

「僕が転送魔法を発動する。これで君たちはアースラに戻れるはずだ。」

「でも、あんたその腕じゃ!!」

そう言うアルフにクロノは言った。

「大丈夫だ。彼の属するスクライア族は、片手だけでも補助魔法が使える、特殊な一族なんだ。でも、それだと魔法陣を安定させるために君が…」

ユーノは言った。

「…何、僕はただの死にそびれさ。時間はない。行くよ!!」

ユーノは座ったまま印をきる。すると彼の前に転送ゲートが浮かび上がった!!

「行つて!!」

転送魔法は、術者が最後まで外で安定させないと発動できない。それはユーノの死を意味していた。フェイト、アルフ、クロノ。最後になのはが入るうとしたそのとき

「え…!?!」

自分の生身の手を掴む手。引き寄せられる体。その先には

「これ以上…目の前で、誰かが死んで行くななんて嫌だから！お願い、レイジングハート！！」

『All right, my master.』

しっかりとその手はユーノを掴む。閉まっていく魔法陣。だが

「デイバイイイイイン・バスタアアアアアア！！」

デイバインバスターをユーノすれすれに発射する！！

（お願い！ユーノ君を…助けてっ！！）

その瞬間、なのはの視界を光が覆った。

「くっ！貴様、何故邪魔をした！！」

怒りに顔をゆがめるプレシア。それとは対照的に竜馬は静かに言った。

「そろそろの様だな。いくぜ、ムサシ。」

『おう。ゲッターエネルギー、フルパワー！！』

ビーン…ビーン…

機械の機動音の様な音が、辺りに響く。プレシアに異常が起こったのは、それからすぐの事だった。

「なっ！？マグマでも溶けぬ鋼鉄の大蛇が！？」

なんとなのはたちの砲撃魔法でも傷一つ付かなかった竜馬に刺さった大蛇が、ドロドロと溶け始めたのだ。急いで引き抜くが、頭部は完全に融解してしまった。

「ば、馬鹿なッ！！一体何が！！」

凄く高熱を発するブラックゲッター。その腕が腹の穴をこじ開けたとき、緑色の光が機体を覆った。

「フッフ…ちったあ驚いたか、糞ババア。これがゲッター最大の力だ。」

この顔はケロイド状に焼けただれていた。そして武蔵が言った。

『驚いてもらわなくちゃ困るんだよな…へへ。一度経験しているとはいえ、ゲッターエネルギーをフル回転させたらこんなに凄いとは思わなかったぜ。』

ゲッターの腕が、腹から緑に光る機械をえぐりだし、空高く掲げる。そう、それこそが

「そう。これが貴様らインベーターの餌であり、最も恐ろしかった、ゲッター・エネルギー・タンクだ。」

ゲッター炉心を掲げると、竜馬と武蔵は声をそろえて言った。

「『熱い血潮も、涙も流さねえ、冷血糞ババア！！』」

「ば、馬鹿な…！！」

うつたえるプレシア。竜馬と武蔵は言い放った！！

「『貴様らを絶滅させたエネルギーの源だ。こいつでもう一度滅びやがれええええええええ！！』」

ブラックゲッターが、炉心を握りつぶす！！放たれる光。プレシアはシールドを張るも、ゲッターの自爆を防ぎきれなかった。

「ぐ…ぐああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

プレシアの腹から、黒いインベーターが逃げ出そうとする。だが

「逃さ…ないわ…！！」

プレシアはなんと、インベーターを掴んだのだ！！その時の彼女の顔は、優しかったころの顔に戻っていた。

「フェイト。アルフ。そして小さな勇者たち…私が引けるレールは、これが最後よ。後はあなたたちの手で開きなさい！人類の未来を…！！」

最後にプレシアは言った。

「…フェイト。ごめんね。そして、ありがとう。あなたは、ずっと私の娘のフェイトだから…」

そして

「さらばだっ…！」

その日、一つの次元世界が、時の庭園ごと消滅した。これが、後にP・S事件と呼ばれる事件の幕引きであった。事の真相を知る者は少ない。そう、彼らは…

ファイナルチェンジ さらばゲッターロボ 後編(後書き)

次回、エピソードです。



エピソード(前書き)

完結なの

## エピローグ

その日は、晴れであった。気象庁がいろいろ騒いでいるも、昨日までの突然の嵐や地震は止み、ここ海鳴市にはいつものような平穏が戻っていた。

そして一週間が経ち、誰もが今までのことは忘れたように、動き出す。そして物語は、ひっそりとその幕を閉じようとしていた。

## エピローグ DRAGON

「俺は…生きている…のか…?」

男が目を覚ますと、冷たさと浮遊感が。そして失ったはずの視覚と聴覚が戻っていた。見渡すと、自分は海の上に浮かんでいることに気がついた。だがブラックゲッターの損傷は激しく、両腕と左足は無くなり、腹には大きな穴が開いていた。

「武蔵…ムサシっ！返事しろ、ムサシ…!」

竜馬が必死にデバイスに声をかける。何度か声をかけていると

『あ痛たたた…へへ、丈夫が自慢の武蔵さんでえ。ピンピンしとりまっせ!』

竜馬はその言葉を聞くと、肩の力が抜けてしまった。

「…んで、おまえはそう思っているのか。」

『ああ。少々気に食わねえが。』

「ああ。全くだ。」

俺がこうして生きている理由。武蔵に聞いてみたら、プレシアの奴が俺に転送魔法と回復魔法をかけたそうだ。なんでも正気に戻った後、最後の最後で俺たちを逃がしたらしい。謝罪の言葉込みで。少々納得がいかないが…でも、これでよかったのかもしれない。

「…これでよかったのかもな。プレシアも魂の牢獄から解き放たれた。元々死んだ人間だったんだ。ただ…」

『生まれてきた娘は、悲しみに取り残された…か。あのアリシアとか言う嬢ちゃんも、それを伝えたかったのかもな。』

「だが、死人に口なしさ。どうであれ、死んじまったらすべて終わりなんだ。へへ、こうなっちまったらただの死にぞこないだな。」

竜馬はとりあえずチェンジを解除すると、砂浜のほうへ泳いで行った。

「あー…寒い!..!」

『そりゃ、まだ5月だし…!』

「畜生…プレシアめ、海に落とすことはないだろ。」

ぶつぶつ文句を言っていると、海岸の公園で見慣れた連中の姿を見つけた。すばやく防波堤の裏に潜ると、上から声が聞こえてきた。

『ユーノ君は、まだ入院中だつて。全治一カ月で手術が必要つて言つてた。』

高町の声だ。アニメで言うところの最終回ラストだな。

『うん。それに…リヨウさんが…』

フェイトの声だ。すると、泣きながら高町が

『わたし…いつも助けてもらうばかりで、何も力になれなかった！フェイトちゃんが、ユーノ君が、アルフさんやクロノ君やリヨウさんや…わたしのせいでリヨウさんが…！…』

『…顔をあげて、なのは。』

フェイトは優しく言った。

『悔しいのも、悲しいのも、私も一緒。でも、そんな気持ちも半分こにできるつて…なのはは言つてたよね。』

『ふえ？』

こうシリアスで来て「ふえ？」かよ…ひよつとしたらコイツ、クロノ以上の大物かもしれん。冷静に見ると、なのはつてクロノよりもKY発言多い気がするの気のせいだろうか？そういえばこの笑い

方しなくなるよな。誰かに指摘されたのか？んなことどうでもいいけど。

『友達に、なりたいんだ。』

フェイトが凄く照れてるのが、声だけ聞いてても良く分かった。

『えっと…あのね…わたし、アルフ以外に友達を作った事がないから分からないけど…』

『…簡単だよ。』

高町はきつと、太陽の様な笑顔で言ったに違いない。

『なまえをよんで。』

ここから先は、俺は何も言わない。その声を聞いていると、何日ぶりだろうか。はやてといた時の笑顔が自然と顔に出ていた。

『ほお？お前もそんな風に笑うんだ。』

「フフ…ほんとガキどものすることは…」

帰ったらはやてがどんな顔をするか。少々覚悟しながら。でも

「くすぐったくて、たまんねえな。」

完

郎)  
オープニングテーマ「今がその時だ」(水木一

エンディングテーマ「Little Wish  
lyrical step」(田村ゆかり)

だが

戦いは、つづく！！



## エピローグ（後書き）

これが作者の妄想OP&EDです。しかし、まあ何とか書いてくれました。一応無印編完結ということで、次回作は別の作品として執筆しますので、少しチェックをしていただくと幸いです。

アリシアは、死亡という形にしました。こちらの方が自然ですし、母親と共に眠らせてあげた方がいいと思ったのでそうしました。色々謎をはらんだキャラクターでしたが、この辺は後々明らかにしていくつもりです。

さて、ここでひとまず充電時間をいただきます。しかし、私は必ず帰ってきます。最後にこの小説に感想や評価を入れてくれた方、それだけではなくこの作品をちらっとでも見てくれた方全員に、ぜひとも一言言わせてください。

ありがとうございました。そしてこれからもチエンなのをよろしくお願いしますー！！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0280m/>

---

真《チェンジ！！》リリカルなのは

2011年3月29日20時51分発行